

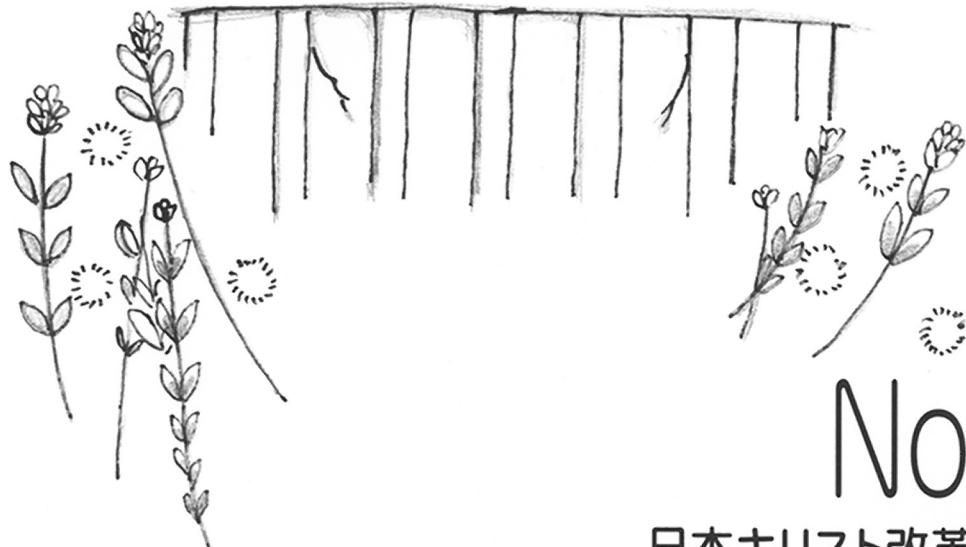
教会学校教案誌

2013.10.11.12月号



★
鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、
神よ。私のたましいはあなたを慕いあえます。
★

詩篇42篇1節



No.51

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2013年10～12月カリキュラム (第51号)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
10月6日	神の御言葉—説教—	問69	—
		ローマ10:14-17	ローマ10:17
説教をとおして語られる生ける神の御言葉を聞き取るう			
13日	御言葉への聴従	問70	ウ小89, 90, ウ大155-160
		テモテニ3:10-17	テモテニ3:14
神への愛と奉仕として、御言葉に聞き従う歩みに励もう			
20日	礼典	問71	ジュネ309-322, ウ大161-164他
		コリントー11:23-29	コリントー11:28
礼典によって私たちの信仰が強められる。聖霊の祝福のうちに生きよう			
27日 宗教改革記念	宗教改革	問24	ウ小33, ウ大32, ハイデ56他
		詩編32:1-7	詩32:7
宗教改革と私たちの教会の歴史を学び、その信仰告白を受け継いで歩もう			
11月3日	洗礼	問72, 73	ウ小94, 95
		使徒2:36-42	使徒2:38
洗礼の恵みを知り、信仰告白と洗礼に招こう			
10日	主の晩餐	問74, 75	ウ小96, 97
		マタイ26:26-30	マタイ26:26-28
聖餐の恵みを知り、聖餐の食卓へと招こう			
17日	祈りとは何か (一)	問76	—
		ヨハネ14:1-14	ヨハネ14:6
祈りは神の御心を聞くこと。御言葉に耳を傾けることから始めよう			
24日	祈りとは何か (二)	問76	ウ小98, ウ大184
		フィリピ4:6, 7	フィリピ4:6, 7
主なる神を信頼して、どんなことでも素直にお祈りしよう			
12月1日 アドベント	インマヌエル預言	—	ハイデ28, 47, 53
		イザヤ7:1-17	マタイ1:23
神と私たちを結ぶしるしである救い主キリストを待ち望もう			
8日 アドベント	平和の君	—	—
		イザヤ9:1-6	マタイ5:9
平和の君キリストを待ち望み、平和の完成のために仕えよう			
15日 アドベント	ヨセフへの告知	—	子ども22, 23
		マタイ1:18-25	マタイ1:23
「神は我々と共におられる」。インマヌエルのおとずれを喜ぼう			
22日 降誕祭	占星術の学者たちの礼拝	—	—
		マタイ2:1-12	ローマ12:1
キリストの降誕を喜び、感謝をささげて、神をほめたたえよう			
29日 年末	一年の感謝	—	ジュネ111, ウ小20, ウ大80他
		詩編103:1-5	ヨハネー4:10
主の御計らいを心に留め、与えられた日々を感謝をもって振り返ろう			

も く じ

2013年10・11・12月カリキュラム

まえがき	伊藤 治郎	4
巻頭説教	片岡 継	5
日曜学校・教会学校訪問		
田無教会日曜学校の紹介	間中日登美	8
東部中会教会教育研修会報告		13
「託されている祝福と責任 ～主の日につながる家庭の営み～」		
副読本のご案内		24

聖書黙想・説教展開例・分級展開例

10月 6日	26
10月13日	33
10月20日	38
10月27日	44
11月 3日	51
11月10日	57
11月17日	62
11月24日	67
12月 1日	73
12月 8日	80
12月15日	87
12月22日	93
12月29日	98

2014年1・2・3月カリキュラム

2013年度年間カリキュラム	104
自由募金のお願い	106
執筆者よりひとこと・あとがき	107

まえがき

伊藤治郎（四日市教会長老）

高校生のころから子どもの本が好きでした。特に子どもの文化や教育ということに興味があったわけではなく、ただ自分が読む物として好きだったのです。そのころ（今から40年近く前のことです）は先年映画化されて大ヒットした「ロード・オブ・ザ・リング」の原作である「指輪物語」が翻訳出版されたところで、ファンタジーブームの幕開きのころだったでしょうか。「ナルニア国物語」や「ゲド戦記」など、面白い本を見つけるのが楽しみでした。

そんな中で気がついたことが、「子どもの本というのは、大切なことをわかりやすい言葉で語っているものだ」ということでした。当時は学園紛争の残り火がくすぶっていた頃でしたから、学生たちは好んで難しい「漢字の言葉」を使いたがりました。私もそんな流れの中で、難しい言い回しをしてみようと試みたりしたこともあります。傍らで読んでいた子どもの本のおかげで、いつしか「大切なことをわかりやすい言葉で伝えていこう」という思いに立つようになりました（難しい言葉に頭がついていけない、ということもあるのですが……）。

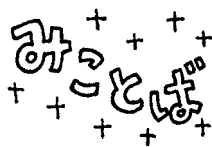
そして現在でも、子どもの教会でのお話や、礼拝式での奨励の奉仕において、私は、「大切なことをどうしたらわかりやすく伝えられるか」ということを考え、子どもにも大人にもわかりやすく語れるようにと祈っています。

子どもの教会においては、子どもたちに伝えたい大切なことは、教案誌のカリキュラムとし

て準備されています。これは本当に大きな恵みです。しかし、その「大切なこと」をどうやってわかりやすく語るのか、ということについては語る者の意識と訓練によらなければならないのではないか、と思っています。そして、そのために最も問われることは、「その大切なことを自分がどのように理解しているか」さらに「そこからどんな恵みを得ているか」ということであると考えています。

「漢字の言葉」を使うと、言葉の意味を吟味しなくてもなんとなくわかったような気になってしまいます。そうではなく、「漢字の言葉」の意味をどのように自分の言葉で理解し、そこから自分が得ている恵みをどんな言葉で表現していくのか。語る者にはそのことが問われているのだと思います。それはまた、語る者一人一人の信仰の告白の言葉を紡いでいく作業でもありましょう。私自身は、子どもに伝えられない「言葉」は、結局自分も自分のものとして理解できていないのではないかと考えています。

教案誌の主張の一つは、日曜学校は子どもの教会である、ということです。学校は知識を教えるところですが、教会は御言葉の恵みを共に喜び分かち合うところです。子どもたちよりも一歩先に恵みをいただいた大人として、その恵みの喜びをどう伝えていくか。まだまだ、思いはあれど言葉が足りない状態ですが、これからもそのことに思いを向けていきたいと祈っています。



教えることは教わること

～詩編131編による説教～

片岡 継（徳島教会牧師）

都に上る歌。ダビデの詩。

主よ、わたしの心は驕っていません。わたしの目は高くを見ていません。

大き過ぎることを わたしの及ばぬ驚くべきことを、追い求めません。

わたしは魂を沈黙させます。

わたしの魂を、幼子のように 母の胸にいる幼子のようにします。

イスラエルよ、主を待ち望め。今も、そしてとこしえに。

（詩編131編）

私たちが教会学校の教師として召され、奉仕する中にあって、子どもたちの現実や教会学校の現実を見つめるとき、しばしば打ち碎かれることがあるかと思います。自分の無力さを覚え、自分は教師に向いてないのではないかと。しかしそのようなときこそ、子どもたちに、また何より神に近づいているときなのかもしれません。

1. 自分の分をわきまえる

この詩編の最初の部分は、3度の否定をとおして自分自身の姿を見つめさせます。

「主よ、わたしの心は驕っていません。

わたしの目は高くを見ていません。

大き過ぎることを

わたしの及ばぬ驚くべきことを、

追い求めません」

自分の分をわきまえた慎みある言葉です。神の御前に立つ信仰者であるならば、当然の姿勢と言い得るでしょう。しかし私たちの奥深くに潜む姿、声はどうなのでしょう。「何とか子どもたちを正しく教えなければ。子どもたちを楽しませるためにはどうしたらよいのか。子どもたちに気に入られるにはどうしたらよいのか

……」などの声が聞こえてきます。この言葉自体には、ある面で「正しい声」として私たちの間に響きます。教会においても、気が付かないうちに、子どもの環境やその状態が見過ごされて語られることがあるからです。子どもたちに届く言葉を探し求め、それを教師自身が体現し続けることは言うまでもありません。むしろ、最初から知性に訴えかけることに重点を置きやすい側面があることは、改めるべきでしょう。

しかしそのような視点には、「教えなければならない」というある種の強迫観念に似たものが時に現れます。いつしか自分の立ち位置を見失ってしまい、子どもたちの状況に呑み込まれてしまう姿です。神の言葉を聴く前に、この環境や状況に真っ先に目がいく、そのような姿です。それは目に見えるものの方が、わかりやすく、気持ちを揺さぶるものがあるからだと思います。

私たちは、まず根本的に子どもも教師も神の御前にあって同じ地平に立っているということをもいつも確認しなければなりません。神の子どもとして同じところに立つ視点です。ですから教えるというのは、神の業（「驚くべきこと」、別訳では「不思議な業」）を自らの業とするの

ではなく、私たち自身が、神の業によって養われているという事実を子どもたちと共に確認する場なのです。

2. イエス・キリストの中を歩む続ける姿勢

私たちは御言葉を準備する中であって、どんどんと知識が増え、気が付かないうちに下から上へ昇りつめていきます。そして教える立場から、その知識や祈りの方法をただ提供するだけになってしまうことがあります。魂の震えが感じられない言葉として、子どもの耳に鳴り響く声としてしか伝わらないことがあるのです。

または、その反発で反対のこともあるでしょう。知識ばかり増やしてもだめだ。聖書と祈りとこの教案誌、または最低限の注解書があれば十分だとして、安易に悟ったように準備し、結局結果として、神の言葉ではなくて、その人自身にある言葉だけが子どもたちの耳に鳴り響くような現実です。

これらはどちらも「共に生きる」ことが見失われた姿ではないでしょうか。これはしかし、教会学校の教師だけでなく、牧師も含め、キリスト者であるならば永遠の課題です。どちらかに傾きやすいバランスの悪い私たちは、一筋の道であるイエス・キリストの中(in)を歩み続けるほかないからです。そのためにも私たちは今一度、神の御前に沈黙する時を大切にしたいのです。

3. 沈黙の中で見えてくる幸い

「わたしは魂を沈黙させます。

わたしの魂を、幼子のように

母の胸にいる幼子のようにします」

この御言葉にある沈黙は、絵に描けるような「平安」のイメージを私たちに思い起こさせます。まさにカルヴァンもこの「沈黙」という言葉を、「心安らかに」と訳しています。しかし、今はこの沈黙というのがとても耐えられな

いような環境に、子どもたちも、私たち自身も置かれているのではないのでしょうか。時間を短縮させてくれる便利なものが増えれば増えるほど、しかしもっと忙しく時間を過ごしている皮肉は、多くの人が指摘するとおりにかと思えます。早く、簡単に、楽しいものを求めやすい中であって、その反対のものは耐えられず、遠ざけてしまう現実は、その中にたたくむしかないような人に対する想像力をどんどんと枯渇させてしまっているように思えます。

ここでの「沈黙」という言葉は、また「静める」とも訳し得る言葉です。そしてそれに続く「幼子」は、乳飲み子ではなく、「乳離れする子」を意味しています。魂を沈黙させて静めたとき、乳飲み子は乳離れして、幼子になるのです(岩波訳「わが魂は私から乳離れました」)。この言葉を思い巡らすとき、主の御前に成長するとはどういうことか、またその場はどういったところかを考えさせられます。

沈黙が生まれる場。静けさの生まれる場。それは、私たちが見るほど複雑ではなく、もっとシンプルで、見えない部分に潜んでいる小さな灯のようなどころにあるのかもしれませんが。それを私たちは信仰の目を持って、見える燭台の上に置かなければならないでしょう。具体的な教会の状況、家庭の状況は違うのでどうしても抽象的な表現になりやすいですが、しかし主の御許で安らぐとき、それは明らかにされるはずで、見えなかったもの、または見過ごしていたものが、見えてくる幸いは、多くの聖書の登場人物が語るとおりです。

4. 見える神の言葉を待ち望む幸い

見えなかったものが、見えるものとなる。それは神の言葉にはかなりません。ヘブライ語のダールは、「言葉」と同時に「出来事」を意味します。神が「光あれ」と言われたその言葉は肉となります。世の光であるイエス・キリストその方です。しかし、天に昇られたイエス・

キリストは、今は目に見えません。なぜなら今は教会があるからです。聖霊なる神ご自身が、私たちに「キリスト者」（キリストのもの）という新しい名前を与えられ、教会を形作り、イエス・キリストの預言者（神の言葉を語る働き）、祭司（執り成す働き）、王（治め、管理する働き）としての務めを与えられたからです。

大胆に言うならば、神の言葉を中心に置くと、子どもたちは私たちを見て、ぼやけた形ですが、イエス・キリストを見ることができるようです。同時に、私たちは神の形に似せて造られ

た子どもたちのうちにイエス・キリストを見つめることができます。沈黙のうちに静まって神の言葉に聴いて、互いに見つめ合うとき、そこには共同体の言葉が生まれるのです。

「イスラエルよ、主を待ち望め。

今も、そしてとこしえに」

教える者は教えられ、教えられる者は教える者となる。なぜなら、私たちはやがて顔と顔を合わせて出会う、あの主を共に待ち望んでいるキリスト者だからです。



イエスさまが共に

田無教会日曜学校の紹介

間中日登美（田無教会日曜学校校長）

《はじめの一步》

“元気な日曜学校のある教会”、私たち家族3人が田無の地に引っ越して3年目、車で往復2時間の遠距離礼拝に限界を感じ、近くに教会を探し始めたときに一番の条件として挙げたことです。今から17年ほど前、長男が小学校一年生の頃でした。近隣の教会をあちこちと訪ね歩いた末、結局は一番家に近い徒歩1分の田無教会に導かれ、新たな教会生活を始めることとなりました。

ところが……「こちらには日曜学校はありますか？」という私の問いに、牧師先生はこう答えられました。「残念ながら今は子どもがいないので日曜学校は開いていません」。その時のがっかりした気持ちは今も忘れられないほどです。

仕方がないので、朝の礼拝が始まる30分ほど前に自宅で小さな日曜学校を開くことになり、息子と二人で神さまに向かい、賛美やお祈りや聖書のお話をするようになりました。“元気な日曜学校”は一体どこへ行ってしまったのだろうと思いながらの二人だけの日曜学校でした。

そうするうちに我家に待望の次男が与えられ、家庭での毎週の日曜学校が難しくなり始めた頃、教会員のご夫妻が「日曜学校を始めましょう」と名乗りを上げてくださいました。本当に嬉しく有難いお申し出でした。それからは、息子一人に教師二人という何とも贅沢な日曜学校が、田無教会で毎週開かれるようになりました。今の田無教会日曜学校の“はじめの一步”がこんなふうにして踏み出されていったのです。

《手作りの日曜学校》

最初は生徒一人だった日曜学校も、一人また一人と地域の未信者の家庭から子どもたちが加えられ、だんだんと賑やかになっていきました。分級では子どもたちが興味を持って楽しく参加できるようプログラムが生まれ、毎週のように工作や、ゲーム、クッキングなど、聖書のお話に絡めた手作りの教材を用意して、教会学校だよりも載せ近隣に毎月配布しました。

日曜学校の少ない予算の中で教材費の出費を少しでも抑えるために、包装紙や端布、ジュースの空き瓶やラップの芯など、できる限りのものを再利用するために、家族から呆れられながらもいつも心掛けてストックするようになりました。そして、それらの素材をどう生まれ変わらせるかに頭を悩ませながらも、教材準備はワクワクする楽しい時間となりました。

教会に通ってくる子どもたちにとって、他の工作教室や料理教室との違いはなんでしょうか？

ただ子どもたちをつなぎ止めるための分級の時間であるなら、児童館や〇〇教室には到底かなわないでしょう。けれども日曜学校のたった20分程の分級の時間に、トイレットペーパーの芯から作られる工作には神さまの御言葉があり、ホットプレートで焼いた種入れぬパンには聖書の物語があります。そして何よりも、分級を楽しみに集う子どもたちには、前半の時間にもれなく礼拝の恵みが付いてくるのです。神さまの聖書の御言葉の力に信頼して、神さまの愛のまなざしの中で過ごすこの大切な時間を、子どもたちと共に楽しんでいきたいと願っています。

《母と子のおはなしのへや》

2003年から始まった“母と子のおはなしのへや”では、月に一度第3金曜日に澤谷由美子先生にご奉仕をいただいて、未就学児とその母親を対象にした“絵本による子育て自分育ての講座”を開くこととなりました。毎回4～5組の母子が集い、絵本をとおして子育ての悩みや喜びを分かち合います。自分の抱えた問題に、聖書からの光を当てられて、心に元気を満たされて、また自分の子育ての場へと遣わされていく。このような毎月のサイクルを楽しみに集ってくださる母子の輪が少しずつ大きくなっていきました。

その後、澤谷先生のお働きは、望月鈴子姉へと引き継がれ、閉講までの8年間に50組を超える親子が集いました。教会外の子育てサークルなどには見い出せない何かを求めて導かれた母子は、この講座に育てられ励まされて、楽しくも困難な子育ての時期を共に過ごしました。そして、この子どもたちが日曜学校に繋がりはじめたのです。

《嬉しい出来事 その1》

一人の生徒、二人の教師から始まった日曜学校は今、在籍生徒数、小学科22名、中高科12名、青年科3名、奉仕者9名の“元気な日曜学校”となりました（在籍生徒数は2012年度に1度でも参加してくれた子どもたちの数です）。そして、今年のクリスマスには、今までの労苦も吹き飛ばすほどの大きなプレゼントを、神さまからいただくことができました。

未信者の家庭から10年間通い続けた高校2年生の姉妹が、洗礼を受ける恵みに与ることができたのです。10年の年月、この姉妹を大切に育ててくださった望月明先生ご夫妻（2012年より浜松教会）と、バイブルキャンプへの参加の機会を逃さず捉えて押し出してくださった安田直人先生（2012年より田無教会牧師）と、そして何よりも姉妹の受洗までの全てを導いて

くださった神さまに感謝する嬉しい出来事でした。（教案誌No.49に姉妹の「信仰の証」が掲載されています）。

《嬉しい出来事 その2》

昨年より、日曜学校礼拝の奏楽を中学生の安田理路姉が担当してくださるようになりました。最近では、ギターなどの新しい楽器にも挑戦して礼拝賛美をリードしています。そんな姿を見続けてきた5年生の姉妹が、「わたしも奏楽をやりたい」と、名乗りを上げてくださったのです。今では、献金の讃美歌と後奏を担当して、立派に奏楽者としての奉仕をしています。そしてまた、それを見ていた6年生の姉妹も「わたしにもできるかも」と、奏楽の練習を始めています。

このように、身近な人が喜んで奉仕する姿を見て、次々に喜びの連鎖が広がっていくのを、とても嬉しいことと感謝しています。CS生徒からCSスタッフとして、そしてCS教師として、一人一人が主に用いられて成長していく道筋が整えられるよう、祈りつつ待ち望んでいきたいと思えます。

《豊かな礼拝を捧げるために》

今田無教会では、安田先生のご指導の下、子どもたちと共に豊かな礼拝を捧げるために、できることを一つひとつ整えていきたいと考え、実践しようとしています。

- 1) 教師会で、「日曜学校教師のために」（相馬伸郎先生）を読み合わせる。
- 2) 教師会で教案誌についての学びと、教案研究をする。
- 3) 礼拝説教担当教師、分級担当者、奏楽者のために教会全体で祈る（週報に記載）。
 - ・教師自身は、祈りなくしては担いきれない責務であることを自覚する。
 - ・教会員は、日曜学校教師の重責を覚え、祈

りをもってこれを支える。

- 4) 礼拝開始 15 分前に、牧師、礼拝説教担当教師、奏楽者で祈りの時を持つ。
- 5) 教会入口に出て子どもたちを迎え入れる。
- 6) “子どもの礼拝”のプログラムを毎週印刷。子どもは御言葉カードを貼りファイリングする。

日曜学校のこれからの歩みについて、いろいろと思悩むことの多いこの頃ですが、これらのことを毎週毎月続けていく中で、これからの方向性が示され、良き志しが与えられて、御旨にかなった成長をさせていただけるのではないかと確信しています。そして神さまに導いていただきながら、元気に次の一步を踏み出していきたいと願っています。

《行事紹介》

①毎週の礼拝

日曜学校の礼拝は、教師・奉仕者による礼拝前の祈りから始まります。

説教者が週報の式順に沿って礼拝の司会をします。現在、幼・小・中高科合わせて、8人～12人位の子どもたちが出席しています。

礼拝の説教は教会学校教案誌・子どもカテキズムをもとに、それぞれの奉仕者のことばで行います。

礼拝後の分級は幼小科と中高科に別れて行います。

幼小科は、最初に「創・出・レビ・民（聖書 66 卷の歌）」を歌い、教案誌の分級を参考にし「みことばをうめよう」などのプリントを使って学んでいます。

中高科は『主は羊飼』をテキストにして教理の学びを進めていますが、月に一度は合同で、教案のテーマに関連した工作をしたり、作って食べたりして、兄弟姉妹の交流を持つようにし

ています。

②合同礼拝

合同礼拝は、日曜学校の子どもの礼拝を、主日共同礼拝と、合同で行うものです。「イースターみんなの礼拝」、「母の日みんなの礼拝」、「子ども祝福礼拝」、「クリスマスみんなの礼拝」があります。

母の日には「母の日みんなの礼拝」として、第一部「こどもたちとともに」、第二部「おとなとともに」というプログラムで、子どもたちにも保護者の方にも、一緒に合同礼拝に出席いただくようお誘いしています。

今年は礼拝後に、日曜学校で作ったプレゼント（御言葉入り押し花コースター）を女性の方全員に贈りました。そのあとに「ジョイフルランチ」と銘打った食事会を、教会の皆さんと一緒に行いました。

ジョイフルランチは、去年は“たこ焼きパーティー”で、今年は“サンドイッチパーティー”でした。準備された食材をそれぞれが自由にパンにはさんでいただきました。毎回楽しい工夫を加えて、子どもたちと教会の皆さんとのよき交わりの時となっています。

11月には、「子ども祝福礼拝」として、同様に第一部「こどもたちとともに」、第二部「おとなとともに」というプログラムで、同様の礼拝を献げます。この日には、出席した子どもたち全員に前に出てきてもらい、一人一人の名前を呼んで、祝福のお祈りをします。

またイースターとクリスマス礼拝も、合同礼拝として献げます。これらの合同礼拝では、日曜学校の子どもたちによる賛美の歌声が響くのも特徴です。

他に、「家族の日」（父の日）、秋の「敬老の日記念礼拝」などもあり、子どもたちと保護者を合同礼拝にお誘いする機会を設けています。



イースターみんなの礼拝後、祝会で日曜学校による賛美



母の日みんなの礼拝 第一部「こどもたちとともに」



母の日みんなの礼拝 子どもへの祝福の宣言

③ジョイ・ジョイ・フェスタ

毎年7月、日曜日午後から海の日にかけて行っている、子どもも大人も楽しみな夏のメインイベントです。

恒例の“流しそうめん&バーベキュー”は保護者の方も大勢参加いただき、今年は総勢60名の参加となりました。

教会で一泊した翌日は、教会用の「マイバッ

グ」を作成。それぞれが布用クレヨンで個性あふれる絵を描き、素敵な作品となりました。

今年では中高生が率先して、しおり作りからバーベキューの食材の買い出しと下準備まで、またチーム分けしたリーダーにもなって、幼小科の子どもたちのお兄さん・お姉さんとしての成長を見ることができました。



ジョイ・ジョイ・フェスタ2013開会礼拝



ジョイ・ジョイ・フェスタ縦割りグループで朝食

④ジョイ・ジョイ・イースター

イースターを覚えて、DVD鑑賞「三本の木」、ゲーム「空き缶ジェンガ」、クレープ作りなど、子どもたちと共に楽しい時を過ごしました。かわいみ言葉カードが付いたチューリップの苗のプレゼントは、子どもたちが家に持ち帰り、水をやり、花が咲くのを楽しみにしていました。

⑤ジョイ・ジョイ・クリスマス

毎年クリスマスにちなんだ工作をし、賛美やゲームをしてクリスマスをお祝いします。

昨年はポップコーンでクリスマスツリーを作り大好評でした。

幼小科は、ペープサート「すくいぬし」、中高科はリコーダー演奏「クリスマスメドレー」をそれぞれ披露し、参加してくれた子どもたちと共にクリスマスをお祝いしました。



ポップコーンツリー作成風景

⑥花の日

教会に近い地元の交番所を訪問し、いつも私たちの生活の安全を守ってくださっている警察官の方に、歌とお花のプレゼントで感謝の気持ちを伝えています。今年で2回目の試みです。

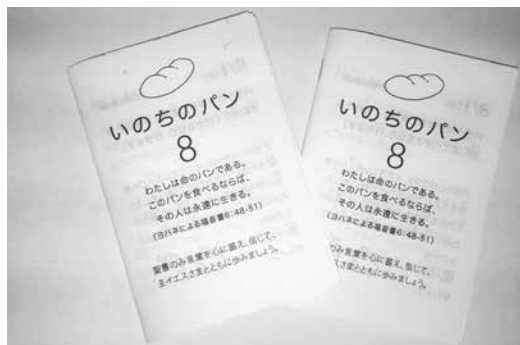


近くの交番で賛美と花のプレゼント

⑦敬老の日

子どもたちは、それぞれのおじいちゃんやおばあちゃんに向けた、プレゼントとカードを作ります。また教会の70歳以上の方々にも、感謝をこめてプレゼントを贈っています。

昨年は近くの特別養護老人ホームを訪問し、賛美とお花のプレゼントを贈りました。



日曜学校のご案内と、いのちのパンの豆本毎月、在籍する生徒たちに届けられます

「託されている祝福と責任 ～主の日につながる家庭の営み～」

東部中会教育委員会は、毎年11月第二週の日曜日の午後に、教会教育研修会を開催しています。2012年11月11日に開かれた研修会は、標記のテーマのもとで、風間義信教師（江古田教会牧師、東部中会教育委員長）による基調講演の後、河西俊身長老（横浜中央教会）、豊川慎執事（湘南恩寵教会）、田好ゆり姉（江古田教会）による発題がなされ、それを受けて討議がなされました（子どもたちのためには別のプログラムが用意されました）。そしてこの研修会の内容は、「まじわり」7月号（No.567）に掲載され、報告されました。

今回、教案誌への原稿掲載にあたり、基調講演をしてくださった風間先生、発題をしてくださった河西長老、豊川執事、田好姉が快く「まじわり」に寄せられた原稿の転載をお許しくさしましたことを感謝いたします（豊川慎執事は、当日お話ししきれなかった部分を書き加えて、原稿をお寄せくださいました）。なお掲載の順番は、当日の発題の順番ではなく、「まじわり」7月号の順番に基づいています。

合わせて、この企画をご承認くださった、東部中会教育委員会とまじわり誌委員会にも、感謝を申し上げます。

《基調講演》

託されている祝福と責任

～主の日につながる家庭の営み～

風間義信（江古田教会）

2012年11月11日の午後、東京恩寵教会を会場にして東部中会教育委員会主催の「教会教育研修会が開催されました。当日はあいにくの天候にもかかわらず、大人約百名、子ども五十名ほどが集い、盛況な会となりました。今回は掲げた主題への具体的な取り組みを三名の兄姉に十数分ずつ発題いただきその後、グループ討議を行いました。私は教育委員長として今回の集いのねらいを語るように言われました。基調講演となっはいましたが、後に続く発題、討議の導入となるよう、与えられた時間の中で、以下のような話をしました。

ちょうどこの日、各教会に『リジョイス』（大会教育機関誌）2012年12月号が配られました。

これで4年間続いて、旧約聖書1回、新約聖書2回を読むことになりました。発行するにあたって「0号」を出しましたが、そこには発刊の目的が次のように書かれていました。

「子どもと共に守る家庭礼拝での活用を念頭において、大人と同じ聖書箇所を子ども向けに解説した『いのちのパン』が、新たに加わりました。字が読める子は自分で読み、あるいは、親が子どものために朗読してください。

この『いのちのパン』というのは、そもそも中部中会教育委員会が発行していた『教会学校教案誌』の中にあつたものです。これが2009年から『リジョイス』に全面協力して下さることになり、リジョイスの聖書日課にあわせた『いのちのパン』も四年間続けることができました。多くのご家庭でご利用いただき、家庭礼拝の一助になっているならば幸いなことです。

今回、第四回目の教会教育研修会を準備するにあたり、担当者が願ったことは、表題にある

とおり、「主の日につながる家庭の営み」でした。そこで各教会に配布したチラシに以下の説明を記しました。

「東部中会は創立65周年記念伝道宣言で、『契約の子への信仰の継承は、伝道と教会形成の基礎です。中会は、各教会と共に契約の子を育てる親たちを暖かく支え、信仰教育のためのプログラムを充実させます』と謳いました。この宣言の実現のために、今年の研修会では、家庭礼拝のことに焦点を当て、特に主の日の礼拝に結び付くことを意識して、三人の発表者の声に耳を傾けたいと願っています」。この願いに答えて発題して下さったのが、河西俊身長老（横浜中央教会）、豊川慎執事（湘南恩寵教会）、田好ゆり姉（江古田教会）です。

今回の意識の元にあったのが、「創立二十周年記念宣言」、特に「信徒」の項目です。「教会の神学と伝道とは、キリストにつらなる信徒各自が、この世にあって神の言葉に従う生活を営むときの、具体的な信仰の戦いに基礎を持つ。とくに、われらの奉仕の第一歩は、神の契約に基づく家庭の形成にある。聖別された家庭を基としてこそ、信徒は、神よりうけた各々の賜物を生かして、教会と世にあってキリストの証人として奉仕する」。

同宣言ではその前に「教会の生命は、礼拝にある。キリストにおいて神ひとと共に住みたまう天国の型として存する教会は、主の日の礼拝において端的にその姿を現す」とあります。そこで単に家庭礼拝ということではなく、「主の日につながる」ということを意識した取組み、課題、悩みなどをお話しいただき、その後の語り合いの中で、分かち合いたいと願いました。

年にわずか1回、2時間の教会教育研修会ですが、学ばれたことを各教会、家庭、個人においてさらに深めて、「託されている祝福と責任」を自覚していきたいと願っています。

《発題①》

主の日につながる家庭礼拝

～教会に支えられて～

田好ゆり（江古田教会）

風間先生より、家庭礼拝でしている具体的なことを話して下さい、と依頼がありまして準備してまいりました。

私は父が長老、母が執事、兄弟4人のクリスチャンホームで育ちましたが、兄たちとは年が離れていて、父も帰りが遅かったので、家族揃って家で礼拝をした、という記憶が全くありません。寝る前に母と祖母とお祈りをしていた記憶くらいです。

そうして大きくなりまして、今みたいにサマーバイブルキャンプなんてありませんでしたから、同じ年頃のクリスチャンが集まる場に初めて参加したのは、東部中会の高校生会でした。そのときに、自分がいかに無知であるかを思い知らされました。そのカルチャーショックはとても大きいもので、それがきっかけで信仰告白をしたのですが、そのとき、「あ～、もっと子どものうちからきちんと教育されていれば、こんな私にならずに済んだのに……」と思ったものです。その思いもひきずっているからか、子どもと一緒に家庭礼拝ができることを嬉しく感じています。

私には小学6年生と5年生の二人の息子が与えられていまして、その二人の息子と、夫と、4人で家庭礼拝においてどんなことをしているかをお話しします。

家庭礼拝は、だいたい夜寝る前にするようにしています。祈り→讃美歌→聖句暗唱→教理問答→リジョイス→祈り→主の祈り・使徒信条・十戒の中から順の一つ、の流れでしています。

始めのお祈りは、祈りの本を読むようにしています。子供が幼稚園生のときに、CSのお泊まり会（教会に一泊する行事）に参加したとき、一つのお祈りを素敵なおハガキにして紹介し

てくださいました。子どもが祈るこんな素敵な
お祈りがあるんだな、と感動し、私が知らない
このような祈りをもっと子どもに知ってもらい
たい、そしてその祈りを自分の祈りにしてもら
いたい、という祈ったらいいのかわからない
ときに、誰かの祈りを手に取ることを覚えて欲
しい……そんなきっかけで、そんな思いで始め
ました。

なかなか子ども用の祈りの本（特に小学生の
中高学年向）がなく、今までは会報等で紹介さ
れているものや、いただいたお手紙に書いてあ
るもの、目に付いたさまざまなものを使用し
ていましたが、今はパークレーの「若人の祈り」
を使っています。私が信仰告白したときにいた
だいたものでして、高校生のために書かれたも
のとあるのでまだ難しいかな、と思いつつも試
してみました。そうしましたら、意外にも子ども
たちには好評でした。「今日は〇〇しました。
だから明日は〇〇したいです」のようにとても
具体的に書かれているので、自分が一日過ぎ
た中でしてしまった思いがピッタリ重なるの
か、読んでいて笑い出してしまう、お祈りが中
断してしまうことも多々あります。しかし、そ
のくらい子どもの心に響くものだったのか、と
思っています。ほかにも何かあればぜひ教えて
ください。

次に讃美歌。江古田のCSでは、毎月プログ
ラムを作ってくださいしています。今月の学びの
箇所や、誰がお話しして、どんな讃美歌を歌う
か、また、その日のお話に沿った暗唱聖句等が
載せられています。それにより、次聖日に捧げ
る讃美歌がわかるので、その讃美歌を1番のみ
歌っています。歌い慣れていない讃美歌や知ら
ない讃美歌でも、一週間歌うことで覚えられ
るので、礼拝では大きな声で賛美ができ、より豊
かに礼拝を捧げることに結びつけています。次
聖日の讃美歌が知っている曲のときは、子ども
が好きに選んだ讃美歌を歌います。お気に入り
はサマーバイブルキャンプでいただいた歌集で

す。それにある讃美歌は私の知らないものが多
く、楽譜もないのですが、全部覚えるまで子ど
もたちに指導され、すっかり歌えるようになりました。また、朝礼拝での讃美歌が数か月ご
とに変わるので、変わったときにはその讃美歌を
歌うようにもしています。

次にそのプログラムにある、聖書のことばを
暗唱します。CSでのお話に沿った聖書の言葉
なので、次の礼拝までの1週間その聖句を口
に出し続けることで、そのお話がずっと頭に残
り、続きのお話が聞きやすいというもありま
すし、逆に聖句を忘れたときは、「この間の〇
〇先生のお話はどういう話だった？」と問われ
ることでお話を思い出すと、聖句が出てきたり
もしています。お話と聖句がよく結びついて
いるなど感じています。

次に教理問答。今は「大人と子供の教理学
校」という、ハイデルベルク教理問答要説を1
～2問ずつ読んでいます。今まではウェストミ
ンスター小教理問答への入門としての「初歩教
理問答」を使っていました。これは大変易しい
言葉で、短くまとめられていますし、幼稚園生
の頃から何十回と繰り返し使っているので、二
人とも丸暗記しています。特に子供のころから
教理を学ぶべきだ、と考えて始めたわけではな
く、したかったことをしたのと、まだ字が読め
ないうちは耳から聞いて覚えるしかありません
から、人の話をよく聞くという訓練にもなるか
と始めたのですが……大きくなって話を聞ける
ようには全然ならず、そのような効果はありま
せんでした……。丸暗記で教理が頭に残ってい
るからか、聖書のお話を聞いたときに「ああ、
教理問答にこうあるよね」何てスラスラ問答が
出てくるときもあり、こんなふうリンクする
こともあるんだな、と感心したこともありまし
た。

それから、川瀬勝次先生の「こども教理問答」
も紹介していただき使いましたが、これも子ど
もには大変好評でした。イラスト入りで教理を

具体的に喩え話で説明してあるので、こんな表現のしかたがあるのか、と大人が読んでもおもしろく、またインパクトがあるので、子どもの頭に残りやすいようです。教理を笑いながら学ぶなんて、新鮮で、とても楽しく学ぶことができました。

教理問答は学ぶと子どもから色々な質問が出てきます。そのおかげで私の学びにもつながりますし、また、そこからどんどん話が膨らみ、普段は15分程の礼拝時間が、時には30分にも1時間にもなることもあります（問答とは全然違う方向に話が逸れるため）。食事の時間が親子のコミュニケーションのときとよく言われますが、私の家ではこの家庭礼拝がそのときとなっています。

そしてリジョイスを読んでお祈りをして終わります。お祈りは、祈禱課題の中から祈る祈りを決めて、一人ひとり順番に祈ります。

祈禱課題は、教会カレンダーに祈禱課題があるので、教会のみんなで祈る祈りとしてそこから、クリスマスなどの行事や伝道集会の前などには、伝道委員会がお便りを出してくださるのですが、それには当日までの準備スケジュールやそれに向けた具体的な祈りの課題が載っているので、その課題の中から。スケジュールを確認することで、子どもでも次聖日に何があるのかを把握して、例えばチラシ配りをお昼ご飯食べてからしようかだとか、青年会やCSの先生が子どもと一緒にチラシ配りをしてくれるので、〇〇先生一緒にできるかな～など、教会での一日の過ごし方を考えることができます。そして先ほど紹介した、CSのプログラムには、今月はCSではどんなことをするか等の予定も記して下さっているのです、その中から。あとは祈りのノートを作っていて、祈りたいこと、祈ってほしいこと、世間で起きていることなどを自由に書き込んで、その中から選ぶもよしで、それぞれ自由に祈って終わりにしています。

リジョイスと始めの祈りの本は、今は、準備をした人が読むことにしているのですが、二人とも自分が読みたいから毎日競って準備をするので、「俺が先だ！」と礼拝前から喧嘩になりますし、讃美歌も「これが歌いたい！」と礼拝中でも喧嘩になりますので、またどうにか工夫しないと……と思っています。

このように次の礼拝に向けて家庭ですることを、教会が丁寧に準備してくださっていますので、私が何かを考えてしているのではなく、準備されているものを、家庭礼拝で用いています。それと合わせて、日曜日に向けて一週間過ごすということはどういうことか、その大切さ、また何故そうするのかを、繰り返し説教でお話ししてくださっていますので、それを繰り返し聞くことで訓練され、自然に日曜日に向けた生活が意識できるようになりました。このように、たくさんの教会の取り組みに支えられていることを改めて感謝したいと思います。

しかし、教会によって事情もさまざまですし、規模も全く違い、できることが限られることも多々あるかと思っています。なので、このような中会規模での交わりはとても貴重だなと感じています。まだ4回目ですけれども、毎年楽しみにしています。自分の教会で受けている恵みを、このような機会をいただいて、ここで少しでも分かち合えたことを感謝いたします。

このあとのグループディスカッションで、それぞれの教会でどんな取り組みがなされているか、また、クリスチャンホームでない方が家庭礼拝に取り組むのは、難しいことも多々あると思うので（私は夫が未信者でしたので、幼児洗礼をするにも迷いがありました）、何か教会で工夫されていることがありましたら、それも教えていただきたいと思っています。

今日はどうもありがとうございました。

《発題②》

家庭における信仰教育について思うこと

豊川 慎（湘南恩寵教会）

1. はじめに—家族紹介、自己紹介

湘南恩寵教会の豊川慎と申します。「主の日につながる家庭の営み」ということについて発題をする機会をいただき感謝申し上げます。家庭における信仰教育について、そして私が教育について思うことを紹介させていただき、その後のディスカッションに資することになればと思います。

家族は妻と（2013年8月現在）中学3年生（長女）、小学校4年生（次女）、小学校2年生（三女）、そして幼稚園年長（長男）の4人の子どもたちの6人家族です。私は改革派教会の牧師であった母方の祖父（片山弘二：研修会の一か月後の2012年12月9日に昇天）や父方のクリスチャンであった祖母の代から数えると3代目、そして子どもたちは4代目になります。父が西鎌倉教会の長老であったため、幼少の時より日曜日は西鎌倉教会の日曜学校で育ち、後年は祖父が西鎌倉教会の牧師であったこともあり、教会に行くことは祖父母に会える楽しみの時でもありました。

私が子どもの頃の時を振り返ってみると、毎週の日曜日は父と共に教会学校に行っていました。家庭での礼拝となると、反発していたことを記憶しています。私が反発していたためかどうかわかりませんが家庭礼拝の記憶は少ししかありません。父は日曜日に重なる運動会などの学校行事には来ることがありませんでした。日曜日は主日礼拝の日であり、教会の礼拝に出席するという父の断固たる信仰の姿勢は私に少なからぬ影響を与えていると感じています。中学生の時に喫煙や飲酒、けんかなどのために2度にわたって学校を停学処分になった時もありましたが、母は度重なる学校からの呼び出しにもかかわらず、絶えず私に「あなたを信頼し

ている」と言ってくれました。その背後には忍耐と祈りがあったことと思います。放蕩息子であったアウグスティヌスの母モニカ的心情がかほどであったかを思わずにはられません。母の子に対する絶対的な信頼、特にキリスト教信仰に基づく忍耐と愛情の大切さを自分の経験から今親として実感しています。

2. 家庭における信仰教育と信仰の育成

家庭での信仰教育を考える時、まず祈りの重要性を思います。子どもと共に祈り、子どものために祈るといことです。例えば、食前の祈りや寝る前の祈りですが、子どもたちと共に祈ることを通じて、神に祈ることができるという喜びを子どもに教えることが肝要だと感じています。また寝る前には子どもたちに絵本の読み聞かせをするのがもう10年以上にもなる私の役目となっていますが、子どもに絵本を読み聞かせること、聖書物語であれその他の絵本であれ、絵本の物語をとおして、それは感受性豊かな子どもたちにキリスト教の考え方を自然に伝える時ともなります。絵本の内容が世界や宇宙そして人間の起源について触れているときもあれば、日本の物語には日本の神々、習慣、宗教的伝統などに話が及ぶ場合もよくあります。子どもたちにそれらをどのようにわかりやすく説明するか、子どもたちの真剣な質問に曖昧に答えるのではなく、真摯に答えるには時に苦心しますが、そのための知の準備が常に必要であることを実感しています。

家庭礼拝は家族で共に主を賛美する喜びの時です。家族の愛の中で一人一人が神から愛されているのだということを実感する時であり、親からも神様からも愛されているという安心感を子どもたちに与える時となります。自他ともに認める勉強嫌いな中学3年生の長女は教会に行くこと、そしてギターを弾くことは好きな様子で、毎夜ゴスペルその他の曲を自宅で熱唱しています。その長女を我が家の賛美リーダーとし

て、次女はウクレレで、そして三女はバイオリンでと家庭礼拝では何曲かを共に歌います。一番下の5歳の息子は聖書が自分で読めるようになってきました。最初は『リジョイス』の聖書箇所を共に読みましたが、毎日家庭礼拝をすることは難しく、週に一二度ということからも、また子どもには難しい聖書箇所にあたるときもあるため、新約聖書をマタイ福音書から少しずつ皆で読み進めています。そして家族みんなが一人ずつ短く最後に祈ります。たどたどしい息子の聖書朗読や祈りに上の子どもたちが必死に笑いを抑えている時もありますが、それも微笑ましい家庭礼拝の時だと感じています。子どもたちが成長するにつれて、また子ども4人がそろって家庭礼拝の時を過ごす難しさも感じています。姉妹同士での気恥ずかしさがあるようですし、親の都合によって家庭礼拝ができない場合も多々あります。日々の仕事の多忙さとそれを言い訳にして、家庭において子どもたちと聖書を共に読み、祈りの時を過ごす時間を持たない、時に持とうとしない自分がいることも事実です。

詰まる所、家庭における信仰教育に関しては、親である私たちのキリスト者としての在り方それ自体が、つまり主イエスを救い主として信じる信仰の内実がまず第一に問われます。子どもたちの周りには多くの情報・メディアが溢れています。多様な価値観が氾濫する中で、親がキリスト教世界観に基づく確固とした人生観を示すことができるのかが問われています。それは日曜日だけ子どもを教会に連れていけば十分というのではなく（毎週日曜日に子どもを教会に連れていくということだけでもとても大変なことであることを自分自身の経験から十分にわかっていますが）、月曜日から土曜日まで自分自身が主体的にキリスト者として生きることを身をもって子どもたちに示しているかという問いでもあると思います。何か大げさな言い方ようですが、子どもは親の背中を見て育つとい

う言葉があるように、何を根本的に最も大切なこととしているのか、信仰者として本当に生き生きと生きているのか、子どもは私たちの祈りの姿勢、表情、言動からそれらを敏感に感じ取り学んでいるということ意識しておく必要があると思います。子どもに信仰の模範を示すということは決して容易なことではありません。日々多くの時間を共に過ごしているがゆえに、子どもは親が思っている以上に親をよく見えて直感的に多くのことを感じ取っていることに気づかされます。

3. 『教会規定第三部 礼拝指針』から

子どもたちの幼児洗礼の時に神と教会の前で次のような誓約をしてきました。『教会規定第三部 礼拝指針』第57条（親の誓約の言葉）
③「あなた（がた）は、今、あなた（がた）の子を全く神にささげますか。あなた（がた）は、謙虚に神の恵みに依り頼み、あなた（がた）の子の前に敬虔の模範を示し、この子と共に・またこの子のために祈り、教理を教え、また主がしつけ諭されたようにあなた（がた）もこの子を育てるように努めることを、約束しますか」。振り返りますと、4人の子どもたちの幼児洗礼のたびにこれまで4回この誓約をしてきたわけです。子どもたちを主にささげる、子どもたちに敬虔の模範を示す、子どもたちのために祈り、教理を教え、主が行われたように子を育てる。日々の子育ての格闘の中で、しばし忘れがちなこれらの根本的に重要なことを絶えず思い起こす必要があることを痛感しています。

4. 河井道と新渡戸稲造のキリスト教教育の思想から学ぶこと

一番下の4番目の息子の名前は「道」（みち）といいます。イエスが私は道であり真理であると言われたように、聖書によく出てくる言葉ですが、道というのは私が敬愛する教育者の河井道（1877～1953）から名付けたものでもありま

す。教育の本質とは何か、教育というものを考えるうえで河井の教育思想から多くを教えられます。河井は恵泉女学園の創設者であり、戦後の教育基本法制定に携わったキリスト者でした。河井は新渡戸稲造（1862～1933）の愛弟子として新渡戸のキリスト教人格教育の教えを受け継ぎました。（河井のキリスト教教育思想に関しては拙稿「河井道—平和を希求する人格の教育」南原繁研究会編『真理の力—南原繁と戦後教育改革』to be 出版、2009年所収を参照されたい）。

一人一人がかけがえのない個性・人格を持ち、それぞれの賜物は異なるけれども神の子として愛されている存在であることを人格教育では重んじます。新渡戸によれば、垂直次元と水平次元の両方における人格的關係の中で人格は形成され、向上していきます。つまり、神との垂直的關係において、そして家族や教会などにおける水平次元での人格的關係ないし交わりの中で、神を愛し、隣人を愛すということを子どもたちは会得していくのです。

信仰教育ということを考える場合、キリスト教の「知識」とキリスト教「信仰」は別であることに留意する必要があると思います。信仰の前提として知識を得て理解するということがあり、また逆に信仰によって初めて深く理解し得る事柄があるという面は確かにありますが、少なくともただただ教理を詰め込む、教え込むということは、教育の一面に過ぎない知識教育のみを片寄って強調することになるように思います。この点で注目したいのは、イギリスの思想家であり歴史家のトマス・カーライル（Thomas Carlyle, 1795～1881）の言葉を用いて説明した新渡戸の次のような考え方です。教育にとって「to know（知る）」は根本的なことである。しかし、「to know」よりも「to do（実行すること）」が重要であり、そして「to do」何かをなす前に、「to be」つまり何であらねばならないか、どのようなものであるかということ

が重要であると。家庭における信仰教育も私たち人間は罪深い存在であり、イエス・キリストによって自己の罪が赦されるべき存在であることを子どもとの全人格的な交わりの中でいかに伝えるのか、そしていかに信仰を育成するのかということを考えます。

5. 神に近くあることに向けた信仰教育

—ジョン・ミルトンの教育論

17世紀イングランドのピューリタン詩人であり、『失樂園』(Paradise Lost)で知られるジョン・ミルトン（John Milton, 1608～1674）は『教育論』(Of Education)という著作の中で次のように言っています。「学問の目的というのは、神を正しく知る力を再び得ることによって、われわれの最初の父祖のもたらした破滅を修復することであり、またその知識を通して神を愛し、模倣し、真実の徳を備えた魂を持つことによって、出来る限り神に近いものとなることなのである。この真実の徳は信仰という神の恩寵と結び付いて、この上ない完成を成し遂げるものである」(The end then of learning is to repair the ruins of our first parents by regaining to know God aright, and out of that knowledge to love him, to imitate him, to be like him, as we may the nearest by possessing our souls of true virtue, which being united to the heavenly grace of faith make up the highest perfection.) (The Complete Prose Works of John Milton Vol.II, Yale University Press, pp.366～367)。

やや難しい言い回しですが、キリスト教の知識と信仰について考える際に多くの示唆を与えてくれます。ミルトンによれば、学びの目的というのは、アダムとイブの墮落と罪による神との關係の破れを神を正しく知ることによって回復し、神知識を通じて神を愛し、模倣し、できるだけ神に近づくことにあるのだと言っていま

す。教会学校においても家庭においてもカテキズムによる教育がなされますが、キリスト教の知識の教授が最終的には神に近くあろうとする信仰へとつながっていくようになされることが肝要なのだと思います。

6. アブラハム・カイパーから学ぶ

有神論的世界観・人生観

私は関西学院大学神学部の学部学生の時、社会学部教授であった春名純人先生（当時、改革派灘教会長老）の授業において初めて、オランダの神学者アブラハム・カイパー（Abraham Kuyper, 1837～1920）の名前を聞きました。春名先生の哲学と神学の学問的深みと相まって、先生の講義をとおして学んだカイパーのキリスト教思想がその後の私のキリスト者としての考え方に大きな影響を与えました。カイパーのよく引用される有名な言葉ですが、「キリストが……『わたしのものである』と主張しないような人間存在の領域は、一インチたりとも存在しない」とカイパーは力強く断言しました。この世のあらゆる領域はキリストの主権が及んでいる領域であり、家庭や教会などそれぞれ固有の領域において、そして生の全領域において神の栄光をあらわしていくキリスト者としての役割、責任、恵みをカイパーの思想を学ぶ中で教えられました。改革派教会がその創立宣言で謳っている「有神的人生観・世界観」を意識するようになったのもカイパーの思想を学ぶようになってからのことでした。カイパーは自身のキリスト教世界観に基づき、アムステルダム自由大学を創設し、教育者としても活躍しました。政治家としてオランダの首相にもなり、牧師として、神学者として、ジャーナリストとして、そして教育者としてまさに生の全領域にわたって神の栄光をあらわそうとしたと言っても過言ではない人物です。カイパーを紹介することによってここで私が強調したいのは、家庭の信仰教育において、この世のあらゆる領域が神の栄

光をあらわす場なのだということをキリスト者として私たち親が認識し、そのようなキリスト教世界観の視座をもって子どもの賜物を考え、伸ばしていこうとすることによって、子どもは徐々に信仰と知識と生活の歩みを調和的に考えるようになるのではないかとということです。

キリスト者として私たち親は結局のところ家庭における信仰教育によって子どもたちに何を遺せるのでしょうか。知識でしょうか。信仰でしょうか。内村鑑三（1861～1930）は『後世への最大遺物』の中で次のように言っています。「我々は何をこの世に残して逝こうか。金か。事業か。思想か。……何人にも残し得る最大遺物—それは高尚なる生涯である」と。「高尚なる生涯」と言われると何か高い理想に思えますが、難しいことではなく、それはそれぞれが与えられている賜物に応じて、家庭において、職場において、教会において、日々各自が置かれている場でキリスト者として生かされている恵みに感謝し、主にある生を喜びと愛をもって子どもたちと共にまたその一歩先を歩んでいくことではないかと思うのです。そのことをとおして信仰は子どもたちに継承されていくものと思います。

7. 河井道に学ぶ愛育と忍耐カ—むすびにかえて

最後に、河井道晩年の最後のメッセージである「種まきの話」を紹介して終わりたいと思います。河井は病床にあって次のように記しています。やや長いですが引用します。「最後に今私の部屋にかかっている二つの絵についてお話ししましょう。これは富士見町教会のSS（日曜学校）の二年生がかいた種まきの絵です。一つは小さな男の子が、ポケットより手を出して種をまこうとしている絵で、他の一つは女の子がすでに大きくなった木のかげで小さな栗のような種を植木鉢に入れている絵です。それを見て私は思うのです。ああそうだ、種まきはいつでもしなければならぬ。もう木がのびたか

ら種まきはいらぬということはないのです。木を切ればその後植林ということが必要です。園芸課の方が経験していらっしゃるように、咲き誇っているカーネーションのそばから、来年の芽が小さく出ているのです。かくて私たちは年々たえず成長し、神の与え給うた種をまき、神の仕事を体験しなくてはなりません。この際、種をまく者、水をそそぐ者、草をとるものは誇るところがありません。育て給うのは神であります。お互いの立場にあって、種の成長のお手伝いをしたいものです。神と共に苦しむ者は、よろこびをも共にかりとることができるとは、なんと楽しい人生ではありませんか。皆様と共に祈り、犠牲を捧げ、神の与え給うた種の成長を、育てることに協力して下さることを心より思い、病室にて喜んでおります」(1952年12月の『患泉』巻頭言、『患泉 巻頭言集』患泉女学園所収、451頁)。

上記の河井の言葉から、家庭における信仰教育に関しても多くのことを教えられます。私たち親は子どもたちの信仰という「芽」がいつの日か萌え出る時を日々の祈りと共に待ち望みます。種がすぐに地表にあらわれてくるということはありません。種の成長は目に見えないからと言って、成長していないということではありません。芽が出ることを期待しつつ、神から託されている子どもへの責任を果たすわけですが、それまでには多くの忍耐を必要とすることを日々経験しています。河井は「内なるものの成長」という言葉を頻繁に用いました。種の成長と同じように、自己の内面性というものは一見目には見えないけれども、外部からのさまざまな感化によって自己の内面、人格というものは成長し、円熟し、豊かな果実として実を結ぶのだと言います。河井はこれを聖書でいう「霊の結ぶ実」、つまり「愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、柔和、節制」という果実が実を結ぶと言っています。家庭における信仰教育による果実が豊かに実ることを忍耐をもって見守

り、そして子どもたちと共に主に信頼して歩んでいきたいと思えます。家族の絆の崩壊が言われて久しい社会にあって、愛をもって育てる「愛育」の必要性を痛感します。私たち一人一人がイエス・キリストに愛されている存在であり、それゆえに他者を愛することができるはずの者であることを、家庭において大事にしたいと思うものであります。まとまりのない発題でしたが、ご清聴どうもありがとうございました。

(本稿は「まじわり」誌 (No.567, 2013.7月号) に掲載された東部中会教育委員会主催の教会教育研修会 (2012年11月11日) における発題報告に加筆と修正を加えたものである)

《発題③》

主の日につながる家庭の営み

河西俊身 (横浜中央教会)

皆さんこんにちは。横浜中央教会の河西俊身と申します。ミッションスクールの横浜英和学院の小学校の教員をしています。2010年より微力ながら中会の教育委員の奉仕をさせていただいています。このような機会を与えていただき感謝しています。今日は私の家庭で子どもたちが主につながるために親は何を心掛けてきたか、また、教会に求められていることについても少しお話ししたいと思います。本題に入る前に私が子どもの頃受けた宗教教育が現在の自分のバックボーンにあるので、少しその話をいたします。

私の母教会は山梨県にあります改革派甲府塩部教会です。私が物心のつく頃には父は長老を、母は執事をしていました。生活全般にわたって割と厳しいクリスチャンホームでした。例えば、当時父は車通勤でした。父が帰宅し車の音がしたら、あわててテレビのスイッチを消していたことを覚えています。小学生時代、運動会のお昼ご飯はとても楽しみなひと時ですが、父が同席していた記憶はありません。当時、運動会は

必ず日曜日だったからです。

その頃家庭で毎日欠かさずしていたことが朝食前の聖書朗読です。読んだ後は何かが書いてあったかを言わなくてはなりません。言えないときは別室で言えるまで読ませられます。そのまま登校時刻が来ると朝食を食べずに学校へ行きました。簡単ですがこれで大体の様子がおわかりになったかと思います。

私の家族構成は、妻と二人の子どもの四人家族です。長女は今年三月に高校を卒業して現在専門学校生で、高二のクリスマスに信仰告白に導かれました。長男は中学二年生で、バスケットボール部に所属し、未陪餐会員です。

さて今自分が親になり子どもに神様のことを教え伝えていく立場になりました。幸い子どもたちは二人とも教会が大好きで喜んで通っています。こんな子どもたちですが、契約の子として信仰を育めるよう心掛けてきたことを三つお話ししたいと思います。

1. 子どもの心の成長に必要な適切な親子関係を構築する

親子で会話がよくなされスキンシップを通して信頼関係と愛情にあふれた関係を築いているかが重要です。親は威厳がありながら高圧的でなく子の言葉に耳をかし共感し、子は親に対して素直に包み隠さず話し、あるときは腕の中に甘えるような親子関係を作りたいと思いました。これによって子供は精神の安定と、親への愛情と信頼が増し、親の教え（信仰の教育）を素直に受け入れるための土壌がようやくできるのだと思います。宗教教育以前の人間の関係。この素地ができていて共に信仰生活を送っていった子どもは、成長した時にも神様から心が離れるような誘惑に陥ったとしても、迷いのさなかに神様の御言葉を聞き分けることができるのではないかなと思います。

2. 全てを委ね主に感謝することを務めて言葉で伝え、示す

神様は遠い存在でなく、常に共におられ身近で導いておられるお方という観念を日頃から持ってほしいと考えました。だから、日々生活の中で実感として神様を感じられるように、事あるごとにどんな些細なことについても聖書から答えを模索し見つけるように子どもに話してきました。学校であったことで「こういうときどうすればいいの？」と聞かれたときには聖書はこう言っているよ。だからこうしたら？」と。頭ごなしに親の思いを押し付けないようにしてきました。また、事あるごとに、日々のご飯や着るものなどが備えられていることなどについても「～だから神様に感謝しなくちゃ」「神様に守られているんだよね」と子供たちに話します。親自身が普段から思っていることを言葉に出して具体的に伝えます。もう一つは子どもに自分は父親だがキリストに頼らないと立つこともできない弱い人間であることをざっくばらんに見せることです（祈りの姿）。そこには親の威厳とか、子に対するメンツはありません。キリストの前では、子どもに見栄をはって格好つけたり、偉いと思われようとすることもなく、親自身が、すべてを主に委ねて感謝しながら生活を送っているということを見てもらうことがとても大切だと思います。

3. 教会は日曜だけのものではない

ほとんどのクリスチャンは月曜から土曜までこの世の生活をし、日曜日が来たら教会へ行きます。当たり前です。でも、心がそれと同じだとするといかがなものでしょう。子どもたちの心が神様に向くのは週に一回だけとなるとちょっと問題です。「日曜だけ神様に出会い、あとの六日間は忘れている」。これではやがて心は神様から離れていってもおかしくはありません。ですから教会の話の普段からよく子どもにするように心がけます。「○○さんは今腰が痛いらしいよ。」「○○くんは仕事変わったんだって。」「来週は○○さん来

るかな?」「教会の階段のペンキ塗り手伝って。」など。日常の中で教会のことを考える時間を増やすことで日常生活と教会生活が同じレベルでしっかりつながると考えました。これによって教会はより近い存在となり、やがてそれは神様へとつながると思っています。

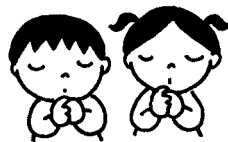
さて話は変わり、「主につながる日々」を目標に我家で行っていることをご紹介します。一つは「説教の分かち合い」です。日曜日の説教で先生が話されたことを各自がメモしておき、その日の夕食後にリビングに集まり、説教の聖書箇所を子どもたちが朗読し、記録したことを発表します。その後学んだことや疑問点を述べて、私が説明できるところはするようにしています。家庭礼拝がなかなかできない中で、何かしたいと思って始めたのがこれです。

もう一つは、お祈りのときにみんなで手をつないで輪になって祈ることです。それは昔、妻が提案したのですがお勧めです。食前感謝の祈りのときにお客さんがいるときも一緒に行います。単純なことですが、年相応になると親子の間には恥じらいがでてスキンシップもなかなかできないのですが、祈るときにはそんなことは考えずに心を一つにして祈ることができます。手をつなぐことによって不思議と心が通い

合い、家族というものを再確認できますのでぜひお試しください。

最後に、教会に求められていることについてですが、契約の子が喜んで教会へ通うのに必要な要素の一つに、多くの会員との主にある交わりがあげられます。私の二人の子どもは赤ちゃんの頃から多くの教会員に愛され支えられ育てられてきました。特に若い世代の兄弟姉妹が日曜ごとに声をかけてくれ、話しもあうので交わりを深めてくれました。そのおかげで今彼らをととても慕って、交わりを通して信頼関係を築いています。親に連れられて通っている時期から、自分で行きたいと思うようになる時期への橋渡しをしてくれるのがこの人間関係です。教会へ行きたいという気持ちになる原動力です。このつながりが教会との絆を強くしてくれていることがよくわかります。会員みんなで一人の契約の子を育てるのです。契約の子を育てることは親だけの仕事ではありません。初めに家で心掛けてきたこととお話ししましたが、それ以上に、このことは子どもたちにとって重要なことであると感じています。

言葉が足りないところがあったかもしれませんが、これで発題を終わります。ありがとうございました。



副読本のご案内

『主は羊飼—中高生のための教理入門—』

価 格 800円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師)

ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

❶ 人生の目的—神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に連れ始められた方と聖書の学びをしてきたときの事です。そのときまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました。一わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということ考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのとでは、やはり生きかたが大きくことなってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなのです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手になるジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなく、いと高き神であられ、私たちの命の歩みすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

聖書默想・説教展開例・分級展開例

10月6日 神の御言葉—説教— 教理説教のための聖書黙想

テキスト ローマの信徒への手紙 10章14～17節
子どもカテキズム 問69

問69 御言葉とは何ですか。

答 生ける神の言葉、キリストです。

書かれた神の御言葉である聖書と、

聖霊なる神さまが語られる神の御言葉としての教会の説教を通して、

私たちは、

イエスさまと一つに結び合わされます。

信仰はどこから来るのか。信仰は人間の内なる何かによって生み出されるのではない。人間の積み上げる功績や、何か超常的な宗教体験によって生じるのではない。

信仰は人間の外から来る。わたしたちの外なるお方—イエス・キリストから来る。イエス・キリストがみずからわたしたちに近づきたもう。その近づきたもうキリストを信じ、受け入れることが信仰である。信仰によってイエス・キリストを受け入れるとき、キリストはわたしたちの内に場所を占めたもう。「外なる」キリストが「内なる」キリストとなりたもうのである。

信仰はそれ自身では空虚である。管のようなものである。この管をとおってわたしたちのところに来たりたもうキリストこそが中身なのである。

そして神は、罪人を救う救いの手段、またご自身と人間との交わりの手段として、言葉を用いることをみこころとされた。それゆえ「信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まる」(17節)のである。これが神の秩序である。

ここでの「キリストの言葉」とはキリストを説き明かす説教の言葉である。したがって「聞くこと」とはキリストを説教する言葉を聞くことである。すなわち、ここに言われていることは礼拝の場で起こるのである。主の日の礼拝においてキリストを証しする書物である(ヨハネ5:39)聖書が朗読され、説教される。このキリストの言葉、キリストについての説教を聞くことによって、人

は信仰へと導かれるのである。わたしたちも一人一人、そのような道筋をとおして信仰者とされたのである。

14,15節は、人が信仰に至る道筋をたどっている。人が信仰に至るためには、まず(語る者が)「遣わされる」ということがある。キリストの言葉を宣べ伝える者を、神が世に遣わしたもう。そして彼が「宣べ伝える」からこそ、人は「聞く」ことができる。キリストの言葉を「聞く」ことによって、人は「信じ」る。そして信じたからこそ、信じたお方を「呼び求め」るのである(だれを「信じ」ているのかわからないときには、人は「呼び求め」ることもできないのである)。

それゆえ「良い知らせ」、すなわちキリストの福音を伝える者の足は美しい(イザヤ5:7)と言われる。この美しさは説教者自身がみずから醸し出す美しさではない。彼がゆだねられているキリストの言葉の美しさ、さらにはキリストご自身の美しさを説教者たちもおおのずから帯びるということである。

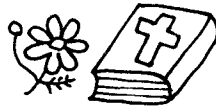
以上のように「聞く」ことは信仰に至るための手段である。しかし聞くことは聞くことのみにはとどまらない。「聞く」ことは「生きる」こととひとつに結びついているのである。

ヨハネによる福音書5章24節で主イエスは、わたしの言葉を聞いて信じる者は永遠の命を得ると仰せになっている。つまり、御言葉を聞くことこそが永遠の命を得る手段なのである。御言葉を聞くことによって、そして聞いた御言葉を信じ受け

入れることによって、主イエスそのものがわたしたちに伝達される。主イエスがわたしたちのところに来たり、わたしたちを住まいとされる。主イエスの命がわたしたちに注ぎ込まれる。主イエスとわたしたちとがひとつの命を生きるということが、文字通り起こるのである。だからこそ教会は聞くことをおろそかにせず歩んできた。説教のわざを教会の最も大切なしるしに数えてきたので

ある。

付け加えるなら、「聞く」とは「聞く」ことにとどまらず、「従う」ことを含んでいる。聞いた御言葉を真実の言葉と認め、これに忠実に従うとき、わたしたちはまさにキリストの命を生きる。わたしたちの命と生活が生けるキリストの恵みの支配のもとに置かれるからである。（木下裕也）



テキスト ローマの信徒への手紙 10章14～17節
子どもカテキズム 問69

〔単元のねらい〕

前回、聖書が神の言葉であることを学んだ。今回は説教を取り上げる。宗教改革期の信条である第二イス信条（1561年）は「神の言葉（＝聖書）の説教は、すなわち神の言葉である」と言っている。聖書のみならず、その聖書を説き明かす言葉もまた神の言葉である。聖書と説教との関係に意を用いつつ、御言葉を聞くことの喜びと幸いを学び取りたい。

説教をとおしてイエスさまと出会う

先週、聖書が神さまの御言葉、命の言葉であるということ学びましたが、神さまの御言葉というとき、もうひとつのことを考えることができます。それは聖書の説き明かしである説教です。わたしたちは主の日の礼拝で、説教を聞きます。日曜学校の礼拝でも御言葉の説き明かしを聞きます。この説教の言葉もまた、(人間の言葉ではなく)神さまの御言葉なのです。

わたしたちがイエスさまを信じるということは、どのようにして起こるのでしょうか。「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まる」(17節)とされています。ここで「キリストの言葉」とは、イエスさまを説き明かす説教の言葉です。ですから「聞くこと」とは説教の言葉を聞くことです。

わたしたちは説教を聞くことによって信仰へと導かれるのです。主の日の礼拝で聖書が読まれます。そして説教されます。聖霊なる神さまは、このキリストの言葉——聖書と説教の言葉を用いてわたしたちの心に働きかけ、わたしたちにイエスさまのすばらしさを教え示してください。そしてイエスさまを信じ受け入れ、イエスさまを救い主と告白し、イエスさまに従って生きる幸いな人生へと招き入れてくださいます。一人一人、そのような道筋をとおして信仰に生きる人にされていくのです。

イエスさまを信じる信仰がイエスさまの言葉を

聞くことによって始まるということ。それが神さまがお定めになった秩序です。そうである以上、語る人が必要です。「信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう。遣わされないで、どうして宣べ伝えることができよう」(14, 15a節)。

それで、教会には御言葉を語る人、説教のつとめを担う人が備えられています。その人は、イエスさまの喜びを告げ知らせる人です。イエスさまの知らせは福音——喜びの知らせです。それゆえ、説教の言葉を聞くことは大きな喜びです。

「良い知らせを伝える者の足は、何と美しいことか」(15節)とされます。説教する人自身が美しいというわけではありません。イエスさまの御言葉の美しさです。イエスさまご自身の美しさです。それが説教の言葉をとおして、わたしたちのもとに運ばれるのです。

信仰。それは聖書と説教の言葉によって持ち運ばれるイエスさまの喜びの知らせに、わたしたちもまた喜びをもっておこたえすることです。神さまはわたしたち人間と出合い、ふれあい、交わりをお持ちになる手だてとして、言葉をお用いになります。わたしたちは言葉をとおして神さまと出会います。イエスさまと出会います。言葉をとおして、そして言葉とともに働きになる聖霊の導

きによって、今この耳で聞き、この目で見、この手で触れるようにして復活のイエスさまと出会います。そのとき天の祝福、この世が生み出すことのできない命、この世が造り出すことのできない光がわたしたちのもとに届けられるのです。注がれるのです。そのすばらしい命と祝福をいただいて、わたしたちは神さまをほめたたえ、神さまに感謝をささげるのです。

説教とはイエスさまの知らせです。聖書に証し

されているとおりのイエスさまが語り示されます。そして説教を聞くことは、ただ聞くことにとどまりません。「言の内に命があ」(ヨハネ1:4)ります。イエスさまの御言葉は、命の言葉です。イエスさまの御言葉を聞いたなら、わたしたちはイエスさまの命を生き始めるのです。イエスさまに聞き従う歩みを始めるのです。喜ばしい命に至る道を歩み始めるのです。(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 10章17節

実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。



〈ねらい〉

信仰はイエス・キリストの言葉、聖書の言葉を聞くことから始まる。礼拝で語られる説教もまた神の言葉の説き明かしであることを教えたい。

〈展開例〉**1. なぜ「聞く」ことから始まるのか**

私たちは何によって神様の御心やご性質を知ることができるのでしょうか。

美しい花々や自然をとおして神様の存在や素晴らしさを感じます。おいしい食べ物を造ってくださった方に感謝の思いがわいてきます。しかし、それらをとおしてイエス様の十字架の意味がわかるようになることはありません。

信仰は、キリストについての御言葉を聞くことから始まります。神様がどんなお方なのか、またどのようにして人間を罪から救い出してくださるのかを、神様は聖書の言葉を用いて教えてくださいます。

2. 神の言葉として聞く

聖書を神様の言葉としてではなく、人間の言葉として読む人がいます。聖書に書かれていることは作り話で、キリスト教に都合のよいように事実を書き換えたものだと考えているのです。

また聖書を道徳の本として読む人もいます。信じる気はないけれど、立派な行いをするためのお手本の書として役に立つ本だと思っています。

人が救われるためには、聖書の御言葉を神様の言葉として受け取り、それが信仰へと結びつけられなければなりません。

「彼らには聞いた言葉は役に立ちませんでした。その言葉が、それを聞いた人々と、信仰によって結び付かなかつたためです」(ヘブライ人への手紙4:2)。

3. 説教も神様の言葉なの？

礼拝の説教では、聖書の御言葉が分かるように、説き明かされます。礼拝で語られる説教をとおして「神様の言葉」が私たちに届けられます。

「語っている先生は人間なのに、どうして説教が『神様の言葉』なの？」と思うかもしれません。それは、語る人が神様だからではありません。説教を語る先生が、神様から言葉をあずかって聞く人に届けているからです。聖霊なる神様が、説教をとおして私たちに語りかけてくださるのです。

ですから、同じ説教を聞いても、皆が同じところで同じことを教えられるわけではありません。生ける神様が聖霊によって、一人一人にふさわしく働きかけてくださるからです。

神様が語ってくださる恵みの言葉を、心を開いて熱心に聞きましょう。

**4. みことばカルタを作って遊ぼう**

- ・画用紙をカルタの大きさに切る。(5cm×7cm ぐらい)
 - ・聖句を読み札(前半)と取り札(後半)に分けて書く。
- (次ページ参照)
- ・書きながら、聖句を覚える。
 - ・出来上がったら、カルタ取りをして遊びましょう。

《みことばカルタの聖句》(右が読み札で左が取り札)
 (難しい漢字はルビをつけるか、ひらがなで書きましょう)

幸いである	心の貧しい 人々は
-------	--------------

わたしのもとに 来なさい 休ませて あげよう	疲れた者、 重荷を負う者は だれでも
---------------------------------	--------------------------

思い悩むな	だから、 明日のことまで
-------	-----------------

祈りなさい	いつも喜んで いなさい 絶えず
-------	-----------------------

その枝である	わたしは ぶどうの木、 あなたがたは
--------	--------------------------

人を 創造された	神は御自分に かたどって
-------------	-----------------

創造された	初めに、神は 天地を
-------	---------------

与えられる	求めなさい。 そつすれば、
-------	------------------

(その他の聖句) ……これらの中から子どもたちが知っている聖句を選んでください

読み札の聖句

- ・鶏が鳴くまでに、あなたは三度
- ・主は羊飼い、わたしには
- ・人はパンだけで
- ・だれかがあなたの右の頬を打つなら
- ・何よりもまず、神の国と
- ・人を裁くな。あなたがたも
- ・狭い門から
- ・すべて良い木は良い実を結び
- ・心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして
- ・剣を取る者は皆
- ・わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく
- ・隣人を自分のように
- ・天地は滅びるが
- ・わたしは主のはしためです。お言葉どおり
- ・神は、その独り子をお与えになったほどに
- ・渴いている人はだれでも
- ・わたしに従う者は暗闇の中を歩かず
- ・わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は
- ・わたしは世の終わりまで

取り札の聖句

- ・わたしのことを知らないと言うだろう
- ・何も欠けることがない
- ・生きるものではない
- ・左の頬をも向けなさい
- ・神の義を求めなさい
- ・裁かれないようにするためである
- ・入りなさい
- ・悪い木は悪い実を結ぶ
- ・あなたの神である主を愛しなさい
- ・剣で滅びる
- ・罪人を招くためである
- ・愛しなさい
- ・わたしの言葉は決して滅びない
- ・この身に成りますように
- ・世を愛された
- ・わたしのところに来て飲みなさい
- ・命の光を持つ
- ・死んでも生きる
- ・いつもあなたがたと共にいる

10月13日 神の御言葉—説教— 教理説教のための聖書黙想

テキスト テモテへの手紙二 3章10～17節
子どもカテキズム 問70
参照教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問89, 90
 ウェストミンスター大教理問答 問155～160

問70 御言葉は、どのようにしてあなたに救いの恵みを与えるのですか。

答 私たちが、神の御言葉である聖書と説教に
正しく聴き従うことによってです。
御言葉をよく聴くことこそ、
神さまへの愛と奉仕です。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

テモテは、祖母ロイスと母エウニケがキリスト者であり(1:5)、幼い日から聖書に親しんできました(14節)。御言葉を継続的に蓄えることへの力は非常に大きいものです。

しかし、テモテが今遣わされているエフェソの町(テモテ1:3)では、パウロ同様に、信仰の故に迫害と苦難の中に置かれています(11節)。パウロは、アンティオキア、イコニオン、リストラで迫害・苦難に遭ってきたことを語りますが(11節)、パウロは回心したときから、迫害や艱難に繰り返し遭遇してきたのです(コリント二11:23～28)。異教社会である日本に住むキリスト者として、私たちが信仰を貫くとき、迫害、虐げを避けておることはできません。

苦しみの中、信仰を貫いてきたパウロだからこそ、今同じように苦しみに置かれているテモテに対して、聖書と説教をとおして信仰の養いを受け続けてきたことが、どれほどすばらしいことであり、信仰の戦いを行っていく上で、どれほど大切なことであるかを再確認させるのです。

具体的に聖書を学ぶ中で、私たちに与えられる恵みについて、パウロは三つのことを語ります。

第一に、聖書の目的は、人が信じて救われることです。パウロが「知恵を、あなたに与えることができます」(15節)と語っているとおり、御言葉の働きは人を信仰に導くことです。

第二に、聖書は神の霊の導きによって記された

ので、神の権威があります。したがって、聖書は他の一般書物と同じように扱うべきではありません。聖書の御言葉に聴くとき、学ぶのではなく、従うことが求められるのです。

第三は、聖書の有効性についてです。聖書は、私たち一人一人に対して、信仰の礎を築き、信仰生活を生涯にわたって持続できるように養います。こうして信仰を養うことにより、迫害、信仰の誘惑、さまざまな艱難に出会ったとき、神さまへの信仰を再確認し、信仰を貫く者とされていくのです。

子どもたちは、家庭と教会学校において、聖書とカテキズムを繰り返し学び続けます。カテキズムを覚えることは、子どもたちにとっては、時に難しく、時に無味乾燥に思えるでしょう。

しかし、迫害され、虐げられるとき、あるいは神さまを知らない人たちが多い日本において、信仰を持つことに疑問を持ったり、信仰に対する弁証が求められることも出てきますから、そうしたとき、聖書とカテキズムの言葉は、神の救いを確認し、神の救いに希望を置き、信仰を貫くための力となってくるのです。それと同時に、今まで学んできたこと、救いの喜びを人々に教え、真理を伝え、誤りを指摘し、訓練するための力にもなるのです。基礎ができていなければ、信仰生活を継続し、さまざまな試練や艱難対抗して信仰の戦いを貫くことはできません。だからこそ、子どもが小さい時から、聖書の御言葉と説教に聴き続け、

カテキズムの言葉を身に着けておくことは非常に大切なのです。

〈子どもカテキズムの解説〉

問68で確認したとおり、恵みの手段として、御言葉と礼典とお祈りがあります。その中にあって、御言葉は、直接的に、罪の悔い改めと信仰を得るために非常に大切です。

御言葉に「正しく聴き従う」ためには、正しい教理を身につけることが求められます。そのために子どもたちに、カテキズム教育が求められるのです。この「正しさ」は、神さまと救いに対する正しい知識であり、神さまを信じる信仰につながります。また、誤った教えに対して、誤りを正すことができる知識です。

また、正しい聖書の知識を学び、カテキズムを身につけることにより、神への愛、隣人への愛に生きる者とされ、その結果として善き生活を実践する者として生きるものとされます。

改革派教会は、創立宣言において、見える教会を建てるために、①信仰告白、②教会政治、③善き生活の必要を挙げています。聖書とカテキズムによって正しい信仰の養いが与えられることにより、救いの感謝の応答としての善き生活へと促されるのです。その結果、教会での礼拝と奉仕をとおして神を愛し、聖徒の交わりとディアコニア(執事活動)をとおして隣人を愛することへと導かれていくでしょう。

したがって、神の御言葉である聖書と説教に聴くことは、信仰の告白へと促すばかりか、善き生活をもって、信仰を証しするキリスト者を育てることへとつながるのです。そして、その結果、信仰の誘惑や迫害に対しても、信仰を貫き、証しすることができる信仰者へと子どもたちを成長させるのです。

〈子どもたちに対して〉

神さまを礼拝し、御言葉の説教に聴き続けることに、疑問を持つこともあるかもしれませんが。しかし、神さまは、聖書の御言葉により、説教によって、主イエス・キリストの十字架により罪が赦され、救いが与えられていることを宣言し続けてくださっています。それ以外に、救いを得る道はありません。

だからこそ、子どもたちにとって、礼拝は行かなければならない義務としての場ではなく、神さまによって招かれる喜びの場とならなければなりません。人間的な努力に頼ろうとするのではなく、礼拝をとおして、また特に説教をとおして、神さまが聖霊により子どもたちに語りかける場にならなければなりません。

その結果として、聖書の御言葉と御言葉の説教により、子どもたちに神さまの恵みが示され、罪の悔い改めと信仰の告白へと促されます。このことこそが、礼拝の第一の目的です。

しかし、契約の子どもたちの中には、進学・就職などをきっかけに教会から離れていく人たちもいます。世の中におけるさまざまな信仰に対する誘惑により、子どもたちの信仰が翻弄されている結果ではないでしょうか。

御言葉に聴く、説教に聴き従うことは、こうした信仰の誘惑や試練を乗り越え、それらに働くサタンに打ち勝つ力を備えます。だからこそ、子どもたちがこうした信仰の誘惑に遭っても、それを乗り越える信仰が、その時点で備えられていなければなりません。

そのためにも、小さい時から、子どもたちに神の言葉が伝えられ、届けられ、御言葉に正しく聴き従う信仰の養いが求められています。各教会学校・日曜学校に委ねられた役割は、非常に大きいのです。
(辻 幸宏)

テキスト モテへの手紙二 3章10～17節
子どもカテキズム 問70

〔単元のねらい〕

聖書の御言葉と御言葉の説き明かしである礼拝説教は、子どもたちを救いに導く力と共に、信仰を持った子どもたちに、日に日に待ち受けるさまざまな試練・艱難・迫害の中で、信仰を証しさせる力を持っています。そのように聖霊をとおして神さまは働いてくださるので、神の恵みによって生きることができるのです。今回の礼拝説教ではこのことを子どもたちに語り、神の御言葉と礼拝説教の素晴らしさを、伝えていただきたいと思います。

御言葉に聴いて、学び続けなさい

みんなは、教会学校に来るのは楽しいですか？ 礼拝で神さまのお話を聞くことは楽しいですか？ 先生は、今日も教会に来ることができて、また聖書をとおして神さまが先生自身とみんなに神さまの言葉を語りかけてくださることが非常に嬉しいです。なぜかって？ 聖書の御言葉が語られるとき、イエスさまが私たちを救うために、私たちの代わりに十字架に架かり、私たちのために死んでくださったことが教えられますよね。私たちはもう十字架に架からなくていいんだよ。神さまがおられる天国に行くことができるんだよ。そればかりか、今日も、神さまは私たちと一緒にいてくださり、私たちが苦しんでいたら励ましてくださいます。苦しみを乗り越えることができるように、解決方法をお教えてください。私たちが祈ると、神さまは必ず答えをくださるのです。

だから先生は、毎週毎週、教会に来て、神さまから説教のお話を聞くことが大好きです。この中には、最近教会に来るようになったお友だちもいるかもしれませんが、小さい時からずっと教会に来てお友だちもいますよね。それは本当に素晴らしいことだと思います。神さまがいつも一緒にいてくださり、あなたは神の子どもですと伝えられていることを聴き続けているからです。

なので、毎週毎週、聖書の言葉を聴き続けることが素晴らしいことかといえば、「あなたを罪の中から救う」と宣言して下さっているのは、聖

書の御言葉だけだからです。みんなが教会学校に来て、聖書の御言葉を聞いているからこそ、説教を聞いているからこそ、イエスさまが十字架の死によって、みんなを救ってくださったことを、私たちは知ることができて、神さまを信じることができるのです。

みんなの中には、「説教で語られていることはもう何度も聞いたから、もういらない」と言う人がいるかも知れません。「もう教会に来るのが嫌だ」と思っているお友だちもいるかもしれません。でもね、パウロさんは弟子であるテモテさんに語っています。「あなたは、自分が学んで確信したことから離れてはなりません。あなたは、それを誰から学んだかを知っており、また、自分が幼い日から聖書に親しんできたことをも知っているからです」(14,15節)。パウロさんは、テモテさんが神さまを信じるために、まわりにいる人たちからいじめられ、苦しめられていることを知っていたので、このように励ましの言葉を語っているのです。テモテさんは、おばあさんも、お母さんもクリスチャンだったので。だから、テモテさんも小さい時から、聖書の話聞き続けてきたのです。だから、テモテさんも、イエスさまが十字架に架かれたからこそ、救われたことを知っており、信じていました。また、今、苦しいけれども、神さまに祈れば、助け出してく下さるか、一番素晴らしい解決をお与えくださることを信じ

ていました。だからこそ、パウロさんは、今まで聞いてきたことを思い出すことによって、苦しい中でも、救われた本当の喜びをもってクリスチャンであり続けることができるし、さらに神さまのことを、多くの人たちに証しすることができるんですよと、テモテさんに伝えているのです。

そしてテモテさんにお語りくださったパウロさんは、同じ言葉を、今教会学校に来ているみんなにもお語りくださっています。聖書の御言葉を聞くこと、説教を聞くことは大切だよ、そして聖書に記されているイエスさまによる救いを信じることは素晴らしいことですよ、と。

「でも、自分で聖書を読もうと思って、難しく理解できない」というお友だちもいますよね。でもね、みんなは毎週、説教を聞く前に、何を読んでいますか？ 子どもカテキズムをみんなで一緒に朗読していませんか？ カテキズムを理解することができれば、聖書も理解することができるようになるんだよ。ちょうど、お店に行こうとしても道が分からないときに、地図やナビを使って道を確認しながら行けば、ちゃんとお店に着くことができますよね。それと同じように、カテキズムをちゃんと理解することができれば、聖書も理解することができるようになるのです。だからこそ、カテキズムを学ぶことは、とっても大切な

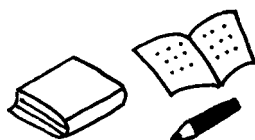
です。

それからもう少しだけ聞いてください。聖書をちゃんと理解して、イエスさまが私たちを救ってくれたんだ、ということ信じることができれば、「神さまありがとう」と思うよね。こうして神さまによって救われていることを喜ぶことができれば、毎週神さまを礼拝するのも先生のように嬉しくなります。同じように神さまを信じて教会に来ている人たちと一緒にいることも、楽しくなります。そして、神さまが聖書によって私たちに語っておられることを、守ることは素晴らしいことだと分かるようになります。そうすれば、周りに困っている人がいたならば、実際に手助けすることもできるようになります。震災や原発の事故のために苦しんでいる人のために何かできないかなと思って、祈ることもできるようになります。

このように、神の御言葉である聖書、そして説教を聴き続けることで、神さまによって愛されている喜びに満たしていただけます。毎日を楽しく送ることができるようになります。だからこそ、みんなも、毎週、教会学校に来て、神さまから語られる御言葉を聴き続けていただきたいと思います。(辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] テモテへの手紙二 3章14節

だからあなたは、
自分が学んで確信したことから離れてはなりません。



〈ねらい〉

聖霊の助けを祈り求めながら聖書を読み、また説教を聞くことが大切であることを伝えたい。

〈展開例〉**1. 聖書の影響力**

南太平洋のある島での話です。ヤシの木陰で、その土地で生まれた一人の人が熱心に聖書を読んでいました。そこへ、神を信じない西洋人が通りかかり、「私たちの国では、よほど時代遅れの者でなければ、そんな本は読みませんよ!」と言いました。すると、その人は顔を上げて、“ニッ”と白い歯を見せながら、「しかし、私がこの本を読んでいればこそ、あなたは、無事にここにいられるのですよ。私どもは人喰い人種でしたが、聖書に触れてキリストを信じてから、以前の悪習慣を捨てて、全く生まれ変わった人間になったのです。もし、私が聖書を知らなかったなら、今頃、あなたは、私の腹の中にいることでしょう……」すると、その西洋人は「ブルッ」と身震いして、足早に立ち去っていったそうです。(http://www.geocities.jp/jesus_kohituji/message05_04/message2005_0425.html より)

聖書はそれを読む人の心を変える不思議な本です。罪を教え、悲しんでいる人に慰めを与え、迷いの中にある人に道を示します。

病院で薬をもらうとついてくる「薬の説明書」を見たことがありますか。その中には、薬の名前や成分、効能（何にきくか）などが書いてあります。

聖書の成分は「神の言葉」です。

聖書の効能は、イエス・キリストへの信仰を与え、救いに導くことです。また聖書は、信じた人が義しく生きるための道しるべとして用いられます。(ヤコブ1:21、テモテニ3:15～16)

2. 聖霊の導きを祈りつつ聞く

しかし、聖書は、薬のように、誰にでも自動的に効き目があらわれるというものではありません。聖霊の導きがなければ、聖書を正しく理解したり信じたりすることはできません。なぜなら、聖書は聖霊の導きによって書かれた本だからです。

聖書が説き明かされる説教も同じです。聖霊が共にいて導いてくださらなければ、説教を正しく理解することはできません。「神様の言葉がよくわかるように導いてください」という祈りをもって礼拝にあずかりましょう。

あの話なら前に聞いて知っているから聞かなくてもわかると思って、いい加減な気持ちで説教を聞くことはありませんか。信仰は聞くことから始まり、聞き続けることで成長していきます。聞くことをやめれば成長は止まります。神様はそのときに必要な導きを、御言葉をとおして与えてくださいます。キリストの言葉を聞き続け、豊かな実を結ぶ人にならせていただきます。

3. 聖書人物さがしゲーム

次の人物が聖書の何という書に出てくるかを、聖書を開いて見つけよう。(並行記事もOK)先生も一緒に挑戦してみてください。

アダム	ザアカイ	ノア	イスカリオテ
のユダ	サウル	ヨナ	アブラハム
マルタとマリア	放蕩息子	ヨブ	ソロ
モン	ナアマン	バラバ	エリサベト
ナオミとルツ	モーセ	リベカ	ヘロ
デ王	ダニエル	カインとアベル	サム
ソンとデリラ	ピラト	ニコデモ	エリ
ヤ	金持ちの青年	ヨセフとその兄弟	
ヨナタン			

(カードの表に人物の名前を書き、裏返しにしてカードを積み上げておき、1枚ずつめくる。答えがわからないときはヒントをあげてね)

テキスト	コリントの信徒への手紙一 11章23～29節
子どもカテキズム	問71
参照教理問答	ジュネーブ教会信仰問答 問309～322 ウェストミンスター大教理問答 問161～164, 171, 176～177

問71 礼典とは何ですか。

答 洗礼と聖餐です。神さまは、聖霊のお働きによって、目に見える物を用いて、私たちをイエスさまと一つに結び合わせ、教会の枝としてくださるのです。キリストの祝福のすべてを受けていることを表し、保証し、しるしづける、目に見える御言葉です。

〈礼典の教理を立てる道筋〉

単元の主題である「礼典」は、聖書の用語ではありません。したがって、聖書にある特定のテキストを物語ることによって、直接「礼典」の教理を立てることは困難です。むしろ神学の用語として、教会の信仰告白の歴史の中で、「礼典」がどのように理解され、その教理がどのように立てられてきたかに注目する必要があります。幾つかのふさわしい聖書テキストに基づいて、神の真理としての礼典の教理を立て、それを平易な言葉で信徒たちに伝えることが、目下の道筋です。

〈ジュネーブ教会信仰問答にある鍵〉

プロテスタント宗教改革の源流に位置するこの信仰問答では、「聖礼典について」多くの分量が費やされて教理が立てられます。それは、聖礼典が宗教改革の主要な課題のひとつであったことと無関係ではありません。つまり礼典の教理は、教会のアイデンティティ、すなわちプロテスタント教会が真にプロテスタント教会として立つための、極めて重要な信仰告白であったということです。

神が私たちに「ご自身を伝達したもう手段」として、神は御言葉の説教に「聖礼典」を結びつけられました。聖礼典とは、私たちに対する神の慈しみの「外的な証し」であり、神の約束を私たちの心に証印するため、霊的な恵みを「目に見えるしるし」によってあらわし、約束が真実であることを一層固く信じさせるためのものです。しるし自体は効力を持ちませんが、神の御旨によって、

目的に定められている限りにおいて、霊的な働きをするものです。もちろん、神の約束を私たちの魂に証印するのは聖霊固有の役目であり、心を揺り動かし、感動させ、精神を照らし、良心に確信を持たせ、静穏にさせるのは、御霊の真の力によつてです。神が聖礼典をいわば「二次的器具」として認め、その使用を付加したもうたことに、差し支えはありません。なぜなら、聖礼典の効力は、その外的要素の内に含まれるのではなく、すべて聖霊にあるからです。

どうして主がこのようになさるか、その理由を説明できるかが鍵です。これはひとえに「私たちの弱さを考慮しての措置」なのです。私たちは土の器にすぎませんから、霊的・天上的な事柄を直視することができません。そこで、地上的な方法による象徴あるいは鏡が必要となります。神の約束に向けて、私たちのすべての感覚が修練され、信仰がいよいよ堅固にされることが大切です。聖礼典の執行に伴う効力は、私たちが信仰をもって受け、そのうちに「ただキリストとその恵みを求めるときのみ」あらわれます。信仰は、私たちのうちに一度始まっただけでは十分ではありません。継続的に養われ、日に日に成長しなければなりません。それゆえ、信仰を養い、強め、前進させるために、主イエスは聖礼典を制定されたのです。

使徒パウロは、聖礼典が神の約束を証印する力を持つと説きました。キリスト教会の聖礼典は「洗礼と聖晩餐」です。この二つの聖礼典が全信徒の

間で共通に守られます。

〈ウェストミンスター大教理問答がとる文脈〉

宗教改革の徹底を図るこの教理問答は、聖礼典の有効性と制定目的、洗礼と主の晩餐の異同に注目して、それらを恵みの契約の文脈に置きました。聖礼典が「救いの有効な手段」となるのは、礼典自体や執行人ではなく、ただ「聖霊の働き」と、制定者である「キリストの祝福」によるのです。

聖礼典とは、キリストによって教会の中に制定された「聖なる規定」です。その目的は、①恵みの契約の中にある人々に対して、キリストの仲介によるさまざまな益を明らかにし、証印し、提供するため、②彼らの信仰と、他のすべての恵みの賜物とを強め、増し加えるため、③彼らを従順に至らせるため、④彼ら相互の愛と交わりを証しし、育むため、⑤彼らを外部の人々から区別するためです。

聖礼典の要素、その一つは、キリストご自身の指定に従って用いられる「外的な、知覚できるしるし」です。もう一つは、それによって意味される「内的な、霊的恵み」です。

新約の二つの礼典は、次の点で一致しています。①いずれの創始者も神であること、②いずれの霊的な内容もキリストと彼の与える益であること、③いずれも同一の契約の証印であり、福音に仕える牧師によって実施されるべきもので、それ以外の誰によっても実施されてはならず、キリストの再臨の時まで、彼の教会において継承されなければならないことです。

洗礼と主の晩餐は、次の点で異なっています。①洗礼は、私たちの再生とキリストへの接ぎ木のしるしと証印となるよう、水で、一度だけ、幼児にも執行されます。これに対し、②主の晩餐は、魂への霊的な滋養としてのキリストをあらわし、提供するため、また私たちがキリストの内にあり続け、成長することを確証するため、自分を吟味する年齢に達し、そうする能力のある者に対してだけ、パンと葡萄酒の二品で、しばしば執行されます。

〈礼典の教理を立てる聖書テキスト群〉

洗礼（マタイ3:11および28:19,20、使徒

2:38,39）、聖餐（マタイ26:26～29、コリント一11:23～29）、キリストとの交わり（マルコ10:38,39、使徒2:38、ローマ6:3～5、コリント一3:6,7および10:1～5と16および11:23～26および12:13、ガラテヤ3:27,28、コロサイ2:11,12、テトス3:5、ペトロ一3:21、ヨハネ1:33および6:53～58と63）

〈子どもカテキズムによる黙想〉

問71が「礼典とは何か」を問いかける目的は「目に見える御言葉」と答えさせることにあります。「聖礼典（ sacrament ）は目に見えない恵みの、目に見えるしるしである」と説いた教父アウグスティヌスを想起させます。

ジュネーブ教会信仰問答は、見える・見えないという問題には深入りせず、むしろ「信徒の弱さを考慮しての措置」という制定理由に注目させ、「ただキリストとその恵みを求めるときのみ」効力を発揮することを強調しました。ウェストミンスター大教理問答も、聖礼典の有効性と制定目的、洗礼と主の晩餐の異同を、恵みの契約の文脈に置くことで、しるしの可視性ではなく、契約の有効性の方を重視しました。

この歴史の流れに沿うならば、「キリストの祝福のすべてを受けていること」すなわち「契約の有効性」にこそ注目させるべきでしょう。その有効性を「表し、保証し、しるしづける」聖礼典が、信仰の弱さを支えてくれる「聖霊の道具」であることを認識させて、その手段に与かるよう勧めることも必要でしょう。

〈聖餐式文の一節による黙想〉

筆者は「自分自身を吟味しなければなりません」（コリント一11:28）という式文の一節によって礼典を意識し始めました。聖餐に臨む前に、自分がキリストにあること、自分の罪と欠点、知識・信仰・悔い改め・神と兄弟姉妹への愛・すべての人への思いやり・自分に悪をなした人への赦し、その真実さと程度、キリストを慕い求める思い、自分の新たな従順、これらについて自己吟味できるよう子らを励ましたい。そうすることが、信仰告白への備え（ウ大177）、毎月のふさわしい陪餐への備えにつながるからです。（二宮 創）

テキスト コリントの信徒への手紙一 11章23～29節
子どもカテキズム 問71

〔単元のねらい〕

単元の見目は「礼典によって私たちの信仰が強められる。聖霊の祝福のうちに生きよう」です。主題である「礼典」という言葉は、聖書にも使徒信条にもあらわれません。カテキズム文書で初めて出会う教理の用語、すなわち信仰告白の言葉です。CS生徒たちの戸惑いに共感しながら、特に契約の子らを信仰告白へと導き励ます説教を目指しましょう。幼児洗礼を受け、すでにキリストの祝福のすべてを受けている「契約の有効性」を確信させることが目標です。その有効性の目印として与えられる礼典、すなわち洗礼と聖餐が、私たちの信仰の弱さを支える「外的しるし」であり、そこに意味される「霊的恵み」を私たちに悟らせてくださる聖霊に信頼させることが重要です。洗礼を受けた者が聖餐を受けるために、どのような備えが必要なのか。それを知ることが、信仰告白の備えとなり、ふさわしい陪餐の備えともなります。ウェストミンスター大教理問答171, 176, 177問は大いに役に立ちます。

聖餐を受けるために

今日は「礼いてん」について、お話しします。礼拝の「礼」に、国語辞典の「典」と書く「礼典」です。この言葉そのものは、聖書にも使徒信条にも出てきません。しかしカテキズム（教理問答）のような文書には必ず出てくる、信仰告白の言葉です。国語辞典で「礼典」を引きますと、「礼儀についての法則、それを記した書物、あるいは儀式」とありました。「教会の礼典」とは、聖書に記された礼拝についての特別の法則、礼拝において執り行われる独特の儀式、すなわち「洗礼と聖餐」のことです。この二つの儀式を合わせて、「礼典」と呼ぶのです。

礼典の二つの儀式には三つの共通点があります。一つは、洗礼も聖餐も神さまが始められた法則、すなわちイエスさまがお定めになった儀式であるということです。もう一つは、礼典で用いられる水とパンと葡萄酒には特別の意味がある、すなわちイエスさまが私たちにくださる恵みが示されているということです。さらにもう一つは、神さまがその恵みを私たちにくださると約束しておられる、すなわちイエスさまと共に私たちが神さまの子どもにしてください、契約のしるしであるということです（ウ大教理176）。

洗礼は、私たち一人一人がイエスさまとの絆にしっかりと結び合わされたことをあらわす、恵みのしるしです。道端に落ちている木の枝は、放って置かれれば枯れてしまいます。しかし農夫によって拾い上げられ、葡萄の木に接ぎ木されると、養分が沁み込んでふたたび葉を広げ、花を咲かせ、実を結ぶようになります。ちょうどそのように、生まれながらの人間は罪と死に囚われて、放って置かれたら死んでしまいます。しかし父なる神さまによって救い上げられ、イエスさまに結び合わされると、御言葉が沁み込んで罪から清められ、信仰が芽生え育って、死に勝つ命を生きようになるのです。このような聖霊の恵みを、水による洗いにおいてあらわす礼典こそ、洗礼です。これは人生に一度だけの儀式で、信仰告白する大人だけでなく、まだ言葉も話せない子どもにも授けられる、神さまの自由な契約のしるしです。

聖餐は、私たちがみなイエスさまの命に養われ分かち合って生きていることをあらわす、契約のしるしです。葡萄の枝は木につながっていなければ、実を結ぶことができません。つながっていれば、豊かに実を結びます。そのように、私たちもイエスさまの命と引き換えに生かされ、イエスさま

まの共同体として結び合わされているからこそ、信仰は成長し、永遠の命が保証されるのです。このような聖霊の恵みを、パンと葡萄酒による養いにおいてあらわす礼典こそ、聖餐です。これは一生涯にわたって繰り返される儀式で、信仰者である自分を吟味する年齢に達し、そうすることができる者だけに授けられる、神さまからの無償の恵みのしるしです（ウ大教理177）。

いまお話ししている私も、ここにいる皆さんの多くと同じように、契約の子でした。0歳の時に幼児洗礼を受けたことは、古い白黒写真を見せられて知りました。日曜学校に通いながら、近所の友だちを教会に誘う子どもでした。しかし、小学校から中学校に上がる頃になると、友だちはだんだん教会に来なくなり、とうとう男子は私一人になってしまいました。淋しい気持ちはありましたが、それでも教会を離れたいとは思いませんでした。やがて、中学卒業後、家からも教会からも遠くにある学校の寄宿舎に住むことになり、近くに教会はなく、日曜日の礼拝を守ることもできなくなりました。それでもイエスさまから離れてしまったという実感はなかったのです。これは本当に不思議なことです。父と母が私のために祈ってくれていた。教会学校の先生が私のために心を配ってくださった。私を実の孫のように愛してくださった牧師がたびたび訪問してくださった。このような支えのすべてが、洗礼を受けた者に与えられる恵み、神さまからの恵みであった。ただそのことに、感謝するばかりです。

信仰告白を期待された18歳の頃、一つの言葉が私の心を支配するようになりました。それは、「聖餐を受ける者は自分自身を吟味しなければなりません」という、礼典のたびに牧師から勧められる言葉でした。それが新約聖書に記された規定であることを知ったのです。「あなたがたは、このパンを食べこの杯から飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。従っ

て、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して、罪を犯すことになります。だれでも、自分をよく確かめたくて、そのパンを食べ、その杯から飲むべきです」（コリントー11:26～28）。

主イエスさまの十字架の死によって、私は罪を赦され、神の子どもとしていただいた。キリストの教会共同体の一員としていただいた。私が信仰を告白して誓約するずっと前から、父なる神さまは恵みの契約を果たしてくださった。この幸いへの感謝は未熟そのものでありましたが、それでも19歳のクリスマスに、弟と一緒に信仰告白することを許されたのです。

そして今でも、聖餐の礼典において「自分自身を吟味しなければなりません」と勧められるたびに、私は自分自身に問いかけます。「赦された罪人として、隣人の罪を赦しているか」「憐れみを施された者として、兄弟姉妹に憐れみを施しているか」「慈しみを注がれた者として、あらゆる人に慈しみを注いでいるか」と。洗礼の礼典によって、すべての罪を赦されたからこそ、残れる罪を認めて悔い改め、聖霊の恵みに謙虚に信頼し、キリストの僕として生きることを改めて誓う。このような自己吟味を通して、聖霊はあなたを「聖餐を受けるにふさわしい者」としてくださり、赦しと和解の恵みのすべてに与らせてくださいます。この何よりの喜びを味わい、分かち合うことができる者としてくださるのです。

洗礼を受けたあなたも、聖餐を受けるために、神さまの自由な契約を覚えましょう。神さまからの無償の恵みを数えましょう。あなたを主イエスさまに結び合わせてくださった父なる神さまに、どこまでも感謝をささげましょう。そうすることこそ、信仰告白の備えとなります。そして、聖餐の礼典に毎回ふさわしく与かるための備えとなるのです。聖霊の導きをお祈りします。（二宮 創）

[今週の暗唱聖句] コリントの信仰への手紙一 11章28節

だれでも、自分をよく確かめたくて、
そのパンを食べ、その杯から飲むべきです。

〈ねらい〉

礼典とは神様の恵みの「目に見えるしるし」です。「しるし」とは何か、なぜ必要なのかを考えます。

〈展開例〉

1. 礼典とは

今日のお話で、礼典という言葉が出てきました。礼典とは何でしょう。それは、「神によって制定された、目に見える聖なるしるし」（ハイデルベルク信仰問答 問66）です。

教会ではさまざまな式が行われます。献堂式、牧師就職式、進級式、転入式、加入式、結婚式、葬式などです。

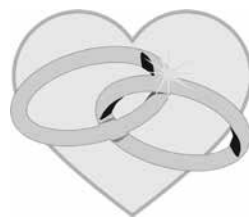
これらは教会で行う式ですが、礼典ではありません。洗礼と聖餐だけが礼典と呼ばれます。この二つだけが、イエス様によって定められた礼典です。（マタイ26:26～29、28:19）

2. しるしとは

しるしは目に見えないものを形であらわしたものです。それでは、私たちのまわりにはどんなしるしがあるでしょう。（交通ルールを示す道路標識、会社の名前やイメージをあらわすロゴマーク、平和のシンボルの鳩など具体的なしるしを用意して見せる）

いろんなしるしがありますね。しるしによって、目に見えないものをあらわしたり、他のものと区別したりすることができます。

たとえば、結婚式では指輪を交換します。永遠を意味する輪（指輪）によって、結婚の誓いを形にし、誓いの証しを確かなものとするのです。結婚指輪は二人の愛のしるしであり、結婚していることのしるしです。



3. 礼典は何をあらわすしるし？

それでは、礼典は何のしるしでしょう。水が体の汚れを洗い落とすように、洗礼は、キリストの十字架の血が私たちの罪を洗い清めることをあらわします。聖餐式のパンは十字架で裂かれたイエス様の体をあらわし、ぶどう酒は十字架で流されたイエス様の血をあらわします。礼典は目に見える神の救いの恵みのしるしです。礼典にあずかるということは、神の家族とされたことのしるしです。（洗礼と聖餐については後日、詳しく学びます）

4. 礼典は何のために定められたのか

神様はどうして礼典を定められたのでしょうか。それは、私たちに与えられている救いが確かなものであることを確信させ、強めるためです。

礼典によって、私たちは、目で見、耳で聞き、口で味わい、鼻でかぎ、手で触れ、水の冷たさを皮膚で感じるすることができます。聖霊は、これらのしるしを用いて、救いと恵みが確実であることを心に刻みつけてくださるのです。神様は、耳で聞く説教と共に、目や耳や鼻や手で感じ取れる礼典を与えてくださいました。ですから礼典は「目に見える御言葉」とも言われています。

5. しりとりゲーム

（次ページ参照）

《しりとりゲーム》

㊦・㊧・㊨ を通ってスタートからゴールまでしりとりで進みましょう。最後は ㊩ で終わります。チームに分かれて早くゴールした方が勝ち。間違ったら消しゴムで消して、またそこからやり直してね。

スタート →	し																			

(解答例)

スタート →	し	ま	う	ま	つ	た	け	い	と	う	が									
	ら	い	す	り	っ	ぱ	せ	り	か	め	ら									
	み	ま	う	ま	き	っ	て	ん	し	ん	す									
	こ	し	ぎ	ん	こ	う	ま	ん	と	ぶ	く									
	ん	す	さ	ゴール	ん	め	け	い	け	ん	り									
	だ	う	う	ど	ん	う	よ	ち	ゃ	し	す									
	ん	ら	ぶ	ん	こ	ね	が	め	る	す	ま									
	ら	お	じ	ら	じ	く	す	ま	ご	ん	り									

テキスト	詩編 32編1～7節
子どもカテキズム	問24
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問33 ウェストミンスター大教理問答 問32 ウェストミンスター信仰告白 第11章 ハイデルベルク信仰問答 問56

問24 主イエス・キリストは、私たちの救いのために、どのようなお働きをしてくださったのですか。

答 主イエス・キリストは、
私たち罪人の身代わりとして十字架に死に、
三日目に、永遠のいのちによみがえられました。
ですから、私たちは、罪赦されて
神と共に永遠に生きる祝福に
生かされています。

〈宗教改革記念日〉

1517年10月31日に、ルターは、「九十五箇条の提題」（正式には、「贖宥の効力を明らかにするための討論提題」）を公にしました。もうすぐ迎える2017年は、宗教改革500周年です。

11月1日は、ヴィッテンベルクの町で聖遺物が公開され、それを見ると煉獄の炎の苦しみ、2万年分帳消しになるとされていましたので、ルターはその前日を選んで、この提題を公表したのだと言われます。

プロテスタント教会は、この10月31日を、宗教改革が始まった記念の日として覚えます。日本キリスト改革派教会でも、多くの教会で、10月31日の直前の主日礼拝を、宗教改革記念日礼拝として献げていると思います（宗教改革記念日礼拝を献げない教会もありますから、その場合は日曜学校の礼拝で、ことさらに宗教改革そのものに触れる必要はありません）。

この宗教改革記念日礼拝にふさわしいのは、宗教改革運動を通して、神様が明らかにしてくださった聖書の教えを、私たちの信じ歩むべき道筋として確認することです。

この日は、詩編32編1節から7節をとおして、主イエス・キリストの義のみが、私たちの罪を赦

し、救いの喜びの中に生かすのだという、「信仰義認」の教えを、子どもたちと共に心に刻みたいと思います。

日曜学校の教師の皆さんに、この折りに是非一読をお勧めしたいのは、昨年6月に出版された『マルティン・ルター—ことばに生きた改革者—』（徳善義和、岩波新書）です。中高生にも十分に読めると思います。子どもたちが、学校教育で教えられる宗教改革は、味気ないものです。この小著をひもどけば、宗教改革の熱気が、皆さんの心の中に広がるに違いないと思います。

〈ルターと詩編〉

ルターにとってだけではなく、宗教改革者にとって、詩編は特に愛された書物でした。いや、本来は、ペンテコステ以来の教会の伝道の中で、詩編こそは、イザヤ書と並んで、イエス・キリストを預言し、証しする書物として用いられてきました。宗教改革は、その伝統を回復したのだと言えるかもしれません。

ルターは、「全詩編はキリストの詩である」という序文を付して、詩編を教えました。詩編1編2節には、「主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人」という言葉があります。主の教え

を愛することとは、キリストを中心に据えて、そこからすべてを理解することであると、ルターは考えたのです。実に、そのようにして詩編を読み進め、教えてゆく中で、ルターは主イエス・キリストの義が、どのようなものであるかを発見（再発見）するに至りました。ルターの発見の喜びを、私たちもまた味わいたいと思います。

〈詩編32編1～7節について〉

教会の歴史の中で、悔い改めの詩編と呼ばれてきた詩編が七つあります。詩編6編、32編、38編、51編、102編、130編、143編です。礼拝の「罪の告白と赦しの宣言」で、罪の告白への導きのために用いられることも多いのではないかと思います。

詩編32編は、そのような悔い改めの詩編のひとつです。特に1～7節は、神様の御前に自分の深い罪を思い、そしてその罪を告白して、神様に赦していただいた経験を持つ信仰者が、神様に感謝を歌う詩です。

罪の赦しは、1節2節で、三通りの仕方でありあらわされます。「背きを赦される」「罪を覆っていただく」「咎を数えない」です。背きも、罪も、咎も、旧約聖書の中で、罪を示す代表的な言葉ですから、この三通りの言いあらわし方を重ねることで、神様が罪の赦しを、完全に与えてくださった恵みが歌われているのです。

2節の「心に欺きのない人」とは、「霊に欺きのない人」という意味です。罪を赦されるということは、詩編51編12節に明らかなように、神様が清い心を創造し、新しく確かな霊を授けてくださることと重なるからです。

真に正しく愛に満ちた方である神様の御前に、自分の罪を覚えることは、信仰者にとって大きな苦しみです。3節4節の表現は、罪を覚える信仰者の、共通の体験です。日曜学校で、神様の御言葉に耳を傾けている子どもたちも、また共通の経験として持っています。

5節の、神様への罪の告白も、同様に三通りの仕方でも表現されます。「罪をあなたに示し」「咎を

隠さず」「背きを告白する」のです。罪の告白もまた、すべてをご存知である神様の御前に、徹底してなされねばならないのです。

6節7節は、神様の御前に罪を覚え、その罪をすべて告白した者が、神様に赦された幸いを歌い上げる部分です。6節は、一般的な表現ですが、しかしそれは7節の個人的な体験への橋渡しの役割を果たしています。

真に正しく愛に満ちた神様は、御前に立つ者の罪を、御手を置いて教え、示されるお方です。しかし同時に、神様は、慈しみに満ち、罪を赦して「救いの喜びをもってわたしを囲んでくださる方」なのです。この喜びもまた、私たちが、また日曜学校で神様の御言葉に耳を傾けている子どもたちが、共通して持っている経験です。

さて、32編1～7節で、注目したい点をふたつ挙げておきましょう。ひとつは、1節2節の冒頭にある「いかに幸いなことでしょう」という御言葉です。これは、端的に訳すと「幸いである」という宣言です。このお言葉を私たちにに向けて、宣言してくださったのは、イエス様でした（山上の説教）。

もうひとつは、この1節2節の、新約聖書での引用です。パウロは、行いによらず、信仰によって義と認められた人の幸いを、ダビデがたたえていると説明して、この1節2節を、ローマの信徒への手紙4章7、8節で引用しました。

神様の御前に自分が罪人であることを知り、その現実を深く悲しみ、罪を告白することへと導かれ、そして一切の罪を完全に赦されるという恵みは、イエス・キリストを信じる信仰によってのみ与えられるのです。

ルターがそうであったように、信仰によってのみ義とされるという恵みを知ることは、信仰者にとって深い慰めであり、不必要な誇りや自己卑下からの解放です。

今を生きる子どもたちにとっても、慰めと解放である聖書の真理を、生き生きと語りかけたいと思います。
(安田直人)

テキスト 詩編 32編1～7節
子どもカテキズム 問24

〔単元のねらい〕

単元の見目は「宗教改革と私たちの教会の歴史を学び、その信仰告白を受け継いで歩もう」です。教会と世界の歩みのすべては、神さまが導いておられる救いの歴史です。とりわけ、宗教改革は、そのような救いの歴史の中に、神さまが御手を伸ばして起こして下さった大きな出来事のひとつです。

この宗教改革のときに、神さまの導きの中で、教会に与えられたいくつもの祝福の中で、この日の聖書箇所をとおして、三つの点に目をとめたいと思います。①イエスさまこそが救いの幸いを成就してくださる力あるお方であること、②この救いはイエスさまを信じる信仰によってのみ私たちのものとなること、③そして旧約聖書の全体はこのイエスさまを指し示していたこと、です。

救いの幸いを宣言してくださるイエスさま

今日は宗教改革記念日です。中学生のお友だちは、学校の授業で、宗教改革についてならったかもしれませんね。そういう人は、学校でも、ルターやカルヴァンなどの宗教改革者の名前を教えてもらったかもしれません。

そして、今朝、皆さんと一緒に読んだ、この詩編32編は、宗教改革者のルターやカルヴァンが、特別に愛していた詩編のひとつなのです。どうしてでしょうか。まず、その理由から、お話ししたいと思います。

神さまに背いた罪人の私が、どのように救われるか。一生懸命に、神さまの御言葉である聖書を読み、お祈りして、御心に従うことによってでしょうか。

ルターは、神さまに従うことを決心した献身者でした。けれども、聖書を読み、神さまを知れば知るほど、ルターは自分の罪深さを思わずにはおれませんでした。

真に正しいお方である神さまは、罪人の私を裁かれるに違いない。このままでは、滅びが私を待っている。もっと深く、神さまに従うべきだ。そう考えて、行いを清めようとすればするほど、ルターは、自分がどれほど神さまの御心から離れているかに気づかされていきました。

これほどの真に正しい神さまが、私たちの神さまならば、私たちに救いなどないのではないか。ルターは、激しく悩みながら、聖書に取り組みました。特に詩編を読んだのです。

そして発見したのは、人間の行いによって、神さまの正しさ＝義を、満たすことはできないということでした。そうではなく、ただイエスさまを信じることによって、神さまの正しさ＝義は、私たちのものになる。聖書に書かれていることは、ほんとうは、そういうことだったのです。

イエスさまは、私たちの罪を背負い、身代わりの刑罰を受けて、十字架に死んでくださいました。またイエスさまは、私たちに代わって、神さまを愛し、隣人を愛し抜いて、歩んでくださいました。それで復活させられたのです。

この十字架に死なれ、復活させられたイエスさまを信じるときに、私たちの罪は赦され、そしてイエスさまだけが持つておられる完全な正しさ＝義が、私たちのものになるのです。

この発見は、教会をほんとうに新しくしました。宗教改革者たちが真っ先にしたことのひとつは、あらゆる人が聖書を自分で読むことができるように、聞くことができるように、それぞれの国の言葉に翻訳することでした。聖書をとおして、イエ

スさまにお会いし、イエスさまを信じることに
よってのみ、救われるからです。

今朝の詩編は、この恵みを、私たちにはっきり
と示しています。1節2節は、「いかに幸いなこと
でしょう」という言葉で始まっています。イエス
さまの「山上の説教」のことを聞いたことがある
でしょう。イエスさまはこの説教を、「心の貧し
い人々は幸いである、天の国はその人たちのもの
である」という宣言から始められました。

私たちが、父なる神さまの御前に、ほんとうに
幸いに生きることができる。それを宣言なさること
がおできになるのは、十字架に死なれ、復活な
さって、まことの幸いをご自分のものとなさり、
そして私たちに差し出してくださる、イエスさま
だけなのです。

この詩編に繰り返される「いかに幸いなこと
でしょう」という言葉も、「幸いである」という宣
言です。そうであれば、「背きを赦され、罪を覆っ
ていただいた者」、「主に咎を数えられず、心に欺
きのない人」の幸いを宣言できるのは、やはりイ
エスさまなのです。

だからこそ、使徒パウロも、ローマ教会に宛て
た手紙の中で、「行いによらずに神から義と認め
られた人の幸い」を語るのに、この詩編32編1節
2節を引用したのです。

そのことを考えてみると、7節は、イエスさま
のことを指し示している御言葉だなあ、というこ
とが良く分かるではありませんか。

イエスさまだけが「わたしの隠れが」です。イ
エスさまだけが、「苦難から守ってくださる方」
です。そして何よりも、イエスさまだけが、「救
いの喜びをもってわたしを囲んでくださる方」な
のです。

日曜学校の礼拝で、神さまを知ることは、一面
では、まことに正しいお方である神さまを知るこ
とです。このお方の前に、立つことができない自

分を知ることです。

「わたしは黙し続けて絶え間ない呻きに骨まで
朽ち果てました。御手は昼も夜もわたしの上に重
く、わたしの力は夏の日照りにあって衰え果てま
した」(3,4節)。

自分の罪をほんとうに知ることは、神さまの御
手の重みを、自分の心にも、また体にも感じるこ
とです。皆さんも、神さまの戒めに背き、イエス
さまの教えに反してしまったとき、同じように、
神さまの御手の重みを感じたことがあると思いま
す。

けれども、私たちは、イエスさまによって知っ
ています。罪を憎み、きらわれる、正しい神さま
が、その御手のすべての重みを、十字架の上でイ
エスさまにかけてしまわれたことを。

だからこそ、私たちは、十字架のイエスさまに
すがって、また執り成してくださるイエスさまを
信頼して、罪を告白することができるのです。「主
にわたしの背きを告白しよう」(5節)。

そして、神さまは、この告白を聞いて、私たち
の罪と咎と背きを罰するのではなく、赦してくだ
さいます。罰は、イエスさまがすべて身代わり
にお受けくださったからです。イエスさまが、神さ
まの求めておられる正しさ＝義を、すべて行って
くださったからです。

私たちは、いつも繰り返して、愛せない罪に苦
しむと思います。けれども、その苦しみのときに
こそ、イエスさまを信じる信仰を与え続けてくだ
さい、そして罪を赦し、受け入れてくださいと、
祈りましょう。

そして、救いの幸いを宣言してくださるイエス
さまとお会いするために、救いの幸いの宣言を聞き
取るために、来週も、この日曜学校の礼拝に、
出席させていただきましょう。

それだけではなく、「いのちのパン」を読んで、
毎日、聖書の中で、ご自分を証ししてくださって
いるイエスさまにお会いしましょう。(安田直人)

[今週の暗唱聖句] 詩編 32編7節

あなたはわたしの隠れが。苦難から守ってくださる方。
救いの喜びをもってわたしを囲んでくださる方。

〈ねらい〉

宗教改革の出来事と、宗教改革の三大原理について学ぶ。

〈展開例〉**1. 宗教改革とは**

宗教改革とは16世紀にドイツから始まった、聖書に立ち返る改革運動です。

ローマ教皇を頂点とするローマ・カトリック教会は、国家の権力と結びつき、墮落していました。お金を出して買えば罪がゆるされるなどとする「免罪符」を販売したりしていました。このように腐敗した教会を、聖書によって改革しようとする運動が起こりました。

この運動は、1517年10月31日にドイツのマルティン・ルターが、「95ヶ条の提題」という抗議

文をヴィッテンベルク城教会の扉に張り出したことから始まります。

ルターに続いてジャン・カルヴァンもスイスのジュネーブで宗教改革を推し進めました。

この運動はヨーロッパ全土に広まり、ローマ・カトリック教会に対してプロテスタント教会が生まれました。プロテスタントとは抗議する者という意味です。

日本キリスト改革派教会は、ジャン・カルヴァンの宗教改革の精神に立つプロテスタントの教会です。

2. 宗教改革の三大原理

宗教改革が重んじた三つの原理があります。

①聖書のみ ②信仰のみ ③万人祭司

以下はローマ・カトリック教会との比較です。

比較する項目	ローマ・カトリック	プロテスタント
「聖書」に対する考え方	聖書と同様に、聖人の言い伝えも神の言葉と同じ力を持つ。	聖書のみ が神の言葉である。
「救い」の考え方	信仰と善い行いによって救われる。 また7つの秘跡 [*] という儀式（洗礼、堅信、聖体、ゆるし、病者の塗油、叙階、婚姻）を受けることによって救われる。 ※詳細は次ページを参照	人は善い行いや儀式によって救われるのではなく、ただイエス・キリストへの 信仰によってのみ 救われる。
教会と信者の関係	教会には司祭や司教などの聖職者からなる「教える教会」と、一般の信徒からなる「教えられる教会」がある。「教える教会」だけが神と人との間を執り成す祭司の役割を果たすことができる。 この教会を通してでなければ、人（信徒）は神に近づけず、救われることができない。	神の御子イエスを自分の唯一の救い主と信じる者は、皆、神の前に平等であり、祭司として執り成しの働きをすることができる。 (万人祭司)

3. 宗教改革カードゲーム（次ページ参照）

以下は、教師の理解のための説明です。

※ローマ・カトリック教会の秘蹟とは

秘蹟とは、「イエス・キリストが制定された神の恵みを実際にもたらす感覚的なしるしであり、ローマ・カトリック教会だけにこれらの秘蹟を行う権能が与えられている」と主張する。

ローマ・カトリック教会の7つの秘蹟とは

洗礼……………この秘蹟によって洗礼を受けるまでの罪が取り除かれる（神の約束に対する信仰だけでは不十分だと教える）。

堅信……………洗礼を受けた者をキリスト教徒として強め、力を与える秘蹟。

聖体……………パンとブドウ酒がキリストの体と血に実体的に変わり、神にささげられる。信者は聖体にあずかることで、永遠の命の糧が得られると考える。

ゆるし……………洗礼以後に犯した罪を教会の司祭をとおしてゆるす秘蹟。

病者の塗油……………病気などで命が危なくなった信者に油を塗り、助け強める秘蹟。

叙階……………司祭職につく権能を授け、これをふさわしく行なう恩恵を与える秘蹟。

婚姻……………信者である男女が婚姻の合意を表明し、夫婦のつとめをよく果たせるように、神の助けを与える秘蹟。

《宗教改革カードゲーム》

下記の画像を画用紙に13枚コピーしてから切る（13×4=52枚のカード）

カラーの画像は次のアドレスからダウンロードしてください。 http://ogaki-ch.com/ss_text/51

【遊び方】

- ①カードを裏返して丸い輪のように並べ、中央に1枚、表にした場札のカードを出す。
- ②順番を決めて丸い輪から順にカードをひき、場札と違うマークのカードをひいたら表にした場札に重ねて置き（表を上にして）、そのカードを新しい場札とする。
- ③場札と同じマークのカードを引いてしまったら、中央の場にあるカードを全部引き取らなくてはならない。引き取ったカードは自分の手札とする。これは、自分の順番のときに場のカードをめくる代わりに出すことができる。
- ④場札のカードがなくなったらゲーム終了。手札が一番少ない人の勝ち。

 <p>せいしよ 聖書のみ</p>	 <p>しんこう 信仰のみ</p>
 <p>ばんにんさいし 万人祭司 (神の前に平等)</p>	 <p>マルティン・ルター</p>

テキスト 使徒言行録 2章36～42節
 子どもカテキズム 問72, 73
 参照教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問94, 95

問72 洗礼とは何ですか。

答 父・子・聖霊なる神さまの御名によって、
 教会の信仰を自分の信仰として告白した人に、水を用いて、
 イエスさまと共に十字架に死に、イエスさまと共に復活して、
 新しい人として生きようとする礼典です。
 こうして、私たちは教会員とされます。
 マタイ28:19、ローマ6:4、ガラテヤ3:27

問73 赤ちゃんにも洗礼を施すのですか。

答 はい。
 キリスト者の子どもは、恵みの契約によって、
 教会の中に入れてありますから、洗礼を施します。
 そのほかには、信仰を告白して、教会に許された人でなければ、
 洗礼を施してはなりません。

〈子どもカテキズムの解説〉

キリストが、贖いに伴う益を私たちに与えられる外的な通常の手段の1つが、聖礼典でした。新約における2つの聖礼典のうち、1つが洗礼です。

「契約のしるし」としての洗礼

洗礼を理解する上で欠かすことができないのは、「契約」の理解です。主は、諸国の民の中からアブラハムを選び、彼とその子孫をご自身の民とする「契約」を与えられました。旧約時代において、「契約のしるし」は、「割礼」でした。主の民の家庭で生まれる男子には、生まれてから八日目に、「契約のしるし」として割礼を施すことを求められました。血のつながりのある者ばかりでなく、「家で生まれた奴隷も、外国人から買い取った奴隷でああなたの子孫でない者も皆」割礼を受けることを求められていますから、血縁的・民族的な関係でなく、割礼というしるしによってあらわされた「契約」の関係こそが重要であることがわかります（創世記17:1～14）。

キリストが来られたことによって、更にまさった「新しい契約」へと契約が更新され、キリスト

がその契約の仲介者となりました（ヘブライ8:6～13）。ご自身の血によって新しい契約を立ててくださったからです（コリントー11:25など）。

ペンテコステに際して、エルサレムに集まっていた人の中から多くの人が「洗礼」を受け、キリストを信じる共同体（教会）に加わりました（使徒2:41）。その多くはすでに割礼を受けていた人たちであったと思われます。新約時代より、割礼のある無しに関わらず、キリストによる「新しい契約」の民である教会の一員に加えられることのしるしとして、「割礼」に代えて「洗礼」が用いられるようになります。

また、「洗礼」は、「契約のしるし」ですから、「割礼」と同様に、契約の民であるキリスト者の家庭に生まれた子どもたちにも授けられます。契約の民の家庭に生まれるならば、当然、契約に入れているのであり、両親が契約に忠実であろうとするならば、そのしるしを明らかにすべきだからです。

キリストに結ばれたしるし

キリストは、すべての民をご自身の弟子にする

ために、「父と子と聖霊の名によって洗礼を授け」ることを命じられました（マタイ28:19 主動詞は「弟子にする」）。ですから、洗礼は、キリストの弟子として、キリストを信じ、キリストに従い、キリストに結ばれることと切り離すことができません。

「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けた」ならば、「イエスさまと共に十字架に死に、イエスさまと共に復活して」、「罪に支配された体が滅ぼされ、罪の奴隷にならない」「新しい命に生きる」こととなります（ローマ6:3～6）。洗礼によってキリストに結ばれるがゆえに、キリストの体である教会の一員とされます（コリント一12:27）。

旧約の儀式律法において、水が、祭司を清めるために用いられました（出エジプト29:4など）。祭司たちは、聖なる民であるイスラエルの内で、それ以上に聖であることを求められていました（レビ21など）。そのことを考えると、キリストが「水の洗いによって、教会を清めて聖なるもの」としようと意図されたのは、祭司のような特別な清さであることを思わされます（エフェソ5:26）。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

【KEY1 聖書本文を語る】

[STEP1] 聖書本文を読む。

使徒言行録2:36～42を繰り返し読みます。

[STEP2] この個所のテーマは何か？

キリストへの信仰を起こされた者たちが、洗礼を受け、教会に加わる。

[STEP3] それをどのように展開しているか？

聖霊を受けて語ったペトロの説教によって、キリストへの信仰を起こされた人たちが、悔い改め、キリストの名による洗礼を受けて、キリストの教会に加わった。

【KEY2 神の福音を語る】

[STEP1] この個所で神はご自身について何をあらわされたか？

神は、使徒ペトロによるキリストを証しする説教をとおして、人々を回心させた。神は、悔

い改め、キリストの名によって洗礼を受ける者たちの罪を赦し、聖霊を与えられる。神は、御言葉を受け入れ、洗礼を受けた者たちをご自身の民の共同体（教会）に加えられる。

[STEP2] 前後の章は、神について何と言っているか？

神は、ペンテコステに、キリストが約束された聖霊を弟子たちに注がれ、様々な国の言葉で語らせた。ペトロに、この出来事が預言の成就であることと、殺されたイエスこそメシアであることを説教させられた。多くの回心者を与えられ、最初の教会を形成させられた。

[STEP3] 聖書全体を通しての神の働きに、この個所はどのように関係しているか？

神は、約束のキリストを仲介者として新しい契約を与えられる。洗礼によって清められ、キリストに結ばれた者たちが、新しい契約の共同体として教会を形成する。

【KEY3 子ども達の信仰と生活のために語る】

[STEP1] この個所に登場する当時の人々の必要は何だったか？

エルサレムで殺されたイエスが、どなたであるかを知り、悔い改めて、主の民として回復される必要。

[STEP2] 私たちの教会の子どもたちに似たような必要があるか？

幼児洗礼を受けている子たちは、すでに契約に入れられたしるしを与えられている。契約の根拠を知り、主の民として新しくされる必要。

[STEP3] この聖書箇所「その時」から、私たちの教会の「今」へ橋をかける。

イスラエルが殺したイエスこそメシアであることが知らされた。キリストが死ななければならなかったのは、わたしの罪のためであることを受け入れ、悔い改めて、洗礼を受け（信仰告白し）、罪赦されて、聖霊を受け、新しくされて、キリストの教会の一員（陪餐会員）に加わろう。（テモテ指導者訓練「聖書の説教」モジュールを参考に項目を立てました。）（大西良嗣）

テキスト 使徒言行録 2章36～42節
子どもカテキズム 問72, 73

〔単元のねらい〕

聖書テキストには、殺されたイエスこそキリストであることを知った人々が悔い改め、洗礼を受けて、罪を赦され、教会の一員に加わることが語られている。ここには、「契約」についての言及はないが、洗礼の教理において重要な要素であるので、「契約」という言葉は使わなくても、その内容に触れておきたい。

洗礼＝イエスさまに結ばれた

【洗礼の教理】

今日は、「洗礼」についてお話をします。

少し前に、〇〇くんの幼児洗礼式がありましたね。おぼえているかな？ 礼拝のときに、牧師先生が、〇〇くんの頭に、「父と子と聖霊の名によって洗礼を授ける」と言って、水を垂らしました。みんなの中には、〇〇くんと同じように、幼児洗礼を受けているお友だちと、受けていないお友だちがいますね。

洗礼は、「神様の民」であることのしるしです。お父さんやお母さんが、イエス様を信じている場合には、その家に生まれる子どもも、「神様の民」、神様の子どもなので、赤ちゃんの時に、洗礼を授けます。そして、大きくなって、イエス様を信じていることを、自分でしっかりとと言えるようになったら、「信仰告白式」をします。

お父さんやお母さんが、イエス様を信じていないお友だちは、もう少し大きくなって、自分でしっかりと、「イエス様を信じます」と言えるようになったら、ぜひ「洗礼」を受けてください。この場合は「成人洗礼」と言いますが、イエス様を「神様の御子」、「罪人の救い主」だと信じて、しっかりとと言えるようになったら、誰でも「洗礼」を受けることができます。洗礼を受けたいと思うようになったら、牧師先生に相談してくださいね。

洗礼というのは、とても大切なことです。

なぜなら、イエス様を信じて、イエス様にしっかりとつながることだからです。

さっき読んだ『子どもカテキズム』には、「イエス様と共に十字架に死に、イエス様と共に復活」することだと書いてありました。洗礼を受けるということは、イエス様と一緒に死んで、イエス様と一緒にもう一度生きるということです。洗礼を受けるということは、それくらい、しっかりと、イエス様に結び合わされて、イエス様の体の一部になって、生きていくことの「しるし」なんだね。

【ペンテコステの出来事より】

先ほど聖書を読みました。いつの出来事について書かれていたのか、分かりましたか？

ペンテコステの日に起こった出来事です。

ペンテコステの日には、集まって祈っていたお弟子さんたちに聖霊が与えられて、いろいろな国の言葉で話し始めたんだね。それを聞いて、エルサレムに集まってきていた人たちは、とても驚きました。中には、「お酒を飲んでるんじゃないか？」と疑う人もいましたが、ペトロさんが、他のお弟子さんと一緒に立ち上がって、「そうではありません！」と、大声で、お話を始めました。

「今、起こっていることは、旧約聖書の預言書に書かれていたことです。みなさん、少し前に、あなたたちが十字架にかけて殺してしまったイエス様を知っていますね。あの方こそ、神様が与えてくださった約束のメシア、救い主だったので」。

これを聞いて、多くの人たちが、心を打たれて、

「ああ、自分たちは、何とということをしてしまったんだ。たいへんなことをしてしまった！」と気づきました。そして、ペトロさんたちに尋ねました。「わたしたちはどうしたらよいのですか？」

ペトロさんは、自分の過ちに気づいた人たちに、どうすればよいのかを教えてあげました。今日の暗唱聖句の言葉です。

「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい」。

「神様、ごめんなさい。赦してください」と言って、神様に立ち帰りなさいということです。そして、イエス様こそ、メシア、救い主とみんなの前で言って、洗礼を授けてもらいなさいということです。洗礼は、完全に罪を清めていただき、罪を赦していただいたことのあるしです。イエス様は、イエス様を信じる誰にでも、この約束を与えてくださっています。子どもにも、与えてくださっています。

なぜなら、イエス様は、そのために十字架にかかって、血を流し、死んでくださったからです。それほどまでに、私たちを愛してくださったからです。

ペトロさんの話を聞いた人たちの中から、たくさんの方が、その言葉を信じて（つまり、イエス様をメシアと信じて）、洗礼を受けました。何と、その日に3000人が洗礼を受けたのです。

そして、洗礼を受けた人たちが、イエス様を信じる教会の仲間になりました。洗礼を受けるということは、教会のメンバー（会員）になるということでもあります。なぜなら、教会は、イエス様の体だからです。洗礼を受けて、イエス様にしっかりと結ばれたならば、イエス様の体である教会の一員になります。私たちは、イエス様の体として一つにされて、お互いに愛し合い、一緒にイエス様のお働きをします。それが、洗礼を受けて、イエス様に結ばれた者たちの生き方です。

(大西良嗣)

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 2編38節

すると、ペトロは彼らに言った。

「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、

罪を赦していただきなさい。

そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」



〈ねらい〉

洗礼の意味とその恵みについて考える。

〈展開例〉**1. 洗礼式ではどんなことをするの？**

洗礼式を見たことがありますか（洗礼式の写真などがあれば見せる）。洗礼式の中で、信仰を言いあらわし、主に従っていくことを神様に誓約します。誓約は6つありますが、そのうちの4つについて見てみましょう。

- あなたは、天地の造り主、唯一の生けるまことの神のみを信じますか。
- あなたは、自分が神のみ前に罪人であり、神の怒りに価し、神のあわれみによらなければ、望みのないことを認めますか。
- あなたは、主イエス・キリストを、神のみ子、また罪人の救い主と信じ、救いのために、福音において提供されているキリストのみを受け入れ、彼にのみ寄り頼みますか。
- あなたは今、聖霊の恵みに謙虚に信頼し、キリストのしもべとしてふさわしく生きることを、決心し約束しますか。

誓約した後、父と子と聖霊の名によって、洗礼が授けられます。（水が頭に注がれる）

お父さんやお母さんがイエス様を信じている場合は、その子どもに幼児洗礼が授けられます。自分の口で信仰を言いあらわすことができるようになったら信仰告白をします。

2. 洗礼の意味**(1) 洗礼は古い自分のお葬式です**

罪に支配されていた古い自分は、洗礼によってイエス様と共に十字架につけられ、死んで葬られます。「わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました」（ローマ6:4）。

(2) 洗礼は新しい自分の誕生日です

洗礼によって私たちはイエス様と共によみがえり、新しい命に生きるものとされます。「それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです」（ローマ6:4）。

(3) 洗礼はイエス様との結婚式です

洗礼式において、わたしは永遠にあなたと共であって、あなたを祝福するという神の約束を信じ、「私もあなたを愛し、あなたに従います」と約束をして、神と共に歩む生活を始めます。「洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです」（ガラテヤ3:27）。

洗礼によって私たちはキリストに結び合わされ、キリストの体である教会、神の家族の一員となります。

3. なぜ、洗礼を受けるの？

信じていれば救われるのだから、洗礼を受けなくてもいいのでは？と思うかもしれませんが。

洗礼は結婚式のようなものです。式をあげなくても結婚はできますが、結婚の誓いを神様と人の前で行うことによって、大きな祝福と喜びをいただくことができます。

洗礼を受けたら救われるのではありません。イエス様によって救われたから、洗礼を受けたいと願うようになるのです。

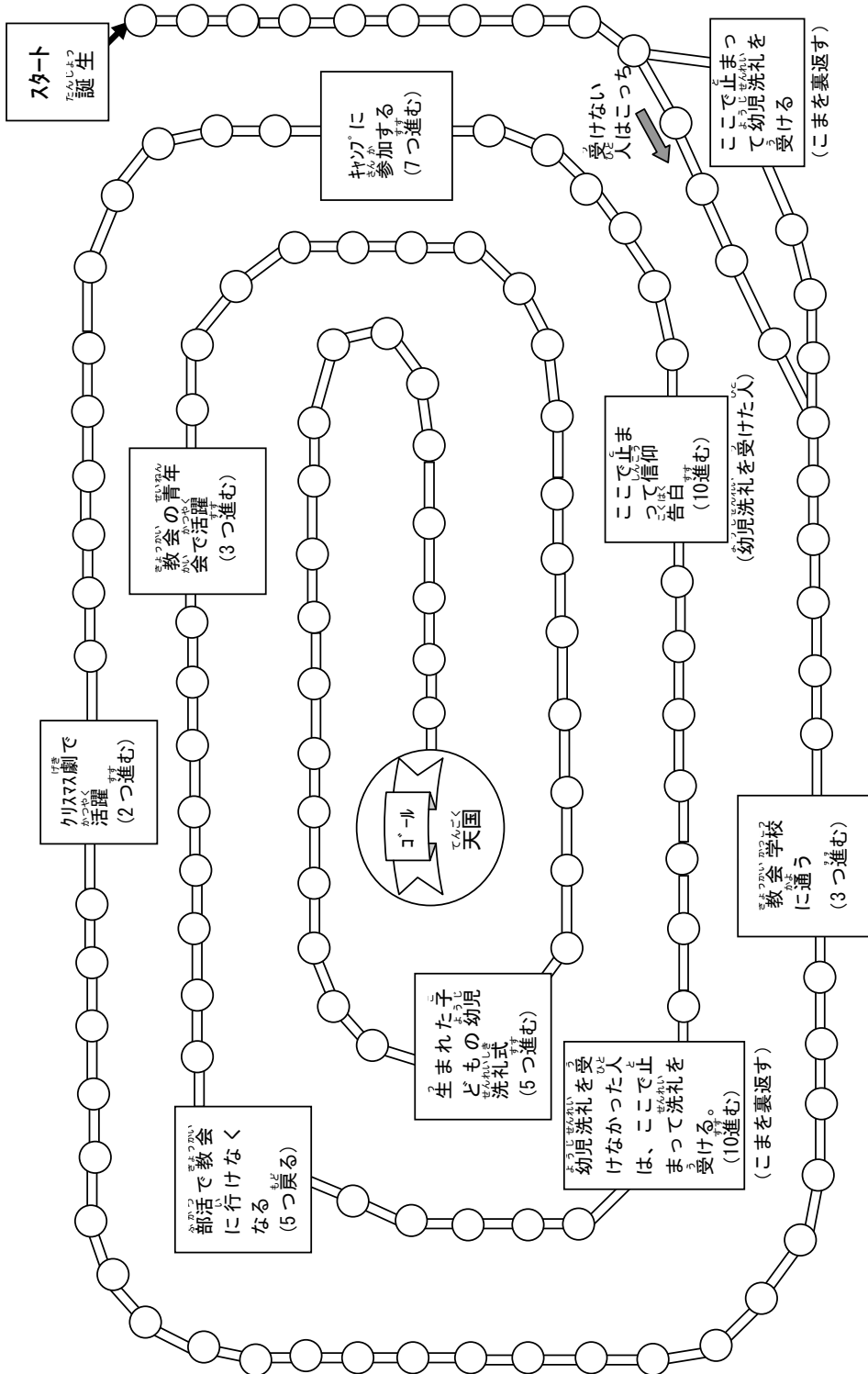
心の中で信じたことを口で告白し、洗礼を受けるといって信仰をあらわすことを神様は喜ばれ、祝福してくださるのです。イエス様も「彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け……なさい」とお命じになりました。（マタイ28:19、20）

4. すころく（信仰の旅路） 次ページ参照

（色をぬったり、各マスの言葉を変えてもよい）

すごろく〈信仰の旅路〉

ダンボール紙でこまを作る（表に黒色、裏に白色の紙を貼る。黒色の方を上にしてスタート）



テキスト	マタイによる福音書 26章26～30節
子どもカテキズム	問74,75
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問96,97 ハイデルベルク信仰問答 問75～82

問74 聖餐とは何ですか。

答 イエスさまの言われた通りに、
パンとぶどうジュースを用いて、
十字架で裂かれたキリストのお体と
流された血を覚え、
信じる者と共におられるキリストを覚え、
再び来られるキリストを覚えるための
礼典です。
これによって、
イエスさまとの交わりが深められます。

問75 赤ちゃんは聖餐にあずかれますか。

答 いいえ、
自分で信仰を告白するまではあずかれません。
洗礼を施されていない人や、
教会が受けてはいけなと決めた人も
あずかれません。
私たちは、一日も早く、
救いの喜び、
聖餐の祝いにあずかることができるよう、
聖霊のお働きを求めるのです。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

「一同が食事をしているとき」(26節)とは、イエスさまが弟子たちと、ユダヤ教の三大祭りの一つ過越祭で、神さまのご命令のとおり主の過越記念の食事をしているときのことで(申命記16:1～8)。過越の食事に先立ち、神殿で小羊が屠られました。この屠られて血を流された小羊は、その血を家の門柱とかもいに塗り、それをご覧になった主がその家だけを過ぎ越され、この事件をきっかけに先祖たちがエジプトの奴隷状態から救い出されたことの記念でした。一同は、その主による救いの出来事を思い起こしながら食事していたのです。

そのような過越の小羊をメインディッシュとす

る過越の食事の席上、イエスさまは、弟子たちに向かつて過越の食事に代わる新しい食事を命じられました。それが今日の聖餐です。過越の食事では、屠られた小羊を食べるべきでしたが、もはや、新しい食事ではその必要はありません。なぜならば、過越の小羊は、十字架の上で屠られ血を流されることで、ご自分の民を罪と悪魔の奴隷状態から救い出されるイエスさまご自身の象徴だったからです。ですから、過越の食事のメインディッシュもイエスさまご自身でした。

イエスさまは、過越の食事の際に小羊と共に食べるべきであった酵母を入れないパンを取られ、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われました。「取って食べなさい。これは

わたしの体である」(26節)。また、ぶどう酒の杯を取って、感謝の祈りを唱えて、弟子たちに渡して言われました。「皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」(27,28節)。

イエスさまは、ご自分を象徴する裂かれたパン、渡される杯に弟子たちがあずかることで、十字架の死と復活によって罪の赦しをはじめとする、すばらしい恵みを獲得したご自身にあずかることができるようにしてくださったのです。

〈子どもカテキズムの解説〉

聖餐のメインディッシュはイエスさまです。信じる者が聖餐でパンを食べ、杯から飲むとき、イエスさまをいただくことができます。「子どもカテキズム」の問74の表現ですと、イエスさまとの深い交わりを与えられるということです。そのようにしてイエスさまが十字架の死と復活によって獲得してくださった罪の赦しをはじめとする、すばらしい恵みにあずかることができるのです。

問74では、イエスさまがメインディッシュである聖餐の席上、覚えるべきことが三つあげられています。

かつての過越の食事では、主による出エジプトの出来事を覚えるべきでした。第一に、聖餐では、何よりも、主イエスさまによる、特にイエスさまの十字架の死による、罪と悪魔の奴隷状態からの救いの出来事を覚えるべきです。司式者により、パンが裂かれ、杯が高々と挙げられる行為をしっかりと見て、十字架にかけられたイエスさまのお姿を信仰の目をもって見ましょう。

ところで、十字架で死んでくださった主イエスさまは、復活され、天に昇られ、今は、聖霊によって共におられます。ですから、第二に、聖餐では、司式者や配餐奉仕者をご自分の口とし、手とし、足として用いられるのは、イエスさまご自身です。イエスさまが、ご自分をメインディッシュとして、私たちをもてなしてくださるのです。何と感謝なことでしょうか。恐らく、多くの教会では、長老方が配餐奉仕をなさるかと思いますが、パンや杯

を載せた皿を差し出す手に、イエスさまのもてなしの御手を信仰の目をもって見ましょう。

今、聖餐の席上、主イエスさまは聖霊によって共におられます。そのイエスさまは、やがて、目に見えるお姿で、天のみ国から再び来られます。イエスさまは言われました。「言っておくが、わたしの父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい」(マタイ26:29)。やがて、イエスさまが来られると、御国が完成しますが、その時、イエスさまが私たちと一緒に完全勝利の祝杯をあげてくださいます。したがって、第三に、聖餐は、御国の完成によって罪と悪魔に完全勝利できることを覚えて、その時を心から待ち望む食事です。聖餐の席上、イエスさまゆえの輝かしい栄光の将来を覚えることができるからこそ、今、逆境にあっても耐えることができるのです。聖餐は、私たちの魂を強くする、元気の源です。

続く問75では、イエスさまを神さまの御子にして罪からの救い主キリストと信じる信仰を告白している人しか聖餐にあずかれないことを教えています。さらに洗礼を施されていない人や教会を惑わし、教会をつまずかせるような罪を犯して、教会から、聖餐にあずかってはいけないと宣言された人のことも教えられています。

聖餐のメインディッシュであるイエスさまをおいしくいただくには、イエスさまへのまことの信仰が何よりも必要です。上述のような方々を退けるのではなく、聖餐と一緒にあずかりたいとの愛をもってイエスさまへのまことの信仰が与えられるように聖霊のお働きを祈り求めましょう。

〈子どもたちに対して〉

日曜学校だけにしか参加していない子どもたちの多くは聖餐を知らないでしょう。ですから、視覚に訴える必要があるかもしれません。あるいは、聖餐が執り行われる礼拝式に出席してもらうことも一つの手でしょう。しかし、後者の場合、信仰を告白していない多くの子どもたちにとって、聖餐は、いわば、おあずけです。子どもたちが疎外感をおぼえないように、事前の十二分な配慮が必要でしょう。(長谷川潤)

テキスト マタイによる福音書 26章26～30節
子どもカテキズム 問74, 75

〔単元のねらい〕

イエスさまへの信仰を告白していない子どもは、聖餐にあずかることができません。そういう子どもたちが、一日も早く、私たち教師と一緒に聖餐を喜んでいただけるように、「子どもカテキズム」に教えられていることを基本としながら聖餐のすばらしさを伝え、イエスさまを信じる信仰に招くことができると願っています。そのためにも、まず、私たち教師が聖餐のすばらしさを味わいましょう。なお、下記の説教展開例は、中学生向けです。

魂の最上のディナー (dinner)

こどもの教会（日曜学校）の中学生の皆さん、おはようございます。

今年も、来月はクリスマスのシーズンですね。みんな、クリスマスに、ホテルのレストランなどで、家族の人とクリスマス・ディナーを食べたことありますか。悲しいことや辛いことがあっても、おいしい食事をいただくと、ついそのことを忘れて、思わずニコリ笑顔になることがありますね。先生は、あるシェフ（料理人）を知っています。その人は、本当においしいものを作りたいために料理人の道に入ったのだそうです。そして、生涯、ただおいしいものだけを作りたいそうです。だからでしょう、そのシェフが総料理長を務めるお店はとても人気があって、お店で食事する人は誰でも、みんな幸せな気分になって笑顔で帰っていくそうです。

おいしいものをいただくと、満足して笑顔になるし、うれしくなるし、何だか元気が出てきますね。辛く、悲しいときはなおさらです。神さまは、みんなの体ばかりでなく、魂にも役立つ、とてもすばらしいディナーを用意してくださっていることを今日はお話ししましょう。特にイエスさまがそのとてもすばらしいディナーを用意してくださっているのです。それが「聖餐」（「主の晩餐」というディナーです。

さて、みんなが住んでいる日本から遠いユダヤ

では、毎年3月から4月にかけて、過越の祭りという大きなお祭りが行われていました。その過越の祭りでは、過越のディナーをいただきます。過越の祭りは、自分たちの先祖が主なる神さまによってエジプトの奴隷状態から救い出された出来事を記念して行われるのですが、先祖たちが救い出される際、屠られた小羊の血が家の門柱とかもいに塗られました。そして、その家だけを主が過ぎ越され、先祖の初子が助かったのです。それで、毎年、その主による過ぎ越しを記念して、屠られた小羊を食べることが神さまによって命じられていたのです。ですから、小羊の肉が過越のディナーのメインディッシュでした。

イエスさまは、そんな過越のディナーを弟子たちとなさる中で、「聖餐」という新しいディナーを用意してくださったのです。イエスさまは、酵母を入れないパンを取って、神さまを賛美するお祈りをおささげして、パンを裂き弟子たちに与えながら言われました。「取って食べなさい。これはわたしの体である」（26節）。また、杯を取って、神さまへ感謝するお祈りをおささげして、弟子たちに渡して言われました。「皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」（27, 28節）。

イエスさまは、裂かれたパンがご自分の体です、

渡された杯の中身、ぶどう酒がご自分の血です、と言われました。イエスさまは、パンと杯がイエスさまご自身のことを表していると言われたのです。特に十字架の上で体を裂かれ、血を流されて殺されるご自分のことをあらわしていると言われたのです。実は、過越のディナーのメインディッシュは小羊ですが、この小羊は、十字架の上で体を裂かれ、血を流されて殺されたイエスさまのことを表していたのです。そうすると、過越のディナーのメインディッシュは、イエスさまだったこととなります。小羊はイエスさまを指し示していたのです。

イエスさまは、私たちがパンと杯をいただくことで、イエスさまご自身をいただくことのできる「聖餐」という新しいディナーを用意してくださいました。それで、もはや、小羊の肉を食べる必要はないのです。イエスさまは、罪の赦しをはじめとする、すばらしい恵みがいっぱい詰まっているご自分をメインディッシュとして用意してくださいました。罪の赦しをはじめとする、すばらしい恵みであるイエスさまは、私たちの魂を元気にしてくださいます。罪を犯すことで痛みをおぼえている魂に罪の赦しの確信を与えます。死の力に脅かされている魂に慰め、励ましを与えてくださいます。神さまに見捨てられるのではないかと不安になっている魂を平安にしてくださいます。困難の中で行き詰まってしまっている魂に進むべき道を示してくださいます。逆境に耐えることができるようにしてくださいます。イエスさまは、とてもすばらしいディナーを私たちの魂のために用意してくださいました。

イエスさまは、今からおよそ2000年前、「聖餐」というすばらしいディナーを用意してくださいましたが、実は、イエスさまは、昔用意してくださいただけでなく、今も、この「聖餐」が教会の

礼拝式で行われる時、ご自分という最上のメインディッシュによって私たちをもてなしてくださるのです。ところで、今、イエスさまは、どこにおられるのでしょうか？ イエスさまは、十字架の死から復活なさると、天のみ国に昇って行かれました。そして、そのみ国から、聖霊がこの地上に降っておいでになりました。今、イエスさまは、私たちの目には見えませんが、聖霊によって私たちと共におられるのです。特に教会の礼拝式、そして、「聖餐」が何よりもイエスさまが共におられることをおぼえることのできる最高の機会です。今、私たちは、パンと杯をいただくことで、イエスさまというメインディッシュをいただきます。パンと杯を配ってくださるのは、この教会では、長老さんたちですが、実は、今、イエスさまは、長老さんたちをご自分の手や足として用いておられるのです。ですから、パンと杯でもてなしてくださるのはイエスさまご自身なのです。イエスさまご自身が、今も、もてなしてくださるなんて、何てすばらしいディナーなのでしょう！

ところで、このすばらしいディナーをいただくことができるのは、イエスさまを神さまの御子にして罪からの救い主キリストと信じて告白し、洗礼を受けている人です。イエスさまを信じていなくて、このディナーをいただくと、何の味もしないのです。あるいは、魂が消化不良を起こしてしまうでしょう。やっぱり、おいしくいただくためには、聖書に証言されているイエスさまを信じていることが必要です。イエスさまが用意して、今も、もてなしてくださる「聖餐」という魂にとって最上のディナーを味わうためにも、みんなが、イエスさまへの信仰を告白し、洗礼を受けることができますように。何よりも、聖霊のお働きが豊かでありますように。(長谷川潤)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 26章26～28節

「取って食べなさい。これはわたしの体である。」「皆、この杯から飲みなさい。
これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。」

〈ねらい〉

聖餐の意味と恵みについて考える。

〈展開例〉**1. なぜ主は聖餐式をお定めになったのか**

礼拝の中で小さなパンを食べ、小さなカップでぶどう酒を飲むのを見たことがありますか。教会では、定期的に聖餐式が行われます。それは、イエス様が聖餐式を守り行うように定められたからです。

では、イエス様はどうして聖餐をお定めになったのでしょうか。コリントー11:25にその理由が書かれています。「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」

神様は、忘れやすく、弱りやすい私たちの信仰を強め、確かなものとするために聖餐を定めてくださいました。聖餐の目的はイエス様を記念する（覚える）ことです。それでは聖餐式で私たちは何を覚えるのでしょうか。

2. 聖餐の恵み

十字架にかけられる前の晩、イエス様はパンを取って「これはわたしの体である」、また杯を取って「これはわたしの血である」とおっしゃいました。聖餐式のパンとぶどう酒は、私の罪のために十字架で裂かれたイエス様の体、十字架で流されたイエス様の血をあらわします。

イエス様が私のためにご自分の体を裂き、血を流してくださったこと、罪のゆるしと復活の命をいただいていることを覚えます。思い起こすだけでなく、今、イエス様がここに共にいてその命を分け与えてくださっていることを味わうのです。

一つのパンが裂かれて一人一人に配られます。聖餐にあずかる一人一人がキリストの体の一部で

あり、私たちは一つの体であることを覚えます。

3. 聖餐への招き

まだ洗礼を受けていない人や、幼児洗礼を受けてまだ信仰告白をしていない人は、聖餐にあずかることができません。

「ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります」（コリントー11:27）とあります。「ふさわしくないままで」というのは、信仰を持っていない人や悔い改めない人、聖餐の意味を十分に理解できない人という意味です。イエス様だけが私の救い主ですと信仰を告白した者が聖餐の意味を正しく理解し、聖餐の恵みを正しく受け取ることができるのです。

イエス様は、ご自分の体を裂き、血を流して「取って食べなさい」「この杯から飲みなさい」と契約の中へと私たちを招いておられます。共に聖餐の恵みにあずかることができる日を待ち望みましょう。

4. 樹脂粘土の工作

樹脂粘土でパンと聖餐カップを作ろう。

〈材料〉

樹脂粘土(白色)、絵の具またはアクリル絵の具、カップの型（キャップが台形になっている液状糊など）、ハサミ

〈作り方〉

- ・粘土に茶色の絵の具を混ぜる（パン用）。カップ用の粘土は好きな色で。
- ・液状糊のキャップの方から3cmほどを粘土で包み込む。糊ははずしてカップの淵をハサミで整える。
- ・茶色の粘土でパンを作る。
- ・1週間ほどそのまま乾燥させてください。

11月17日 祈りとは何か (一) 教理説教のための聖書黙想

テキスト ヨハネによる福音書 14章1～14節
子どもカテキズム 問76

問74 お祈りとは何ですか。

答 神さまにお話しすることです。そのためには、まず神さまからの御言葉に聴くことが必要です。信じることは祈ることです。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

問76を扱った既刊もぜひ、ご参照ください。そこでは、祈りが神からの語りかけを聴くことから始まること、むしろ、神の御言葉を聴くことそのものが既に祈りの行為であることが強調されています。

今回は、そのような神からの語りかけを聴き祈ることができるための大前提について焦点を絞って思いをめぐらしてみたいと思います。選ばれたテキストは、確かに、祈りについての真理が明瞭に語られています。しかし、祈りそのものを扱うためのテキストとして用いられることは少ないかもしれません（もとより教理説教においては、テキストの全部を説き明かす必要はありません。また、子どものための説教も基本は同じです）。ここでは6節、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」と祈りの関係について黙想したいと思います。

主イエスは、天の父なる神のみもとから、この地上に人となって来られた御子でいらっしゃいます。公生涯の最後に、十字架の上に挙げられて葬られ、その3日目に復活されました。さらに40日後、天へと挙げられました。この主イエスのいわば上下の運動によって、天と地とは決定的に結びあわされました。まさに、天と地とに大きな道が開通したわけです。つまり、今や、このイエスという道をとおして、わたしたちは誰でも、父なる神との交わりが可能とされたのです。逆に言えば、主イエス以外の道はないということです。

つまり、天の父なる神に祈ることができるということは、この主イエスの救いの御業のおかげです。確かに旧約においても、祈りは神の民の特権

でした。詩編を読めば、彼らがどれほど率直に、信頼を込めて神に呼ばわっているかは、明らかです。しかし、新約において、主イエスにおいて、祈りの世界は決定的に新しくされ、深くされ、広げられたのです。まさに誰でも、主イエスの御名によって願えば、主イエスのおかげで、父なる神はそれをかなえてくださることになったからです。もはや、「祈りが足りないから、信仰者であるわたしはダメなのだ」とか、「祈りが拙いから、わたしの祈りはかなえられないのだ」というような考えは、吹き飛ばされてしまいます。「わたしの名によって願うことは、何でもかなえ」られるというほどの圧倒的な恵みの道が切り拓かれたのです。

罪人である私たちは、ただ主イエスのおかげで、祈れるのです。どれほど拙い祈りであっても聴かれるのです。主イエスのおかげで、聖霊なる神は私どもに豊かに注がれ、祈ることへと力強く促し、導いてくださるからです。こうして、私たちは祈りによって、いよいよ主イエスと結ばれ、父なる神との深い交わりを楽しむことができます。同時に、祈りの世界が開かれれば開かれるほど、いよいよ、聖書を通して主イエスとその御心を知りたくなります。そして、さらに祈りへと導かれていきます。御言葉と祈りは、互いに関連し、すばらしい対応関係にあります。

〈子どもカテキズムの解説〉

祈りは、御言葉・礼典に加え、恵みを注いでいただくための三つの手段、通路の一つです。御言葉と礼典とは、基本的には主の日の礼拝式、教会の交わりの中でなされます。しかし、祈りは個人的にも、つまり、いつでもどこでも用いることが

できます。そこに、祈りの「重要性」と「親近性」をみることができると思います。

もとより、今日、私たちは、聖書を個人的に読むことができますから、祈りだけが個人的に用いることができる恵みの手段とは言えないという議論もあり得ます。しかし、ここでは聖書を個人的に読んでお祈りすること、いわゆる「ディポーション」のことを考えています。祈る「ためには、まず神さまからの御言葉に聴くことが必要です」とあるとおり、祈ることと御言葉を聴くこととは切り離すことができないものなのです。

ちなみに、改革された教会に生きるキリスト者の霊性を深め、建てあげることに力があつたのは、この聖書を読んで祈るという聖書日課の復興にありました。現代のローマ教会は、あらためてそこに聖書的な伝統を認め、全教會的に力を注いで取り組み、豊かな実りを結びつつあるようです。キリスト者の霊性における聖書を読むことと聖書に導かれてなされる祈りの重要性が再発見されているわけです。そうであれば、いよいよ私どもの教会こそ、「リジョイス」や「いのちのパン」などを用いて、それぞれの仕方でディポーションを守る習慣を互いに励まし合っていきたいものです。

祈りは、いつでもどこでもできるゆえに、親近性があります。しかしそれだけに注意が必要です。多くの人たちが、「人間は誰でも祈ることを知っている……、祈れる……」と考えているからです。確かに、他の宗教にも祈りがあります。宗教を信じていない、普段は気にしていない人でも、自分の限界を知らされ、助けてもらいたいときには「神さま、仏さま」と祈り始めたりします。しかし私たちは、祈りは神が与えてくださる恵みの手段であることを一瞬でも忘れないようにしたいと思います。つまり、新約において明らかにされた祈りの世界は、祈りにおける人間の可能性の排除です。私たちが神に祈ることができるということは、神の主導権にのみ基づくということです。つまり、祈れることは、恵みであるということです。祈れることは救いであるということです。

祈りにおける神の主導権を明瞭に教えてくれたのは、使徒パウロです。ローマの信徒への手紙8章34節「だれがわたしたちを罪に定めることが

できましよう。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです」。つまり、私たちが祈れるのは、主イエスが私たちのために執り成し祈ってくださるおかげなのです。それゆえに、8章27節にあるように、「人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです」。つまり、主イエスによって聖霊が注がれて、聖霊に導かれ、執り成されているからこそ、祈りを祈ることが許されるのです。

さらに、決定的に大切なこと、それこそは十字架の御業です。主イエスが罪人である私たちの罪を贖ってくださり、罪の赦しを与え、神の子としてくださったのです。こうして、天と地、神と私たちとの交わりが可能となったのです。祈り、それは、人間の可能性ではありません。主イエスの十字架、そして天上の主イエスの御業のおかげなのです。

〈子どもと教師に対して〉

幼ければ幼いほど、祈りに違和感を覚えず、教えられるまま、素直に祈ります。(もしかすると、上述の真理を否定するかのよう考えられるかもしれませぬ。しかし、主イエスは、「彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいる」(マタイ18:10)からなのだ教えておられます。つまり、主イエスと聖霊の執り成しがあるのです)。しかし、高学年の小学生から中高生の子どもたちの中には、人前で祈ることを恥ずかしく思う子どもも増えます。祈りの中でも、「人目」を気にするわけです。

確かに、祈りを教えるためには、教師自身の祈りの世界が豊かに開かれ深められることが求められます。しかし、究極的に求められることは、教師の祈りの生活やことばの貧しさにもかかわらず、ただ主イエスが「道」となり、道を切り拓いてくださったこと、したがって御名を唱えるだけで、どんな祈りも父なる神さまに聴かれていること、神が祈りを待っておられることを信じて、子どもと共に祈る姿を見せることです。(相馬伸郎)

テキスト ヨハネによる福音書 14章1～14節
子どもカテキズム 問76

(単元のねらい)

罪人である私たちが神に祈ることができるのは、ただ主イエス・キリストの十字架と復活の贖いの御業によって罪赦され、あるがままで神の子としていただいたからです。また、天において今この瞬間も、まどろむことなく、神の民のために執り成し祈ってくださる主イエスのおかげです。祈れることは、恵みであり救いです。何を、どのように祈るかを考える前に、祈りを始めるそのたびに「イエスさま感謝します」との思いがわき上がるような祈りの世界、生活へと子どもたちを誘いたいと思います。

天と地をつなぐ道 —イエスさまの祈りと私たちの祈り—

今日は、お祈りについてお話ししたいと思います。皆はお祈りしたことがありますか？「お祈りするのは、当たり前……」と、答えてくれるお友達が多いでしょう。とっても嬉しいです。今日は、日曜日。イエスさまを礼拝する日です。今、教会に集まって礼拝を捧げています。ほんとうに、嬉しくてなりません。

実は、日曜日、皆で集まって礼拝を捧げることこそ、「祈りの中の祈り」なのです。神さまがいちばん喜んでくださるお祈りです。皆さんは、お家でもお祈りしているでしょう。どうして、お祈りするようになったのでしょうか。それは、お父さんやお母さんが教会で礼拝を捧げ、皆もこうして礼拝を捧げられているからだと思います。礼拝によってお祈りを学んで、実際にお祈りするので。だから家に帰っても、どこにいても「天のお父さま」と呼んでお祈りできるのです。そのためにも、子どもの教会の礼拝式は大切です。

先生は、ときどき、礼拝式でこのようにお祈りしています。「天のお父さま、僕たち私たちの名前を呼んで、礼拝にお招きくださって感謝します」。そうです。今朝、僕たち私たちが教会に来たのは、天のお父さまが、一人一人の名前を呼んでくださったからです。呼んでいただかなければ、来れません。本当に、ありがたいなと思います。そして、そのことは、実は、お家で祈るときもまったく同じことなのです。つまり、お祈りで

きるのは、天のお父さまが、僕たち私たちの名前を呼んでくださっているからなのです。名前を呼ぶだけではなく、このようにも呼びかけてくださいます。「わたしの大切な大切な愛する子ども。イエスさまは、あなたのために、いつもお祈りしています。だから、あなたも、お祈りしてね。わたしは、いつもお祈りするのを待っていますよ」。

さて、子どもカテキズムでは、お祈りとは、神さまとお話しすることであって、そのためには、まず、神さまの御言葉、神さまからのお話を聴くことが大切だと、学びました。考えてみるとこれはお祈りだけではなく、人とお話しするときも、まったく同じことです。友だちと仲良くなりたければ、自分のことばかり話してはだめですね。相手に関心をもって、お話をきくことが大切です。神さまは、僕たち私たちに話したいことがたくさんあるのです。神さまが話したいことは、聖書に書いてあります。つまり、神さまは、聖書をとおして、語ってくださるのです。だから、「お祈りってどんなこと」ということも、聖書によって教えてもらえるのです。だから、今日もここで、聖書を皆で読んで、礼拝、つまりお祈りを捧げるのです。

さて、今朝の御言葉の中で、イエスさまは、お弟子さんたちに、こう仰いました。「心を騒がせ

るな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい」。つまり、「心配しないでいいよ。天のお父さまを信じていれば大丈夫。そして、わたしも信じなさい」。さて、それならどうして、心配いらないのでしょうか。それは、イエスさまが、道そのものとなってくださったからです。それなら、どこに通じる道なのでしょう。それは、天国に通じる道、天国につながる道です。

裏の空き地は、本当は、入ってはいけません。でも、昔、近所の子どもたちがスーパーマーケットに行く近道にしていたことがあります。そのとき、地面が踏み固められて草も生えず道ができていました。道をつくるためには、誰かがそこを行ったり来たりして、踏み固める必要があります。

イエスさまは、天のお父さまの御子として天におられました。けれどもクリスマスのとき、人となってこの地上に来てくださいました。天からこの大地に降りてくださったのです。天から地上への道ができました。イエスさまは、十字架についてくださった後、三日目に甦られました。甦られた40日後、天に戻っていかれました。地上から天に向けても道が通じました。

しかも、この道は、イエスさまだけが通ることが出来るイエスさま専用の道ではありません。イエスさまが道となられたということは、僕たち私たち、誰でも天国に行ける道が拓かれたということです。そして、イエスさまが、天と地をつなぐ道となるためにしてくださいましたのが、十字架です。神の独り子のイエスさまが、人間となってくださったのは、僕たち私たちの罪を償うための、犠牲の小羊となるためでした。十字架の上で血を流されたことによって、僕たち私たちの罪は赦されました。あるがままの姿で、神さまの子どもとして受け入れられました。イエスさまを信じる人は、誰でも神さまの子どもにさせていただいたのです。

さて、もう2000年も前に天と地は、イエスさまのおかげで繋がったのです。ただし、それで、すべての人たちが天国に入れるわけではありません

ん。何故なら、道は、ながめるためにあるわけではないからです。地図を見て、道がそこにあることを知っているだけでは、目的地にたどりつけません。つまり、実際にそこを歩いて行かなければ意味がありません。天国への道を通る、その道を使うということは、イエスさまを信じることです。そして、信じるということは、天のお父さまに向かってお祈りすることなのです。

僕たち私たちのどんなお祈りも、この道でいらっしゃるイエスさまのおかげで聴かれています。何故なら、天に戻られたイエスさまは、今、父なる神さまの右にいらっしゃって、毎日、お祈りして下さっているからです。誰のために、お祈りして下さっているのでしょうか。それは、僕たち私たちのためです。僕たち私たちが、いつも天のお父さまと共に生きて、神さまの子どもとしてのすばらしい祝福、喜び、そして生活ができるように、祈って助けてくださるのです。天のお父さまは、イエスさまのお祈りですから、すべてを受け入れて下さって、お祈りをかなえてくださいます。天のお父さまは、イエスさまのお祈りにこたえて、お祈りしている僕たち私たちに、いよいよ神さまの霊を注いでくださるのです。僕たち私たちが、今、教会で礼拝できるのも、家でお祈りできるのも、それは、すべて、イエスさまのお祈りに、天のお父さまがこたえてくださるからです。こうして、僕たち私たちは、神さまの子どもとされた喜びのうちに遊んだり、勉強したり、安心して生きていけるのです。

お祈りができるのも、かなうのも、ぜんぶイエスさまのおかげです。だから、イエスさまのお名前で祈るのです。どんなに小さな声で、一言、「天のお父さま」とお呼びしても、天のお父さまは、ちゃんと聴いておられます。だから、今日も、明日も、嬉しいときも悲しいときも、祈りを待っておられる天のお父さまをお呼びしましょう。お祈りするって、ほんとうにすばらしいこと、すてきなことです。(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 14章6節

イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。
わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」

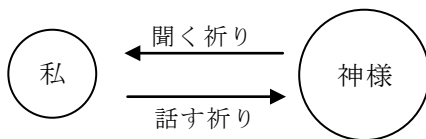
〈ねらい〉

祈りとは何か、どのように祈ればよいのかを考える。

〈展開例〉**1. 祈りとは**

お祈りは神様との会話です。会話とはお互いが話すことです。話を聞かないで自分の言いたいことばかり話していたら、会話にはなりません。でも、この会話はお友達同士の会話とは違います。相手は私たちを造られた神様だからです。

神様との会話は神様の語られる御声に耳を傾ける「聞く祈り」から始まります。神様の御心がわからなければ、私たちは何を神様に求めればよいのかがわからないからです。

**2. 聞く祈りとは？****①神様は御言葉をとおして語りかけられます**

「神様、あなたの御心を教えてください」という祈りをもって御言葉を読むとき、神様は聖霊によって語りかけてくださいます。

②神様は祈りの中で導かれます

会話はキャッチボールのようなものです。自分の思いを神様に伝えたら一方的に話し続けるのではなく、御心を教えてくださいと神様がお語りになるのを静かに待つことが大切です。

3. どうして祈らないといけないの？

聖書には「絶えず祈りなさい」（テサロニケー5:17）と書いてあります。どうして絶えず祈らなければならないのでしょうか。

赤ちゃんは生まれたとき、オギャーと泣くことで初めて肺で呼吸をするようになります。祈りは

魂の呼吸のようなものです。イエス様を信じて新しく生まれた私たちは、祈りという魂の呼吸によって霊的に成長し、力を与えられていくのです。息をしなければ窒息してしまうように、祈ることをやめてしまえば、霊的な命はだんだん弱っていき、息を吸って息を吐くのが呼吸です。聞く祈りによって息を吸い、話す祈りによって息を吐くのです。神様と祈りによって深く交わり成長していきます。

4. イエス様の御名によって祈る

教会ではお祈りの最後に「このお祈りをイエス様のお名前によってお献げします」とか「イエス・キリストの御名によって祈ります」と言いますね。どうしてでしょう。おまじないのように、この言葉を付け加えなければ祈りがかなえられないからでしょうか。

神様に祈ることなどできない罪人だった私たちが、「天のお父様」と親しく祈ることができるのは、イエス様が、私たちの罪を取り除いてくださったからです。私たちと天の神様とを結び付けてくださるイエス様がおられなければ、私たちは、神様に近づき、祈ることはできません。私たちの祈りはイエス様によって父なる神様に届けられるのです。

5. 祈りのノートを作る

新しい小さなノートを用意する。左側に祈った日と内容を、右側に祈りがきかれた日やどのように聞かれたかを書きましょう。数ページごとに祈る項目のインデックスを貼りましょう。（自分のために・家族のために・友達のために・教会のためになど）しばらくしてノートを読み返してみると、どんなにたくさんの祈りを神様がかなえてくださったか、また、願っていたものよりもっと素晴らしい結果が与えられたことに気づかされるでしょう。

11月24日 祈りとは何か (二) 教理説教のための聖書黙想

テキスト	フィリピの信徒への手紙 4章6,7節
子どもカテキズム	問76
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問98 ウェストミンスター大教理問答 問184

問76 お祈りとは何ですか。

答 神さまにお話しすることです。そのためには、まず神さまからの御言葉に聴くことが必要です。信じることは祈ることです。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

地の上には、「明日も絶対大丈夫！」と言い得るものは、一つもありません。どの時代の人々にとって、人生とはさまざまな「思い煩い」に悩まされることなのだと思います。したがって、放っておけば、実際に心や体を「患って」しまうことがあります。反対に、それを避けるために「真剣に」生きることをやめてしまうこともあるだろうと思います。

使徒パウロは、こう命じます。「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい」。これは、明日（将来）のことすべてを、主に委ねてしまいなさいという意味です。なぜなら、地上にあっては、自分で自分を支えることはできません。沼に足を取られ、沈んで行こうとするとき、自分で自分の頭を引き上げることはできません。ところが、人生においては、そのようなことを、しばしばしているのかもしれない。

そこで、パウロは、こう命じます。「何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい」。

「何事につけ」とは、「どんなことでも神に打ち明けてもよい」ということです。こんなことをお祈りするのは差し控えられる……というものは、ないというのです。つまり、それほどまでに、私たちがあるがままで赦され、受け入れられているという信仰の理解が示されているわけです。

「感謝を込めて」とは、祈る前から神がすでに課題をご存じでいてくださり、また必要であれば、祈りをかなえることができになることを信じるからできるものです。信仰のない祈り、信じてい

ない祈りは、神に喜ばれることがありません。祈る人の根底には既に、深い感謝が湧いているのです。また、そのような信頼と感謝そのものを求めるためにも、祈ることが許されています。

「打ち明ける」とは、心の内奥にある思いをさらけ出すことです。心を神へと注ぎ出すのです。そのために、それを受けとめてくださる父なる神さまとの間に深い信頼関係が求められます。つまり、祈る人には、すでにキリストによってそのような父と子との関係が成り立っているのです。その意味では、神は私たちの父であるばかりか、親友でもあるという側面を持つでしょう。心を打ち明けられるということは、既に、一方的な関係ではないことは明らかです。つまり、父なる神の御心は、聖書をとおして、私どもに打ち明けられているのです。祈りとは、神の御心と私たちの心とが深く交差する中で成り立つのです。

7節。「そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう」。救いとは、神の平和にあずかることに他なりません。神の平和にあずかるとは、その場で既に、天国に入ったということなのです。私たちは、祈りによって主イエス・キリストと一つに結びあわされるからです。こうして、お祈りする人は、キリストによって心と考えを、神の平和で守られていくのです。また、祈りによってその救いの事態を深く感謝をもって認識し、喜ぶことができるのです。

〈子どもカテキズムの解説と黙想〉

子どもカテキズムは、「信じることは祈ること」

と言います。教理用語ではなく、詩的な言葉です。その意味するところは、キリスト教信仰における祈禱の不可欠性です。キリスト教信仰とは、単に神の存在を信じるといふ有神論の立場に立つという次元のことでありません。哲学者たちが「推量する神（概念）」とは無縁のもので、私たちの神は、主イエス・キリストにおいて啓示された父なる神でいらっしゃる、父と御子と聖霊において一つの交わりを持つ生ける神です。

この神は、人間をご自身に向けて、つまり、対話する存在として創造してくださいました。したがって、人間にとって生きることは、神にまっすぐに向き合うこと、神との対話に生きることです（創世記2:7参照）。実に人間は、神の御心を知り、自分自身の心を打ち明けて、神との親しい交わりを結ぶことへと招かれているのです。そこに人間の尊厳があり偉大さがあります。祈ることは、人間のなしうるもっとも価値のある、尊貴で、美しい行為です。

一般の宗教に見られる祈りの「姿」は、静的です。しかし、聖書の祈りの世界は、むしろ動的です。何故なら、祈りの中心に神との交わりを楽しみ、喜ぶことを据えながら、「行為」を目指しているからです。例えば、ウェストミンスター大教理問答問184では、祈禱においてどのような事を祈らなければならないかが問われています。「神の栄光、教会の福祉、自分自身と他人との幸福に役立つすべての事柄」と答えています。第一に、神の栄光を求めるわけです。それは、神の御心が地上に実現することに他なりません。しかも、その御心は、神の民（キリスト者）とその教会を用いて遂行されます。したがって、私たちは熱心かつ真剣に、御心を生きる（行う）者となれるようにと祈り願うのです。

しかも、神の栄光を求める祈りは、救われた神の子たちにとっては、本心からのものです。言わば、「本音」です。ただし、その本心は、常に表層部分にあらわれているわけではありません。何故なら、私たち罪人の心（正確には魂）の中には、なお罪がしぶとく宿っているからです。善をなそうと願っているにもかかわらず、望んでいない悪を行っている現実があることを私たちは体験し

ています。魂において、常に深刻な戦いが生じているわけです（ローマの信徒への手紙第7章参照）。パウロが言うとおりに、キリスト者はなお、悲惨な罪人なのです。しかし、それで終わりません。私たちは、同時に、キリストの故に神に感謝することができるからです。罪赦され、神の子としての事実は揺るがないからです（ローマの信徒への手紙第8章参照）。

私たちのこのような霊的な戦いのなかで、私たちを勝利へと、感謝へと導くのは、祈りです。お祈りによって、神の御心と私たちの本心とは、結ばれます。十字架の縦の線（御心）と横の線（本心）とが交差（一致）するところに、神の栄光があらわされ、推進されて行きます。私たちがなすうるのは、キリストの勝利を信じ、それゆえに、御名を唱え、祈ることです。キリスト教信仰にとって、決定的に重要なこと、それは、主イエスを信じることにあり、祈ることにあります。

〈教師の皆さまに〉

弊誌は、信仰教育の目的を、「自分の言葉で祈ることができる子に育てる」と定義してまいりました。子どもたちが今、祈る喜び、その手ごたえを知ることができたらこれにまさる喜びはありません。なぜなら、彼らの全生涯が恵みに包まれることは、保証されたも同然だからです。

したがって、子どもたちに祈り（の教理）を教えることは極めて大切です（先週の解説参照）。しかし、いっしょに祈って、祈りの喜びの世界へ導くことは、もっと大切です。それを、同時にするのが、私たちの課題です。

ただし、子どもたちの信仰・霊性の深淺に合わせる事がとても大切になります。事柄を難しく伝えて、祈りに距離感を持たせるなら、元も子もありません。どんなに拙い祈り（のことば）であっても、心から感動し、ほめてあげ、父なる神に届いたことをはっきりと伝えて励まし、イエスさまと一緒に祈りしていただくことを伝えてください。もとより、この一回の単元だけでそれが達成されるわけではありません。私たちは、一生涯、祈りを深め、聖化の歩みを続けるのです。

（相馬伸郎）

テキスト フィリピの信徒への手紙 4章6, 7節
子どもカテキズム 問76

(単元のねらい)

私たちの心の中には闇の部分があります。神の御心に反抗する頑なな心があります。けれども、その闇の部分为本当の(究極の)自分ではありません。聖霊によって、キリストに結ばれた者たちの本心(本音)は、既に、神の御心になることを願う者へと変えられているからです。しかし、それを深めるには、時間がかかります。また、初心者と霊的体験を重ねて来た信仰者には、大変な差があります。ただし神の目から見れば、「いい勝負……」程度かもしれません。しかし、地上にあっては、キリスト者の信仰の深淺が、神の御業を推進させることもあれば、阻害することもあり得ます。だからこそ、真剣に熱心に祈ることを学び、身につけたいのです。何よりも、主の御心をわきまえ、「行う」者になりたいのです。

心の願いと御心が一つになるために

先週に続いて、お祈りについて学びます。先週は、イエスさまが天と地をつなげる道そのものになってくださったこと、イエスさまのお名前でもお祈りができること、天に戻られたイエスさまが執り成し祈ってくださるおかげでお祈りできることを聖書によって学びました。ですから、今朝も、神さまの御言葉を学び、聴きましょう。神さまの御言葉を聴くことが、もう、立派なお祈りです。お祈りの始まりなのです。

もう何度も、お話ししていることです。僕たち私たちは、お祈りするとき手を組みます。今、一緒にやってみましょう。手を組んでいるその手を見てください。そうすると、お祈りしているそのとき、何が自分に起こっているのかがはっきりわかります。右の手はイエスさまです。左の手は、自分自身です。しっかりと組み合わせましょう。分かりますか。そうです、お祈りしているとき、イエスさまは僕たち私たちをギュッと抱きしめてくださっています。つまり、イエスさまと私たちとは、一つにされるといことです。それを、イエスさまとの交わりと言います。そのことが分かってくると私たちの方でも、「そうだ、イエスさまの手をギュッと握り返したいな」と思うでしょう。つまり、お祈りしているとき、イエスさ

まど私たちとは、一つに結ばれているのです。だから、お祈りしていると、イエスさまと一緒にいてくださることがわかってくるのです。

幼稚園や小学校で、楽しいことばかりがあるわけではないでしょう？ 悲しいこと、悔しいこと、つらいこともあると思います。そんなとき、口に出してお祈りできなくても、両手を握ってみてください。そのとき、もう、イエスさまが、「大丈夫、心配ないよ。わたしはあなたといっしょにいるからね」と語ってくださる約束を思い起こして、心が落ち着いてくると思います。それは、イエスさまが聖霊なる神さまを注いで、御言葉の約束を思い出させてくださるからです。そのとき、本当に心が落ち着いてきます。それを、神さまの平和と言います。天のお父さまが、僕たち私たちを子どもとして守ってくださることがわかるからです。

もう一つの具体的な方法も紹介します。それは、十字架のしるしを思い起こすことです。僕たち私たちの教会の礼拝堂には、十字架のしるしがありません。私たちの教会は、目に見える十字架のしるしではなく、神さまの御言葉によって目に見えない神さまを礼拝する素晴らしさをいつも、追い求めているからです。けれども、「十字架のしるし」

が大切なものではないとは、思っています。

実は、十字架を思い起こすことは、とても、信仰の助けになります。そのためには、例えば、手のひらに描いてもいいです。胸のあたりでもいいです。額でもいいです。上から下に線を引きます。右利きの人には左から右に線を引きます。すると、十字になります。そんなふうにして、つらくて悲しくて苦しくて仕方がないとき、お父さんもお母さんも、イエスさまを信じる仲間が誰もいないとき、十字架を思い出してみるのです。

一人一人、いろいろな思い出し方があってよいです。イエスさまの十字架には、数えきれないほどの恵みが込められているからです。今朝、先生が紹介するのは、その一つです。先週、イエスさまが天国と僕たち私たちが生きているこの地上に通じる道を開いてくださったこと、繋げてくださったことを学びました。イエスさまは、天のお父さまの所から僕たち私たちの地上に降りて来てくださったからです。そして、天に戻って行かれたからです。これが、十字架の縦の線です。ところがもしも、私たちが、その道を開いてきてくださったイエスさまに、道そのものとなってくださったイエスさまに実際にお会いできなかったら、とても悲しいことです。そこで、横の線が登場します。横の線を引いたら、イエスさまの縦の線とぶつかります。それは、イエスさまと出会うということです。

ただたった一度、出会ってそれっきりになってしまったとしたら、本当に出会ったことにはなりません。イエスさまと出会うということは、繰り返し、毎日、イエスさまと出会うということです。こうして、イエスさまとの間に、深い絆が結ばれていきます。もちろん、その絆は、イエスさまの方がギュッと力強く結んでくださるのです。しかし、私たちも、横に線を引くこと、つまり、先ほどの、例えで言うと、左の手でギュッと握り返すことが必要です。縦の線と横の線とが結ばれ

る、重なる、一つになるそのところで、イエスさまと私たちは一つに結ばれるのです。その方法がお祈りなのです。

さて、子どもカテキズムで、神さまにお話しすることがお祈りだと学びました。お祈りで一番大切なことは、手を組むことでも、十字架の線を描いてみることでもありません。お祈りで、大切なのはことばです。今もう一度、暗唱聖句を唱えてみましょう。パウロ先生は、「打ち明けなさい」と教えてくれます。皆さんは、自分の心を打ち明けられる人がいますか。その人は、あなたにとって、一番大切な人のはずです。すばらしいことです。天のお父さまは、私たちに心の中にある思いのすべてを「打ち明けなさい」と呼びかけてくださいます。その第一の理由は、天のお父さまの方が、私たちより先に、心の中を打ち明けられたからです。神さまはその愛の御心を、聖書をとおして、イエスさまによって打ち明けられたのです。第二は、天のお父さまは、あなたの中の思いのすべてをご存知だからです。しかも、心配する必要はありません。何故なら、全部、ご存知の上で、まるごと愛して下さっているからです。お祈りには、うまいも下手もありません。天のお父さまは、子どもたちの一人一人が、自分の言葉で、素直にお話ししてくれることを待っておられます。それをいちばん、喜ばれるのです。

お祈りを続けていると、少しずつ少しずつ、神さまの御心と僕たち私たちの心が一致していくようになります。神さまに喜ばれるお祈りがなくなってしまうかもしれません。しかも、私たちの心が神さまの御心にぴったり合わないときでも、イエスさまがギュッと抱きしめていてくださることは、間違いありません。だから、安心して、焦らずに、今週も毎日、先生と一緒に、皆と一緒に、小さなお祈りを続けていきましょう。(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] フィリピの信徒への手紙 4章6, 7節

どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。

何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。

〈ねらい〉

祈りが祝福されるためには、祈りの訓練が必要であることを学ぶ。

〈展開例〉**1. 祈りには訓練が必要**

祈りは呼吸のようなものです。息を吸ったり吐いたりする練習をしなくても自然に呼吸はできますが、霊的な呼吸＝祈りには努力や練習が必要です。美しい言葉ですらすらと祈れるようになることが目標ではありません。祈ることを学ぶのは、神様との豊かな交わりに生きるためです。私たちの祈りは自己中心的な祈り、力のないむなし形だけの祈りになってしまっていないでしょうか。

2. どう祈ったらいいの？**①静かなところで祈る（一人で祈る場合）**

祈りの中で神様からの語りかけを聞くためにふさわしい場所を探しましょう。人目を避けて祈られたイエス様のように、できるだけ一人になれる静かな場所と時間を見つけましょう。

②心を開いて祈る

私の心のうちを神様はすべてご存知です。自分をよく見せようとするのではなく、心を開いて祈りましょう。言葉にできないような悲しみや嘆き、不安を神様は汲み取ってください。具体的に神様に打ち明けてください。

③信仰によって祈る

祈りに一番大切なのは、神様は私たちの祈りに耳を傾けてくださり、最善のものをくださるお方であると信じる信仰です。祈ったことを神様は、最も善いタイミングで、最も善い形でかなえてくださいます。

④祈り続ける

でも、祈りがすぐにはかなえられないことも多く

あります。それでも忍耐を持ってあきらめずに祈り続けましょう。祈り続けることによって信仰は強くされます。神様は私たちを待たせることによって、私たちの信頼と希望をより確かで強いものにしようと訓練されるのです。御心にかなう祈りであれば、御心の時に、必ずかなえられます。

しかし、神様の御心ではないために、祈りがかなえられないという場合もあります。その場合には、神様は私たちに御心をハッキリと知らせてくださり、祈りの方向性が違うときには正しい方向を示してくださいます。

⑤祈りを妨げるもの

罪というゴミが詰まっていたり祈りを妨げていることがあります。どうせ祈っても神様は祈りに応えてはくださらないだろうという不信仰な思いや疑いを持って祈ってはいけません。

また、自分の中に告白していない罪があったり、自分の楽しみのために、間違った動機で願い求めるなら、祈りは聞かれません。（ヤコブ4：3）

3. 祈りの花束を作る（次ページ参照）

祈りには

さ……讚美 か……感謝
こ……告白（罪の告白）と……とりなし
ね……願い などの要素があります
次ページの絵を拡大コピーして「さかことねの」の祈りの言葉を花の中へ書きましょう。

例えば……

讚美の祈り 「神様は素晴らしいお方です」

感謝の祈り 「イエス様の救いを感謝します」

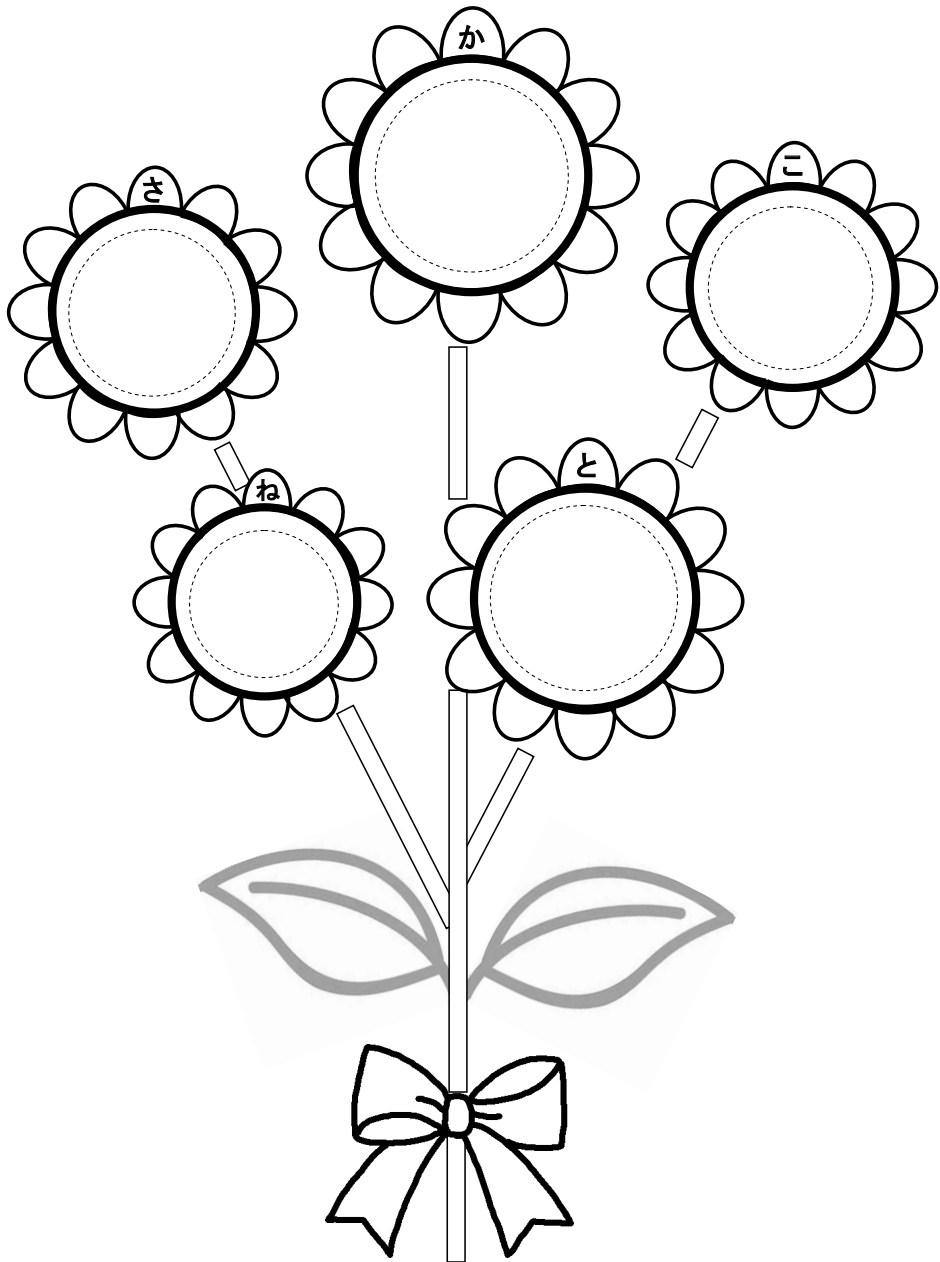
告白 「私は嘘をついてしまいました」

とりなし 「Aさんの病気が癒されますように」

願い 「友達と仲直りできますように」など。

時間があれば花に色を塗りましょう。

「祈りの花束」を作ろう



12月1日 インマヌエル預言 教理説教のための聖書黙想

テキスト

イザヤ書 7章1～17節

参照教理問答

ハイデルベルク信仰問答 28, 47, 53

〈聖書テキストの解説と黙想〉

イザヤ書7章において、14節の言葉だけがあまりにも有名になりすぎて、イザヤ書7章を開いたときに、この節だけしか目に入らない状態のクリスチャンが多いように思う。しかし、前後もしっかり読んで、本来イザヤ書では、この言葉はどのような意味で語られていたのか、確かめておきたい。

イザヤ書7章の時点では、14節は一足飛びにイエス・キリストの誕生を予告しているのではない。その当時のメッセージがあった。

時は「(北) イスラエルの王ベカが、(南ユダ王国の首都)エルサレムを攻めるために上って来た」年(1節)、つまり紀元前734年のことである。北イスラエルが単独では攻撃を仕掛けることができず、さらに北にあるシリアと同盟を結んで、南ユダに攻撃を仕掛けようとしている、という知らせが入ってきた。その知らせが伝えられたとき、「王の心も民の心も、森の木々が風に揺れ動くように動揺した」(2節)。動揺しているユダの王アハズに、主はイザヤを通して「落ち着いて、静かにしていなさい。恐れることはない」(4節)、「信じなければ、あなたがたは確かにされない」(9節)、と語られる。さらにアハズに向かって「主なるあなたの神に、しるしを求めよ」と主は言われる(10節)が、アハズ王は信仰深げに「わたしは求めない。主を試すようなことはしない」(12節)と答え、神にもどかしい思いをさせる。そこで神自らがしるしを与える、と語られたのが「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ」(14節)という預言。その時に生まれた男の子が「災いを退け、幸いを選ぶことを知るようになるまで」(15、16節)、つまり成人するころまで、「彼は凝乳と蜂蜜を食べ物とする」(15節)と言われている。つまり、戦争が続いて、農地が荒れて農作物は食べられないので、そのようなものを食べるしかない、ということ。また、こ

の男の子が成人する前に「あなたの恐れる二人の王の領土は必ず捨てられる」(16節)ということが予告される。現に、紀元前722年、そのインマヌエルが12歳のとき、北イスラエルは滅びた。主はさらに、それよりももっと先にやってくる災いがあると告げる。「アッシリアの王がそれだ」(17節)と。それゆえ、今、アハズ王が恐れているシリアと北イスラエルは恐るるにたりない、「落ち着いて、静かにしていなさい」、「信じなければ、あなたがたは確かにされない」、「インマヌエル(神は我々と共におられる)」を信じなさい、というのが本来のメッセージである。

この時の男の子の名前「インマヌエル」を呼びながら、「神は我々と共におられる」ということを思い起こし、信じて静かにしていると、預言のとおりのおこりが起こって、イザヤたちは救いを経験したことだろう。しかし、ほどなくユダ王国も滅ばされ、バビロン捕囚が起こる。まことの「インマヌエル」待望が始まり、イザヤ7章14節はメシア預言として語り伝えられることとなった。

「インマヌエル(神は我々と共におられる)」ということは、イザヤの時に初めて告げられた事柄ではない。旧約聖書には、創世記のはじめの方から脈々と、「主が共におられたので」という言葉を書き留めている。ヤコブに対して(創28:15, 28:20, 31:3, 31:5, 35:3, 46:4)、ヨセフに対して(創39:2, 39:3, 39:21, 39:23)、モーセに対して(出3:12, 4:12, 4:15, 18:19, 33:16, 34:5, 34:9, 34:28, 申2:7, 5:31, 31:6)、ヨシュアに対して(申31:8, 31:23, ヨシュア1:5, 1:9, 1:17, 3:7, 6:27)、ダビデに対して(サム上16:18, 17:37, 18:12, 18:14, 18:28, 20:13, サム下5:10と代上11:9, サム下7:3と代上17:2, サム下7:9と代上17:8, サム下14:18, 23:5など)、イザヤ(イザヤ41:10, 43:2, 43:5, 57:15, 66:14は「御手」)、エレミヤ(エレミヤ1:8, 1:19, 15:20,

20:11, 30:11, 42:11, 46:28など)といった預言者に対して、随所に「主が共におられ」ることが励ましとして告げられ、「主が共におられ」たことが記されている。

このように、「インマヌエル」の約束には、旧約全体にわたるスケールでの確証が存在している。神はこのように我々と共にいてくださる、ということ、それぞれの人の物語から具体的に知ることができるのである。また、マタイがイザヤ7章14節を引用し、「インマヌエル(神は我々と共におられる)」ということ、冒頭にも最後にも記して、これを背骨にして福音書を書いている。イエス・キリストこそ、上述のように旧約全体の重みを含み込んだ「インマヌエル」の本体である、と言っているように思う。

「インマヌエル」預言は、私たちの心が「森の木々が風に揺れ動くように動揺し」ているときに与えられる、ということについて、書き足しておきたい。これは現在においても実感することができる。例えば、今年の総選挙の結果には、多くのクリスチャンに動揺が走るといったことがあった。それはまさに「インマヌエル」預言を思い起こすアドヴェントの時期であった。主は今も、この預言によって私たちに救いの希望を与えられる。そのとき、「落ち着いて、静かにしていなさい」、「信じなけ

れば、あなたがたは確かにされない」という言葉も、イザヤ書7章の流れに即して、共に思い起こす必要がある。

〈参照教理問答について〉

参照教理問答として、ハイデルベルク信仰問答の28, 47, 53を挙げた。それぞれ、父・子・聖霊なる神についての問答の中で、「インマヌエル(神は我々と共におられる)」を確認できるはずである。問答28では神の創造と摂理を知ることによって、どんな被造物もこの方の愛からわたしたちを引き離すことはできないと確信できるようになる、ということが語られている。問答47は、御子がどのようにわたしたちと共にいてくださるのかを述べている。それを讀むと、マタイによる福音書が、この「インマヌエル」預言でイエス・キリストを語りはじめ、最後に、大宣教命令として、同じ約束の言葉「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」を書き記して閉じていることを、はっきりと思い起こすことができる。問答53は聖霊について信じるべき事柄の中に、永遠にわたしと共にいてくださるということを明言している。(赤石めぐみ)



(単元のねらい)

インマヌエル預言の元々のメッセージを確認した上で、待たれていた「救い」がどれほどのものかを伝えたい。男の子が生まれる、という部分だけでなく、この預言が語られたとき、「落ち着いて、静かにしていなさい」と命じられたこと、「信じなければ、あなたがたは確かにされない」と言われたことにも目を留めたい。そのことによって、「救い」を待つ姿勢を整えたい。

神さまの「救い」を信じて待つ

今日からアドヴェント。イエスさまのお誕生をお祝いするクリスマスの礼拝をする日まで、あと3週間になりました。今日を入れて4回日曜日を数えると、クリスマスです。クリスマスが来るのは、待ち遠しいですか？ それはどうしてですか？ プレゼントがもらえるからですか？ ほしいなあ、と思っているものが、クリスマスになったらもらえる、とわかっていると、待ち遠しくなる気持ちはよくわかります。

昔むかし、旧約聖書の時代の人びとは、神さまがくださる「救い」がほしくて、ずうっとそれを待っていました。旧約聖書の中に、「その日には」と書いてあるところがいくつかあります。「その日には」神さまが救いをくださる、と約束してくださっていることが書いてあるのです。旧約聖書の時代の人びとは、「その日」が来るのを、今か、今かと待っていました。旧約聖書の時代の人びとは、神さまの「救い」がとてもほしかったのです。

今日読んだイザヤ書7章のお話は、どういうことだか、わかりましたか？ このときにも人びとは、神さまの「救い」がほしくて、今か今かと待っていました。それなのに、「救い」どころか、北の方から強そうな国が攻めてきそうな知らせが入って、みんなの心は、「森の木々が風に揺れ動くように」（2節）どうしよう、どうしよう、と不安な気持ちになっていました。王さまでさえも、不安な気持ちになっていました。不安なのに、預言者のイザヤが、「落ち着いて、静かにしていなさい」（4節）。神さまを信じなければ、あなたが

たは確かにされません（9節）。さあ、神さまに救いのしるしを求めてはどうですか（10節）」と言っても、「わたしは求めない、主を試すようなことはしない（12節）」と強がりを持って、神さまに助けていただこうともしませんでした。神さまは、「おやおや、そんなに強がらずに、わたしに救いを求めたらよいのに。なぜ人間はこう強がるのだ。人間がわたしに救いを求めるようになるまで待っていることは、わたしにはもどかしい。だから、わたしの方から救いのしるしを与えるぞ」とお思いになりました。そして、もうすぐ戦争が始まるというときに、ひとりの男の子が与えられました。男の子の名前は神さまがお決めになりました。それは「インマヌエル」という名前です。これは、「神さまはわたしたちと共におられる」という意味の名前だということが、マタイによる福音書に書いてあります。みんなも、赤ちゃんが生まれると、赤ちゃんに向かって「〇〇ちゃん、〇〇ちゃん」とたくさん名前を呼んであげますよね？ 赤ちゃんが生まれて、みんなが「インマヌエル、インマヌエル」とその赤ちゃんを呼ぶとき、みんなは「神さまがわたしたちと共におられる」ということを思い出すことができました。インマヌエルが13歳になるまで（成人するまで）に、みんなを怖がらせている強そうな北の国は、もっと強い国が出てきて滅ぼされますよ、と、神さまが教えてくださっていたのですが（16節）、インマヌエルが12歳のときに、本当にそのとおりになったので、みんなは神さまの力をはっきりと知

りました。

「神さまがわたしたちと共におられる」ということをいつも覚えて、信じて、落ち着いて静かにしていると、確かに救われる、ということ、このときの人たちは経験しました。でも、残念なことに、またその後には、戦争が起こって、イザヤたちの国も滅んでしまいます。本当の救いはまだだった、とみんながっかりしました。そして、本物の「インマヌエル」が来てくれますように、と願うようになりました。前よりももっとも強く、神さまの「救い」がほしい、と思うようになりました。戦争がなくなって、自分の住んでいる国がなくなるということもなくなって、みんなが安心して過ごせる平和な世界がほしい、生きていてよかったと思える世界がほしい、神さまが世界を救って、そういう世界にしてほしい……。

みんなはどうですか。みんなもそういう神さまの「救い」、ほしくありませんか？これはおもちゃよりもゲームよりも、もっともっと大切なものです。みんなに、本気で「ほしい！」と思ってもらいたいものです。そして、神さまはクリスマスの日に、全員にこの「救い」、この「平和」をくださると約束してくださっています。

「神さまがわたしたちと共におられる」ということをいつも覚えていなさい、と言われるけれど、それってどういうことなんだろう、と思われるかもしれません。旧約聖書の中には、神さまが共におられた人たちの物語がたくさん出てきます。創世記に出てくるヤコブ。お兄さんに疎まれて、一人でラバンおじさんのところに行かなければならなくなったとき、神さまは共にいてくださいました。その息子のヨセフ。エジプトに売られて牢屋に閉じ込められてしまったとき、神さまは共にいてくださいました。出エジプトを導いたモーセ。

口が重くて皆が従ってくれるか自信がなかったとき、神さまは「わたしは必ずあなたと共にいる」と言って励ましてくださいました。その後継者ヨシュア、ダビデ王、そして今日の預言を語ったイザヤにも、神さまは「わたしはあなたと共にいる」とおっしゃいました。それらの人たちがひとりぼっちのときに、また、神さまのお仕事をする大変なプレッシャーの中にあるときに、語られた言葉です。みんなにも同じようなことがあるでしょう。ひとりぼっちのとき、大きな役目をするプレッシャーの中にあるとき。そういうときは、旧約聖書の物語を思い出せば、あの人たちのときと同じように、神さまは自分とも共にいてくださる、と信じていることができると思います。

そして、もっともっとよく、「神さまがわたしたちと共におられる」ということをわたしたちが知ることができるように、神さまは本物の「インマヌエル」を生まれさせてくださいました。それがイエスさまです。イエスさまはわたしたちと同じ人間の姿になってくださいましたので、もっと近くに神さまを感じるできるようになりました。

昔、イザヤの時代の人々は、「インマヌエル」という男の子の名前を呼びながら「神さまがわたしたちと共におられる」ということをいつも覚えて、信じて、落ち着いて静かにしていたら、確かに救われるという経験をしました。わたしたちも、「神さまがわたしたちと共におられる」ということ、イエスさまのことをいつも覚えて、信じましょう。そして、落ち着いて静かに、救いを待ちましょう。イエスさまが来てくださいましたので、イザヤの時代の人々よりもずっと確かに、わたしたちがそのことを信じていることができるように、神さまはしてくださったのです。 (赤石めぐみ)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 1章23節

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

〈ねらい〉

インマヌエル預言の歴史的背景を学ぶ。

〈展開例〉**1. インマヌエルってどういう意味？**

「それゆえ、わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ」（イザヤ書7:14）。

インマヌエルとはヘブル語で、インマ（〜と共に）、ヌ（我ら）、エル（神）つまり、「神、我らと共にいます」という意味です。

2. その頃、どんなことがあったの？

預言された紀元前734年（今から2747年前）イスラエルは北のイスラエル王国と南のユダ王国に分裂していました。北の方には大きな強い国、アッシリアがありました。



アラムの王レツインとイスラエルの王ベカはアッシリアと戦うために同盟を結び（協力して戦うこと）、ユダにも協力を求めましたが、ユダが断ったため、アラムとイスラエルがユダに攻めて

来ようとしていました。

この知らせを聞いたユダの王アハズと民はひどく恐れ、不安を覚えました。そこで、アハズはアッシリアの王に助けを求めようと考えました。

3. イザヤの預言

その時与えられたのは、「落ち着いて、静かにしてなさい。恐れることはない」もうすぐ「あなたの恐れる二人の王の領土は必ず捨てられる」。そして、協力を求めたアッシリアに反対に苦しめられるようになるという預言でした。

しかしアハズ王は、ただ神様だけを信頼しなさいと語ったイザヤの言葉に耳を傾けず、アッシリアの王に助けを求めました。神様の言葉どおり、2年後にはアラムが、12年後にはイスラエルがアッシリアによって滅ばされてしまいます。

4. 神様の救いの確かさ

神様に助けを求めず人に頼ったユダの国はどうかになったのでしょうか。アラムとイスラエルの国からの攻撃は避けられましたが、神様の言葉のとおり、アッシリアに苦しめられて滅びへと向かいます。「神我らと共にいます」という言葉は、不信仰なアハズに対して語られた言葉でした。神に信頼するなら共におられる神が守ってくださる。しかし、信じない人にとっては、神は裁きを与えられるという預言でもあります。どんなに困難な状況でも、また人の罪がどんなに深くても、神様の救いの御業は進んでいきます。

それから約700年後、神様は、約束どおり、イエス様をこの世にお送りくださいました。この方こそ人として私たちの中に住んでくださる神、「インマヌエル」です。神様の恵みと約束が確かであることを感謝します。

5. アドベントカレンダーを作ろう（次頁参照）

《アドベントカレンダーを作ろう》

アドベントカレンダー その1



1. 上の画像を拡大コピーして色をぬる。
2. ○の部分に1～25の数字を書く。
3. その日が来たら、○の番号の上にシールを貼る。(大・中・小のシールを用意)
(クリスマスの柄のシールや丸いシール)
4. 大きな紙で作り、○の部分に小さなお菓子を貼ってもよい(両面テープまたはセロテープを丸めて)。
その場合、お菓子の上に番号のシールを貼る。
5. その日が来たら、お菓子を食べてから台紙にクリスマス柄や丸いシールを貼る。

アドベントカレンダー その2



1. ひと月分の薬入れ（カレンダーポケット）を一人に一つずつ用意する（100円ショップにあります）。
2. 1～25の袋の上にクリスマスのイラストを貼る。1～25の番号を隅の方に書く。
3. 袋の中に小さなお菓子を入れる（その日が来たら、袋から出して食べる）。
4. 26～31の袋の上に番号なしのイラストを貼る。

背景

アッシリアの勢力に対抗しようとして、北イスラエル王国（エフライム）はシリア（アラム）と反アッシリア同盟を結んだ。そしてユダも同盟に引き入れようとした（733年）。しかし、ユダはそれを拒絶した。これに怒った反アッシリア同盟軍がエルサレムを攻撃し、シリア・エフライム戦争が起こる。この危機の際、預言者イザヤの勧告を無視して、ユダは主の神殿と宮殿から莫大な財宝をアッシリアに贈って援助を求め、危機を脱した。アッシリアは734年と732年の2回にわたりパレスチナに遠征し、イスラエルの西部、東部、北部が分離され、ティグラトピレセルによって、アッシリアの属州への転入が行われた。列王記下15章29節にあるとおりである。

このアッシリア捕囚という暗闇の、まさに悲惨な状況の中で苦役の下にいた民に対して、この預言はなされている。それは、マタイ4章15節から16節にも引用されており、メシア預言である。

9章1～6節全体

1節の「見た」「輝いた」、2節の「お与えになった」「祝った」、3節の「折ってくださった」、4節の「焼き尽くされた」、5節の「生まれた」「与えられた」「肩にあった」「唱えられた」は、全て完了形ないしは完了の意味に取るべき動詞である。すなわちこの預言は圧政者の敗北が、既に完全に達成された事実であるように語っているのである。そして6節の「万軍の主の熱意がそれを成し遂げる」という言葉によって、これが神ご自身から出たことであり、神ご自身の情熱によって成し遂げられる内容であることを明示している。

1～2節

「闇の中を歩む民」、「死の陰の地に住む者」とは、8章23節のアッシリアの属州に転入された町々のことと考えられる。辛苦の中にあった神の民に、光が輝いたとある。神が、苦しむ民に「深い喜び」「大きな楽しみ」をお与えになったとある。神の裁きと懲らしめとも受け止めることのできる状況

のただ中に、神の光が現れる。その光は、敵どもを滅ぼす。敵を追うのは人間の手ではなく、神の直接介入である。苦しむ神の民は収穫の時のように、獲物を分配する時のように神の面前で喜び合うのである。

9章3～4節

3～5節は歎呼の理由を述べている。3節にあるように、隷属された捕囚の民は、貢納と賦役の重荷に苦しみ、棒を持った人間によって労働を強いられる家畜のようであった。しかし、神ご自身が捕囚の民の負う鞭、労働の際に肩を打っていた杖、虐げる者達の鞭を折ってくださったのである。主がギデオンのミディアン人に対する勝利の時（士師6:33以下）になされたように、圧政者から解放してくださったのである。

地を踏み鳴らして行進した兵士の靴、また戦いで人を殺して血にまみれた軍服は焼き尽くされたのである。戦争は不可能になった。

9章5節

5節のみどり子の誕生は王の即位式（詩編2編参照）と重ねて理解するべきところ。「権威が彼の肩にある」とは、前代の王の王笏が、次の王となる正当な継承者であるみどり子の肩にあり、王の権威がその肩にある様子。このみどり子の誕生によって王国は確立する。この預言を当時の歴史の中の実際の王の即位と理解するなら誰に当たるかは解釈が分かれるところである。ここでは捕囚の民に与えられたメシア預言としての理解にとどめておく。

このみどり子の出生の対象は「わたしたち（神の民）」。その目的は「わたしたち（神の民）に与えられるため」。主権が彼の肩にある。つまり、この王は「しるし」なのではなく、実際の統治者ご自身であられるということ。「生まれた」「与えられた」「ある」「唱えられる」は全て完了形。事柄が確実に、完了していることを示す。つまり、この真の王は、この言葉が語られたその時に、既にそこに「与えられた」お方として、表現され

ている。一人の男子の誕生を根拠に、闇から光へ、争いから平和が確実に来るのである。

5節の後半はこの新しい王の属性を表す称号で、即位ないしは誕生の時に与えられていると思われる。最初の2つは修飾語がどこに掛かるかによって、「不思議、助言者」、「驚くべき指導者」、「不思議な助言者」とさまざまな読み方になるが、ともかく「驚くべきこと」は助言者自身にあるのである。オリエン特専制君主制においては、王に「助言者」や「議官」がいて政治を助けたが、この方は助言者を必要としない王であるのだ。

そして、「力ある神」は、メシアの超人的な霊の力を思わせ、全世界にわたるこのお方のご計画は必ず達成するのだということを連想させる。

「永遠の父」は、歴史の興亡を超えた終末的な王国の樹立者を指す。また「父」によりこのメシアがイスラエルの民に対する保護者であることを示し、永遠に及ぶ父親のような、公正で思いやり深い統治を連想させる。

「平和の君」の「平和（シャローム）」とは健康で、平安で、健全で、安全で、欠けることが無い十全性を示し、人間・動物・植物といった万物が健全で本分に相応しい状態にあることを指している。

これらすべての王の称号は救い主であり、王であられる、神の子主イエス・キリストのことを指す。

9章6節

「ダビデの王座と王国に権威が増す」とは、平和の君なる主イエスが、「ダビデ契約」（神が永遠にダビデと結ばれた契約。サムエル記下7:12参照）と関係があるお方であると解することができる（マタイ1:1参照）。このメシアによって「平和は絶えることがない」のである。

その「王国は正義と恵みの業によって」「今もそしてとこしえに立てられ支えられる」とは、神の目に見えない王国は「今も」そして「永遠に」、

「正義と恵みの業によって」確立するというものである。そしてこの王国は永遠に持続するものである。

6節の最後に、この預言の言葉の信頼性が、「万軍の主の熱意がそれを成し遂げる」によってあらわれている。万軍の神が熱心にそれを成し遂げられるのである。これほど信頼できることはない。

アッシリアの侵入によって属州とされ捕囚とされた後にこの預言がなされたとすれば、イザヤは再び南北両王朝が統一されてダビデ王国以上の繁栄と平和が満たされる日を描いたに違いない。この預言は捕囚の民を勇気づけ力づけたに違いない。

それと同時にこのメシア預言は、新約において誕生なさった主イエス・キリストを指し示している。みどりごという言葉からは、柔和で、力で主張しない、純粋な無垢な存在が連想される。「平和の君」という言葉で表現される平和は、「正義と恵みの業によって」「立てられ支えられる」平和なのである。

主イエスは私たちと神との平和を実現するため、この世に来られた。そして本当の王であられるお方が、私たちの罪のためご自身を十字架にささげてくださった。なんとという犠牲であろうか。罪の無いお方が罪ありとされ、私たちの身代わりに裁かれてくださったのだ。それは神の真実と恵みによる。私たちはこの主の完全な赦しを受け、歓喜に満ちて主イエスを愛し、主に仕える者となる。そして、神との和解、隣人との和解、自分自身との和解、世界との和解に向けて、新たに生きることができる。御言葉の前にへりくだり、御霊に謙虚に信頼して、罪を悔い改めつつも、平和の実現のために仕えることができる。平和の実現は主イエスの御心である。そして「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ5:9）のである。（袴田清子）

(単元のねらい)

イザヤのメシア預言を通して、私たちの主イエスがどのようなお方であられるかを知り、平和の君キリストを待ち望み、平和の完成のために仕えよう。

平和の君・キリスト

今から2700年ほど前、真の神様を知らないアッシリアという大きな国が、神の民である北イスラエル王国やユダ王国にとって、大きな脅威となっていました。そのころ北イスラエル王国もユダ王国も、すっかり神様から離れて、いくら預言者が神様に立ち返るように語り救いの道を示しても、聞こうとしませんでした。そしてとうとう、北イスラエル王国はアッシリアによって占領され、多くの民が捕囚として連れ去られてしまいました。

住んでいる土地から切り離され、仕事も家も財産も、家族の絆も奪われた北イスラエルの人びとは、アッシリアの言うままに、苦しい仕事を、食事もなく与えられずにやり続けるしかありません。仕事がかどらなかつたり、役人の機嫌が悪いときには、まるで動物のように、棒で肩を殴られたり、鞭打たれたりしました。

神の民は、全く望みのない絶望の中に住んでいました。終わりの見えない、悲惨と暗闇の中に置かれていました。そのような暗闇の真ん中に、神様が預言者を通して、光を輝かせてくださったのです。それはまるで農夫が長い間待ちわびていた麦の刈り入れのときを喜び祝うよう、また戦争に勝利し大喜びの中、分捕った品々を分け合って楽しむときのように記されています。

そのように喜べるのは、神様がもたらされる救いが啓示されたからでした。虐げられ苦しめられていた人たちに、神様の不思議な力と方法によって、解放がもたらされるのです。ミディアン人に対して士師ギデオンが勝利したときのように、解放が与えられるのです。戦争は完全に終わり、行進の時に地響きを立てた兵士の靴や、戦争で人を

殺して血がついている軍服は、火に投げ込まれて焼き尽くされてしまいます。

預言者イザヤは言います。「一人の赤ちゃんが私たちのためにお生まれになった」「一人の男の子が私たちに与えられた」。これはクリスマスの時、この地上にお生まれになられた神の子主イエス様のことを指しています。どうしてこの時から700年以上後にお生まれになるイエス様が「生まれた」と言われているのでしょうか。それは預言として必ず成就することだからです。救い主の誕生が確実なものとして預言されているのです。

この主イエス様の上に、父なる神様から王としての権威が置かれています。そしてその称号は「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君」です。

「驚くべき指導者」とは間違いを決して犯さない、助言者を必要としない指導者のことです。「力ある神」とは、神としての超人的な霊をお持ちの神ご自身であられるということです。そしてそれはご計画されたことは、必ず達成されるということも意味します。「永遠の父」とは、歴史を超えておられ、永遠から永遠まで存在なさるということ、そして父親のようなお方なのだということを目指します。お父さんは頼りになります。一家を養ってくれます。怒られると怖いときもありますが、正しく導いてくれます。また助けが必要なときには助けてくれます。また相談にのってくれたり、一緒に遊んだりしてくれることもあります。主イエス様も父親のような存在でいらっしゃるのです。

そして「平和の君」と呼ばれるとは、主イエス

様が完全な平和を造りだし、その平和の上に王様として君臨されるということです。平和とは、健康で、健全で、安全で、何も欠けることがなく、人や動物そして植物などの全ての物がそれぞれの本分にふさわしい状態にあることを指します。いちばんの理想的な平和は、世界が神様によって創造された時、全く罪の影響の無かった時と、やがて来る天の御国と言えるでしょう。

「ダビデの王座とその王国に権威は増し」とありますが、これは、ダビデ家の血筋の家にお生まれになった主イエス様によって、神様がダビデ王と結ばれた約束を守られたことを意味します。そして主イエス様の故に平和は途切れることがないのです。王国は正しさに貫かれ、恵みの業によって今も、そして永遠に建てられて支えられるのです。これらのこと全てを神様の熱心さが成し遂げると言われています。つまり、必ず成就することです。

この預言は、捕囚とされ苦しみのどん底にいた民に、生きる希望と勇気を与えたことでしょう。そしてこの預言を聞いた人たちは神様の救いに希望を置いたことでしょう。

この主イエス様はクリスマスの時にこの地上にお生まれになりました。そして、十字架に掛けられて死なれました。それは私たちのためです。全く罪を犯されなかった完全な神ご自身であられるのに、「私たちのために」十字架にご自身をささげてくださいました。それは、私たちの罪のためです。それは、これ以上ない完全な供え物としてご自身をささげて、贖いを完成なさるためです。神の真実な憐れみと救いの恵みの業のあらわれで

す。このように完全な救いが私たちに与えられています。主イエス様は「平和の君」です。そしてその王国は正義と恵みの業によって支えられているのです。ならば、平和の君であられる主イエス様にお仕えするとき、「平和」を造りだす努力をするのは当然のことになります。

「平和」ということを考えると、その反対のことが私たちの周りにはたくさんあることに気がきます。私たちの日常生活においても小さないざこざや、新聞に載るような事件、地球のどこかで起こっている戦争、あるいは貧困や飢え、国によっては権力者の搾取や圧政もあります。また自然環境に関しては公害や原子力の問題があります。このような状況は神様が最初に世界を創造された状態にほど遠いと思うかもしれません。

しかし、イエス様ご自身は「平和を実現するものは幸いである。その者は神の子と呼ばれる」と語っておられます。そのことを神様は喜ばれるのです。

一度喧嘩をしてしまった人と仲直りするのは、簡単なことではないかもしれません。あるいは自分が悪かったとわかっていても、それを素直に認め「ごめんなさい」と言うのは難しいかもしれません。さらに貧しい人を助けることや、自然環境の回復はとても困難なことかもしれません。しかし、私たちは投げ出しません。「平和」は「平和の君」であられる主イエス様の御心なので、主の再び来られる日を待ち望みながら、「神の子」と呼ばれるために、私たちは平和の完成に仕えて生きていくのです。 (袴田清子)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 5章9節

平和を実現する人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。



〈ねらい〉

神様が約束された救い主は、どのような方なのかを学ぶ。

〈展開例〉**1. 救い主が生まれる約束**

今から2700年ほど前、イスラエルは北と南に分裂していました。北のイスラエルはアッシリアという大きな強い国に征服され、人々はアッシリアへ捕虜として連れ去られてしまいました。自分たちの国はどうになってしまうのかと不安と恐れで一杯でした。

このような恐ろしい時代に、神様は預言者イザヤを通して、人々を助けてくれる救い主が生まれるという約束を与えてくださいました。「闇の中に歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた」（イザヤ9:1）。それは、暗い中に光が輝き出すようなうれしいニュースでした。

2. 救い主はどんなお方？

イザヤはこの救い主を、いろいろな呼び方で紹介しています（イザヤ9:5）。



驚くべき指導者
力ある神
永遠の父
平和の君

**(1) 驚くべき指導者**

新改訳では「不思議な助言者」、英語ではワンダフル・カウンセラーと訳されています。このお方は、信じる人の心に住んで正しい道へと導いてくださる素晴らしいカウンセラーです。

(2) 力ある神

このお方は、単なるこの世の王ではなく、全知全能の力ある神でもあられます。

(3) 永遠の父

このお方は、いつまでも私たちを愛し続けてくださる父のような方です。

(4) 平和の君

このお方は、人と神との間にあった罪を打ち滅ぼし、神との平和、自分との平和、人との平和を造り出してくださいます。

3. 救い主が与えられる喜び

救い主が与えられるという知らせがうれしいのは、イスラエルを敵から解放してくださるだけでなく、この救い主が、私たちを縛りつけ苦しめている罪を滅ぼし、私たちを罪から解放して下さるからです。

この預言のとおり、神様は今からおよそ2000年前、イエス様をこの世界にお送りくださいました。そして、このお方を十字架にかけるといって私たちに对我们的愛を示されました。ここにどんなに大きな神様の愛が示されているかを知るとき、私たちは驚きと大きな深い喜びに包まれます。クリスマスがこの素晴らしいお方と出会う時となりますように。

4. クロスワードパズル（次ページ参照）

クロスワードパズル

	1								
①					2				
		②			③	3			6
	④					⑤	4	5	

テキスト

マタイによる福音書 1章18～25節

参照教理問答

子どもカテキズム 問22、23

※説教のための聖書黙想として、今回与えられたテキストから子どもたちのためのメッセージを作成した際の道筋を記すことにします。

聖書テキストの解説と黙想

最初の黙想（素読）

※テキストから「？」を抽出します。

私はいつも、聖書のテキストを行間に余裕をもって印刷した紙を用意して、自由に書き込みをしながら読み進めています。

- ・ヨセフはどのようにしてマリアが身ごもっていることを知ったのだろうか。
- ・「正しい人」というのはどういうこと？ ヨセフが「正しい」ことと、ひそかに縁を切ろうとしたこととの関係は。
- ・ヨセフの葛藤について考えよう。
- ・マリアの場合は、御使いは直接彼女の前にあらわれた（ルカ1:26～38）が、ヨセフの場合は夢の中であらわれた。何か意味があるだろうか。
- ・御使いはヨセフに「恐れず」と声をかけたけれど、ヨセフは何を恐れていたのだろうか。恐れていたから縁を切ろうとしたのだろうか。
- ・「イエス」という名前と「インマヌエル」との関係は？
- ・22, 23節の出典を確認しておこう。
- ・ヨセフはどうして御使いのこれだけの言葉で全てを受け入れ、マリアを妻として迎えることができたのだろうか。

解読

※「？」を「！」に変えるべく、注解書等からの学びと黙想を続けます。

- ・ヨセフがマリアの妊娠を知ったのは、おそらくマリア自身の口からだろう。なぜなら、ヨセフは「ひそかに」縁を切ろうとしたのだから、このことは関係者以外だれも知らないのだし、思慮深いマリア（ルカ1:29、2:19、2:51）が人

を介して伝えるとは思えない。マリアがヨセフにこのことを伝えることは勇気のいることであっただろうが、それを可能にした力についても考慮する必要がある。

- ・「正しい人」とは、「罪の無い人」ではない。また律法主義者でもない。神様の御心に従って生きることを願っている人のこと。神様の御心に従いたいと願うヨセフにとっては、自分の身に覚えのない婚約者の妊娠は当然受け入れられることではなかった。
- ・マリアはヨセフに、自分の妊娠が聖霊の働きであることは伝えていただろうが、ヨセフは「はいそうですか」と受け入れたわけではない。ヨセフは神様の御心に従いたいと願う「正しい人」ではあったけれど、マリアの身に起こったことを聞かされても、最初から信仰によって受け入れられたわけではない。彼は、最初は神様の御手に委ねようとするよりも、自分の知識と思考の範囲内で思い悩み、解決の道を探ろうとした。彼も特別な人間ではなく、私たちと同じように自分の力に頼りがちな者であった。
- ・ヨセフが律法主義者であったなら、マリアを告発することで彼の「義」を全うできるが、ヨセフは律法主義者ではなく神様の御心に沿いたいと願う人だった。神様の御心は「神と人とを愛すること」である。しかもマリアは婚約者であり愛していないわけがない。
- ・この時、ヨセフの取りうる行動としては、マリアを律法に従って告発するか、黙って妻として迎え入れるか、どちらかが考えられる。しかし、律法主義者でなかったヨセフは、マリアが石打の刑に処せられることになる告発の道は選ばなかった。しかし、黙ってマリアを妻として迎え入れることは、姦淫の罪に目をつぶることになるので「正しい」ヨセフとしては受け入れがたかった。また、男としてのプライドももちろんあっただろう。

- ・ヨセフが選ぼうとしたのは第三の道。姦淫の罪は既婚者か婚約中の不品行について適用されるので、マリアを離縁することを考えた。しかし、彼らが婚約していたことはナザレの町では公然のことであったから、マリアをナザレに置いておくわけにはいかない。新改訳聖書はここを「内密に去らせようとした」と訳しているので、ひそかに離縁してナザレの町から去らせようとした、ということか。マリアと別れることはつらいことだけれど、そうすればマリアの命を救い、姦淫の罪に目をつぶる悩みもできると考えたか。
- ・ヨセフは、この事態に対して自分の知識と思考の範囲内での解決の道を探ろうとしていたが、「正しい人」である彼はこの事態の神様の御前で正しい解決のために祈り続けてもいただろう。御使いがヨセフの夢にあらわれたということは、彼の祈りが聴かれたということではないだろうか。
- ・御使いは「恐れず、マリアを妻に迎えよ」と命じる。マリアの胎の子は聖霊によるので、マリアを妻に迎えても姦淫の罪に目をつぶることはないから、そのことは恐れなくてよいということ。そして、ヨセフを力付けたのは「その子をイエスと名付けなさい」という命令。イエスはヘブル語では「ヨシュア」、「主は救い」という意味。当時のイスラエルではありきたりな名前ではあったが、思い悩んでいた「正しい人」ヨセフにとっては、「主は救い」という事実は大きな慰めとなった。
- ・「主は救い」であることに気付かされたヨセフは、イザヤ書7:14にある22, 23節の預言を思い出したのだろう。「インマヌエル・主は共におられる」。このことがヨセフにとっての救いであった。救い主が共にいてくださるのであれば何も恐れることはない。
- ・最初に戻って、マリアに、ヨセフに自分の妊娠を告げさせた力は、彼女に受胎を告げたガブリエルの「主があなたと共におられる」(ルカ1:28)という言葉であったと思われる。主イエスのこの世での父母となったヨセフとマリアは、二人とも「主が共にいてくださる」ことに喜び

を見出す人たちであった。

要点の整理の黙想

※多岐にわたった解説の内容を整理して、要点を絞り込みます。

- ・ヨセフがこの事態から立ち上がることができたのは、インマヌエルの確信であった。そこにクリスマスの喜びの本質がある。クリスマスの喜びは、インマヌエルの主が私たちのところに来てくださったという喜びだ、ということである。主は、今、私たちと共にいてくださる。主が共にいてくだされば、ヨセフが大丈夫だったように、私たちも大丈夫だ(ローマ8:31)。
- ・そして、クリスマスに来てくださった主は「私の救い」である。イエス様が来てくださったことで、聖書の預言は確かなこととなった。同じように、今は天におられるイエス様がまた来てくださって、私たちを神様の御国に入れてくださる。これが私たちの救いの完成である。
- ・ヨセフもマリアも、主が共にいてくださるといふ約束に力付けられ、自分たちの理性ではとても受け入れがたい「聖霊による受胎」という事実を受け入れたのである。彼らは決して特別な人間ではない。ただただ、聖霊の働きによって、彼らは自分たちに起こったことを受け入れたのである。

子どもたちに伝えたいこと

※一回の説教で子どもたちに伝えられることは限りがあります。今回は以下の二点に絞りました。

- ・ヨセフは特別な人ではない、ということ。
- ・クリスマスの喜びの本質はインマヌエルの恵みであり、私たちもその恵みに与っている、ということ。

実際に原稿を書いてみる

※実際に子どもたちにお話しするつもりで、原稿を書いてみます。書いたもの(PCの場合は印刷して。画面で見るとより良く分かります)を読んでみて、難しい言い回しや言葉がないか、論旨が通らない文章がないか、推敲します。

(伊藤治郎)

(単元のねらい)

イエス様が私たちのところ来てくださったことの喜びの本質をたずねて、クリスマスを迎える心の準備をいたしましょう。神様がイエス様のこの世での父親となったヨセフにしてくださったことから、クリスマス待つ喜びを子どもたちと分かち合しましょう。

神様が一緒にいて下さる

今日は、イエス様のこの世でのお父さんになったヨセフさんに神様がしてくださったことから、どうしてイエス様がお生まれになることがとっても嬉しいことなのかを教えていただきます。

ナザレの村の若い大工さん、ヨセフさんは同じ村のマリアさんと結婚の約束をしていました。そして、ヨセフさんはとっても悩んでいました。この間までは、もうすぐマリアさんと結婚できると思ってうきうきしていたのに、もう今はどん底に落ち込んだような気分です。なんと、自分の知らない間に、マリアさんのお腹に赤ちゃんがいるのです。

「マリアは僕のことが嫌いになって、他の人のことが好きになっちゃったんだらうか？」

ヨセフさんの悩みはそのことだけではありません。昔のイスラエルでは、神様がくださった十戒をもとにした「律法」という決まりがとても大切にされていました。そして、律法では、結婚している女の人や結婚の約束をしている女の人がほかの男の人と仲良くなったら殺されなければならない、と決められていました。ですから、律法のとおりなら、マリアさんは死刑になってしまうのです。

今日読んだ聖書の19節に「ヨセフは正しい人であった」と書かれています。「正しい人」というのは、「罪が無い人」ということではありません。この世に神様の前で罪が無いという人はイエス様以外一人もいないのですから。ヨセフさんは、100%神様に従うことはできないけれど、できるだけ神様に喜ばれるようにしたいと考えている人

でした。ヨセフさんは、こんなことになってしまったら、どうしたら、神様の御心に従うことになるのだろうか、とお祈りもしたことでしょ。そして、自分でもどうしたらよいか一生懸命考えました。

もし、マリアさんのことをみんなの前で明らかにしてしまったらマリアさんは死刑です。でも、それは神様の喜ばれることだろうか？ もし、黙ってこのまま何も知らないふりをしてマリアさんと結婚したら、マリアさんの命は助かりますけれど、自分が律法に目をつぶってしまうことになる。それは神様の喜ばれることだろうか？ それに、ほかの男の人の子どもを黙って育てるなんて、ヨセフさんにとってもつらいことになることでしょう。

いろいろ考えて、ヨセフさんはマリアさんとの結婚の約束をなかったことにして、マリアさんを、二人が結婚の約束をしていたことをだれも知らないような遠くへ行かせることにしました。そうすれば、マリアさんの命は助かります。

そう決めて眠りに就いたヨセフさんの夢に、神様からの御使いが出てきて言いました。「恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである」。マリアはほかの男の人と仲良くなったのではない。お腹の赤ちゃんは神様の子どもだから、マリアと結婚しても律法に目をつぶることにはならない。だから安心してマリアと結婚しなさい。御使いはそう教えてくれたのです。そして、御使いは、生まれてくる子どもを「イエス」と名付けなさい、とヨセフに言いました。「イエス」というのは「主は救い」とい

う意味です。そして、その子は人びとを罪から救う、と御使いは教えました。

夢から覚めたヨセフさんは、神様がお祈りにこたえて、今起こっていることはどういうことなのか、これからどうしたらよいのかを教えてくださいました。ことに気が付いたことなのでしょう。そしてまた、神様にお祈りしながらも、自分の考えでどうしたらよいかを決めようとしていたことに気が付いて、神様にごめんなさいとお祈りしたかもしれません。「主は救い」なのですから、神様にお任せしておけばよかったのです。

「正しい人」ヨセフさんは、聖書もよく読んでいた人でしたから、旧約聖書の預言者イザヤがこう書いていたのを思い出したことなのでしょう。「おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」。おとめ、というのは、まだ結婚したことがない女の人、という意味です。「インマヌエル」というのは、「神様は私と一緒にいてくださる」という意味です。マリアさんはおとめでしたから、マリアさんに起こったこの不思議なことは、イザヤの預言がそのとおりになった、ということです。そして、その子は「神様が私と一緒にいてくださる」ということをみんなにあらわしてくれるのです。御使いは「イエス」＝「主は救い」と名付けるようにヨセフさんに言いました。神様が一緒にいてくださることが私の救いだ、と、神様はヨセフさんに気付かせてくださったの

です。

なんでもできる神様が一緒にいてくださるのだから、もう大丈夫。ヨセフさんは、何の心配もなくマリアさんと結婚しました。そして、イエスと名付ける男の子が生まれてくるのを、楽しみに待っていました。なぜって、その子が生まれてくる時は、「神様が私と一緒にいてくださる」という素晴らしい約束が本当のことになる時なのですから。

イエス様がお生まれになった、ということは、ヨセフさんだけではなく、私たちみんなに「神様はあなたと一緒にいてくださる」という約束が本当のことになった、ということです。今、イエス様は天におられるので、目には見えませんが、イエス様は確かに今も私たちと一緒にいてくださいます。教会に来てイエス様のお話を聞いたり、お祈りしたりすると、イエス様が一緒にいてくださることがわかります。だから、何があっても大丈夫。聖書には、「神様が私たちの味方だったら、だれも私たちの敵になれません」と書いてあります。

さあ、来週のクリスマス、神様が一緒にいてくださるといふ約束が本当のことになった日を、心から喜んでお祝いしましょう。イエス様は、今日も皆さんのすぐそばにいてくださいます。

(伊藤治郎)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 1章23節

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。



〈ねらい〉

神様は不安と悩みの中にあったヨセフと共にいてくださった。「インマヌエル」の恵みを考える。

〈展開例〉**1. 壊された人生の計画……ヨセフの苦悩**

ヨセフとマリアは婚約していました。これから始まる結婚生活を楽しみにしていました。

ところが、突然、彼の思い描いていた計画がガラガラと音を立てて崩れ去るような一大事が起こります。マリアのお腹に赤ちゃんができたと言うのです。「どうしてそんなことに?」「いったい誰の子どもなんだ」「いや、マリアに限ってそんなことはあり得ない」「聖霊によって身ごもったって? そんなことがあるんだろうか」「姦淫の罪で訴えるべきか」「それじゃあ、マリアは殺されてしまうじゃないか」「じゃあ、このまま結婚する?」「でもマリアを受け入れることができるだろうか」「マリアはこれからどうなるのだろう」「僕は一体どうしたらいいんだ」ヨセフの心は揺れ動いたことでしょう。

考えた末に出した結論は、マリアを二人のことを誰も知らない遠くに去らせて、結婚を取りやめにするのでした。そうすれば、マリアも殺されずに済みます。しかし、ヨセフの心は、不安でいっぱいでした。

2. それは神様のご計画だった

そんな時、夢の中で天使が現れました。「ヨセフ、恐れなくてマリアを迎え入れなさい。マリアのお腹にいる赤ちゃんは神の子なのです。マリアは男の子を産みます。その子をイエスと名付けなさい。この子は人間を罪から救ってくださるお方です」

思い悩む中で、開かれたのは天の窓でした。救いは神からやってきます。ヨセフは人生の計画が台無しになり、絶望のどん底にいるときに、まさに神様が共にいてくださることを知りました。眠りからさめると、天使が言われたとおり、マリアを迎え入れました。

3. その名はインマヌエル

イザヤが預言したとおり、イエス様は「インマヌエル＝神は我々と共におられる」と呼ばれるお方としてお生まれになりました。人と神の間にある罪が打ち滅ぼされ、私たちが神様と共にいることができるようになるためです。

こんなはずじゃなかった、もうだめだと絶望し思い悩むとき、神様はあなたと共におられます。ただ主を信頼して待つなら、神様は天の窓を開いて進むべき道を教え、力を与えてくださいます。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ28:20)。

4. 暗号文を解読せよ! → (まりあぬきでよめ)

ありみまよりありおままあとめりまがあみりりまごありまもありまりりまりてあまりりおあまあとりりあこまあのみあまりりりありああをまりりまりうまあありまむりり

5. お菓子でクリスマスリースをつくらう

(次ページ参照)

《お菓子のリース》

【材料】

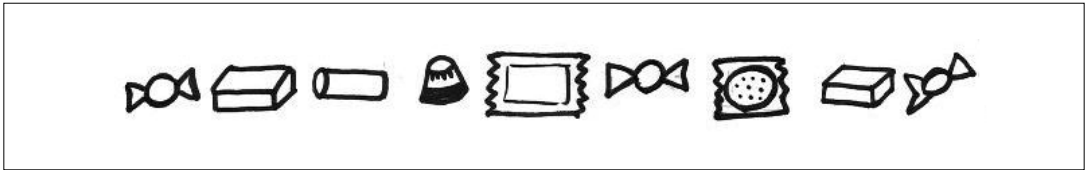
透明セロファン、ハサミ、お菓子いろいろ（袋などに入っているもの）、リボン（太いものと細いもの）
モール、セロテープ

【作り方】

1. お菓子を包めるぐらいの大きさにセロファンを切る。



2. お菓子をセロファンの上に乗せ、くるくると巻いて包む。端をセロテープでとめる。



3. 輪にしてモールでしっかりととめる。太いリボンを真ん中の上につける。
お菓子とお菓子の間を細いリボンかモールで結ぶ。



4. お菓子の代わりに小さなキャンディだけを包むと、更に小さなかわいいリースができます。

1. 東方の占星術の学者たち

ここに登場する占星術の学者とは、魔術と占いが混在しているとはいえ、近代天文学にまさるとも劣らない高度な観測技術によって、さまざまな天体現象を予測する人たちでした。それにより洪水や飢饉、不吉な前兆とされる天体現象を予測したり、農業と政治の基礎となる暦を作成する人たちでした。また戦争の可否や条約締結といった政治的な事柄を王に進言し、吉凶を予測して災いを防ぐなど、政治に甚大な影響力と発言力をもつ政策助言者でした。彼らは東の方、ベルシャからやってきたと考えられます。ユーフラテス中流シッパルに天文台があり、紀元前7年に木星が魚座付近で土星に大接近することも、あらかじめ予測され、それが5回も観測されたという記録が粘土板文書で残されています。そこで彼らは「東方でその方の星を見たので、拝みに来た」のでした。こうしてベツレヘムで幼子イエスと対面した学者たちは、その幼子にひれ伏して礼拝をささげます。「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた」（11節）。「拝む」という言葉は、床にひれ伏して礼拝する、「跪拝する」ということで、もっぱら神に対して用いられる言葉です。それが幼子にあてはめられたことは驚きであり、それによってこの方が神ご自身であることを明らかにしようとしています。

支配者の登場が星によって示されることは、旧約聖書で預言されていたことでした。民数記24章17～19節に「ひとつの星がヤコブから進み出る。ひとつの笏がイスラエルから立ち上がり、モアブのこめかみを打ち砕き、シエトのすべての子らの頭の頂を砕く。……ヤコブから支配する者が出て、残ったものを町から絶やす」とあります。また異邦の王たちがイスラエルの支配者の許に集まり、崇めることについては、詩編72編10、11節で「タルシシュや島々の王が献げ物を、シェバ

やセバの王が貢ぎ物を納めますように。すべての王が彼の前にひれ伏し、すべての国が彼に仕えますように」と詠われます。こうして王をはじめとする異邦人たちがイスラエルの支配者に対して礼拝をささげるために集まり、その方に献げ物をすることが預言されていて、この占星術の学者たちの来訪は、その預言の成就と考えられました。イザヤ60章1～6節でも、「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。見よ、闇は地を覆い、暗黒が国々を包んでいる。しかしあなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる。国々はあなたを照らす光に向かい、王たちは射出するその輝きに向かって歩む。……そのとき、あなたは畏れつつも喜びに輝き、おののきつつも心は晴れやかになる。海からの宝があなたに送られ、国々の富はあなたのもとに集まる。……シェバの人々は皆、黄金と乳香を携えて来る」。こうして、「黄金と乳香」が献げられることが預言されています。

2. 黄金、乳香、没薬

ここで彼らが主イエスに献げたのが「黄金、乳香、没薬」でした。「黄金」が献げられたとは、主イエスが王であることをあらわします。王である方にもっともふさわしい最上の贈り物、それが黄金でした。「乳香」は、香として焚かれる香りの良い白い樹脂で、砕いて燃やすとバルサムのような香りがします。非常に高価で金と同等に取り引きされ、神殿で用いられたもので、神の前へと立ち上っていくわたしたちの祈りをあらわすものとして神に献げられるものでした。ですからそれは主イエスが神であられることをあらわします。しかしそれだけではなく、「没薬」が献げられます。没薬は、スミルナと呼ばれる灌木から取れる、香りの良いオレンジ色の樹脂で、やはり非常に高価なもので、宗教儀式や防腐処理に用いられたものでした。実はこの没薬がもう一回登場します。それは主イエスの死の場面、十字架と埋葬の場面で

す。主イエスが十字架で死に、遺体を取り降ろして墓に埋葬する場面、ヨハネ19章38～40節で「その後、イエスの弟子でありながら、ユダヤ人たちのを恐れて、そのことを隠していたアリマタヤ出身のヨセフが、イエスの遺体を取り降ろしたいと、ピラトに願い出た。ピラトが許したので、ヨセフは行って遺体を取り降ろした。そこへ、かつてある夜、イエスのもとにきたことのあるニコデモも、没薬と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持ってきた。彼らはイエスの遺体を受け取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従い、香料を添えて亜麻布で包んだ」とあります。このように没薬とは、死者を埋葬するとき用いる薬ですから、赤子に贈るにはいささか似つかわしくない代物です。しかしそれがこの幼子に贈られたことに、深い意味があります。

このとき主イエスが、彼らにどのようにして迎えられたか定かではありません。彼らが「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた」とあるだけです。しかし主イエスが占星術の学者たちの礼拝を受ける前、羊飼いたちの礼拝を受けられていました。そのとき主は飼い葉桶の中で寝ておられました。天使は「あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである」(ルカ2:12)と語りました。ここでは主イエスは飼い葉桶の中で寝ています。実はこの「寝ている」という言葉も、もう一回出てきます。それはどこかというよりは主が十字架で処刑されて、墓に葬られる場面です。これは「横たえられる」という言葉で、「墓の中に納めた」(ルカ23:53)とか「遺体を置いた」(マタイ28:6、ヨハネ20:12)と訳されています。つまり飼い葉桶に寝かされた主イエスは、やがて墓に横たえられ、墓に寝かされるということです。没薬はそのために備えられたものでした。こうして「寝ている・横たえられる」という言葉で、飼い葉桶と十字架とが一つのものとして指し示されているのです。それはやがてこの主イエスが十字架で死ぬ、そのことの備えとして献げられたものだということでした。主イエスはどのようにお生まれになったか、それは死ぬために生まれたということです。人間は誰でも一度は死

ぬものだと誰もが考えるでしょうが、そのように自然に死ぬというのではなく、暴力的に殺され、処刑されて死ぬ、そのことを暗示するものでした。どうしてか。私たちの罪のため、私たちの身代わりとして十字架で死ぬために、わざわざお生まれくださった方だということです。そこにクリスマスを喜び祝う意味があるのです。ここに、私たちが救うためにご自分の命を犠牲として差し出してくださった、主の貴い愛があらわされているのです。

3. 最も最上のものを献げる

ここで占星術の学者が主イエスに献げた「黄金、乳香、没薬」、これらはいずれも非常に高価なもので、彼らが献げられる最上のものでした。これほどに高価で最上のものこそ、王であり、神である主イエスに献げるにふさわしいと考えたからでした。それはそうなのですが、実はこれらは彼らの商売道具でもありました。この「黄金、乳香、没薬」によって彼らは星占いをしていた、その道具を主イエスに献げてしまったということでもあります。別の見方をすれば彼らはこれまでの仕事を続けられなくなるということでもあります。つまり彼らはこれによってこれまでの占星術をやめて、その仕事を放棄してしまったということもできるわけです。それはつまり彼らが自分のこれからの人生を主イエスに献げたということです。自分の人生を献げる、これ以上の贈り物があるでしょうか。

そしてそれは彼らがもう二度と星占いはしない、これまでの古い生き方には戻らないということの意味していました。主イエスを王とし、この方を神として、その導きに従って生きていく者には、もはや星占いは必要ないからです。これまで自分自身の知恵と技術、経験と実力によって生きていました。しかし主イエスを自分の主、王としたときから、その必要もなくなりました。これからは、この方の導きに従って生きていけば良いからです。占星術の学者たちは、自分の持てる最高・最上のものを主イエスに献げていきました。それは自分自身でした。私たちは、この方を前にして、何をお献げしていくのでしょうか。(三川栄二)

(単元のねらい)

占星術の学者たちが主イエスに献げた贈り物の「没薬」の意味を掘り下げます。それは主イエスが私たちのために十字架にかかって死んでくださった備えとされたものでした。このように私たちのために命を献げてくださった方に、私たちは何を献げていくかを考えさせてほしいと思います。

最上の献げもの

今お読みしました聖書は、皆さんもよく知っているクリスマスの物語の一つです。主イエスが生まれたのは「ヘロデ王の時代」とされています。ヘロデは紀元前4年に死にますから、主イエスの誕生はその前ということになります。その誕生に際しては不思議な星の出現があったことが記されますが、このヘロデの在位中にさまざまな天体現象が次々と起こったことが記録されています。まずは紀元前12年のハレー彗星の出現でした。その後紀元前7年には木星と土星が大接近し、5、9、12月には重なり合って見えたことが記録されています。紀元前6年2月には、これに火星が加わって、三つの惑星が一塊になって見えたことが確認されています。それは本当に息を呑むほど大きく光り輝いたに違いありません。紀元前5年には3～4月にかけて7日間ほど山羊座の近くに彗星があらわれ、夜が更けるにつれて南の空から西の方へと移っていくように見えたそうです。その1年後の紀元前4年3～4月にも、鷲座の方向に彗星があらわれたということでした。こうした出来事を考え合わせると次のように予想することができると思います。

まず紀元前12年のハレー彗星で、天変地異に対する関心が呼び起こされる中で、7年の木星と土星の大接近、さらには6年の火星も加わった大接近によって、パレスチナで重大なことが起こることが予測されます。そして5年に現れた彗星で、占星術の学者たちは、駆り立てられるようにしてパレスチナへと旅立っていった……。彼らはこう

した天変地異を観測する中で、「ユダヤ人の王」の誕生を予測したのです。というのは木星は世界支配の星、魚座は終末時代、土星はパレスチナの星とされていたので、それはパレスチナに終末時代の世界支配者があらわれるということの意味すると理解されたからでした。占星術の学者とは、マジとも呼ばれ、近代天文学にまさるとも劣らない高度な観測技術によって様々な天体現象を予測する人たちでした。それにより不吉な前兆とされる日食や月食といった天体現象を予測して、洪水や飢饉を防ぐために働いていた偉い人たちでした。彼らは東の方ベルシャからやってきたと考えられます。今のイラン、イラクに相当する場所ですが、ユーフラテス中流シッパルに天文台がありました。そして紀元前7年に木星が魚座付近で土星に大接近することも、あらかじめ予測され、それが5回も観測されたという記録が粘土板文書で残されています。そこで彼らは「東方でその方の星を見たので、拝みに来た」というわけですが、これは決しておとぎ話ではなく、実際にありうることだったのです。

こうしてベツレヘムで幼子イエスと対面した学者たちは、その幼子にひれ伏して礼拝をささげます。11節の「拝む」という言葉は、床に体をこすりつけ、ひれ伏して礼拝するということで、それによって主イエスが神であることを明らかにしました。学者たちは主イエスを神として礼拝したのでした。この占星術の学者たちの来訪は、旧約聖書に預言されていました。イザヤ60章1～6節

に「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。……あなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる。国々はあなたを照らす光に向かい、王たちは射出でその輝きに向かって歩む。……そのとき、あなたは恐れつつも喜びに輝き、おののきつつも心は晴れやかになる。海からの宝があなたに送られ、国々の富はあなたのもとに集まる。……シェバの人々は皆、黄金と乳香を携えて来る。こうして、主の栄光が宣べ伝えられる」とあり、「黄金と乳香」が献げられることが預言されています。主イエスに「黄金」が献げられたとは、主イエスが王であることをあらわします。王である方にもっともふさわしい最上の贈り物、それが黄金です。「乳香」は、香として焚かれる香りの良い白い樹脂で、砕いて燃やすとバルサムのような香りがします。非常に高価で金と同等に取り引きされたもので、神の前へと立ち上っていくわたしたちの祈りをあらわすものとして神に献げられました。ですからそれは主イエスが神であられることをあらわします。しかしそれだけではなく、ここでは「没薬」が献げられます。没薬は、スミルナと呼ばれる灌木から取れる、香りの良いオレンジ色の樹脂で、やはり非常に高価なもので、防腐処理に用いられたものでした。この没薬、もう一回登場しますが、どこかわかりますか。主イエスの死の場面、十字架と埋葬の場面に登場します。主イエスが十字架で死に、遺体を取り降ろして、アリマタヤのヨセフが墓に埋葬する場面でこのように記されます。ヨハネ19章39～40節「そこへ、かつてある夜、イエスのもとに来たことのあるニコデモも、没薬と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持って来た。彼らはイエスの遺体を受け取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従い、香料を添えて亜麻布で包んだ」。このように没薬とは、死者を埋葬するときに用いる薬ですから、幼子にプレゼントするのはふさわしくない物です。しかしそれがこの幼子に贈られたことに、深い意味があります。

主イエスが占星術の学者たちの礼拝を受ける前、羊飼いたちの礼拝を受けました。そのとき主は飼葉桶の中で寝ておられました。実はこの「寝ている」という言葉も、もう一回出てきます。それはどこかというよりは主が十字架で処刑されて、墓に葬られる場面です。これは「横たえられる」という言葉で、「墓の中に納めた」とか「遺体を置いた」と訳されます。つまり飼葉桶に寝かされた主イエスは、やがて墓に横たえられ、墓に寝かされるというのです。没薬はそのために備えられたものでした。それはやがてこの主イエスが十字架で死ぬ、そのことの備えとして献げられたものだという事です。主イエスは どうしてお生まれになったか、それは死ぬために生まれたということです。それは私たちの罪のため、私たちの身代わりとして十字架で死ぬためでした。そこにクリスマスを喜び祝う意味があるのです。ここに、私たちを救うためにご自分の命を差し出してくださった主の愛があらわされているのです。

ここで占星術の学者が主イエスに献げた「黄金、乳香、没薬」はいずれも非常に高価なもので、彼らに献げられる最上のものでした。高価で最上のものこそ、王であり、神である主イエスに献げるにふさわしいと考えたからです。同時にこれらは彼らの商売道具でもありました。この「黄金、乳香、没薬」によって彼らは星占いをしていた、その道具を主イエスに献げてしまったということです。つまり彼らはこれによってこれまでの占星術をやめ、その仕事を放棄してしまったということもできるわけです。それにより彼らは自分のこれからの人生を主イエスに献げたのです。自分の人生を献げる、これ以上の贈り物があるでしょうか。私たちは、私のために命を献げてくださった方を前にして、何をお献げしていきましょうか。

(三川栄二)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 12章1節

自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。

〈ねらい〉

ワークをしながら、物語を振り返る。私たちも主に献げて生きる者へと導かれたい。

〈ワーク〉

☆東の方から来た学者たちは、何にみちびかれてやってきましたか。

☆学者たちはイエス様に何をささげましたか。

…… 王のしるし

…… 死体にぬる薬
(十字架の死に備えて)

…… 神にささげる祈りを表す
(燃やすとよい香りがする)

☆学者たちは何をしにエルサレムにやって来たのですか。

☆あなたがイエス様にささげたいと思うものは何ですか (物でなくてもよい)。

☆救い主はどこで生まれると^{よげん}預言されていきましたか。

→参考になる絵本「アルタバンのたび」(いのちのことば社) アルタバンが献げたものとは？

☆ユダヤ人の王が生まれると聞いて、困ったのはだれでしたか？

〈ピングゲーム〉

①白紙のカード (名詞ぐらいの大きさ) を30枚ほど用意する。(100円ショップにある)

②カードにクリスマスに関連する言葉を一つずつ書く。(25以上にはなるように)

(例) ツリー・ひいらぎ・リース・星・マリア・ヨセフ・天使・キャンドル・ケーキ・ヘロデ・インマヌエル・オーナメント・雪・ひつじかい・飼い葉おけ・ベツレヘム・黄金・乳香・もつ葉・アドベント・プレゼント・リボン・おとめ・光・ベル・もみの木・長ぐつ・ポインセチア・みどりご・平和の君・永遠の父・力ある神・驚くべき指導者・ダビデの子・馬小屋・クランツなど。

☆それはなぜだと思いますか。

③各自が別の紙に25個のます目を書き、カードの言葉を各ますの好きなどころに書く。

④カードをよくきり積み重ねて裏返し、中央に置く。カードをめくり、出てきた言葉のます目に○をつける。5つそろったらピング。

☆幼子 (イエス様) にお会いした学者たちは何をしましたか。

() 赤ちゃんをだっこした。

() ひれふして^{れいはい}礼拝した。

() おもちゃで^{あそ}遊んだ。

⑤ピングになった人のために小さなプレゼントを用意しておく。

テキスト	詩編 103 編1～5 節
参照教理問答	ジュネーヴ教会信仰問答 問111
	ウェストミンスター小教理問答 問20
	ウェストミンスター大教理問答 問80
	ハイデルベルク信仰問答 問1, 60

〈聖書テキストの解説と黙想〉

本詩の主題は恵みの契約における神の慈しみへの感謝。詩編では感謝は賛美にあらわされるため、「たたえよ」との呼びかけは「感謝せよ」との促しに等しい。説教の焦点を絞るために本文を1～5節に限定するのはよいが、まずは全体をよく読んでたたえられる神とたたえる民との関係を捉えておきたい。本詩の視野には被造世界全体が捉えられているが(22節)、冒頭の段落で呼びかける「わたし」を含めて神をはめたたえる主体は「主を畏れる人」(11, 13, 17節)「御言葉を成し遂げるもの」(20節)と呼ばれる契約の当事者である(7, 18節)。神の言葉が保証する切り離し難い関係の中に立つてこそ、神の限りない慈しみへの感謝と信頼とが歌になる。「わたし」は「わたしたちイスラエル」の一人であり、それ故に絶大な神の恩恵を受けている。それは選びの民に与えられた特別な恵みであって、創造された世界全般に及ぶ一般的な恵みとは一線を画す。

まずは本詩全体から、旧約から新約へと流れ込む神の選びの歴史を想起したい。神はイスラエルを選んで特別な愛顧のもとに置かれたが、御子キリストを世にお遣わしになって古い契約を更新され、キリストにあって選ばれた新しいイスラエルの民を教会として世にあらわされた。「わたし」が感謝をさげることができるのは、この恵みの共同体の一員として聖書に蓄えられたすべての救いの証しを共有するからである。「わたしの魂」が賛美を通して神に結びつき、被造世界全体を包み込む無限大の憐れみに確かな手触りをもって接するためには、14節以下に描かれるような人生の儚さを旧約のイスラエルの命運と共に思い巡らして、罪深い世界の悲惨さに独力では太刀打ちできない今の自分を見出すことも必要になる

が、「わたし」という言明に引きずられて神の憐れみを感傷的に内面化しないよう注意したい。

詩編の簡潔な文体では散文に比べて一語一語が重い。短い段落なので尚更、一語を大切に黙想を深めたい。

「魂」は人間の精神性を反映するが抽象的ではなく身体を伴う語である。1節では「内にあるもの」すなわち「はらわた」という語に補われて、人間全体を指す。従って、「心の底から」「腹の底から」の賛美を促すものと受け止めてよい。筆者は「わたしのいのちよ」という訳がよいと思う。

2節の「御計らい」は「報い」という語で、ここでは神がイスラエルに対して報いられた恵みの御業を指す(あるいは約束された報い、との将来性を読み込むことも可)。「忘れてはならない」のはそこに感謝／賛美の根拠があるため。つまり、わたしたちの賛美は、神の恵みの御業が引き起こしたものだ。「忘恩は罪」というカルヴァンの指摘も一応心に留めておきたいが、だから感謝しなければならないと当為で迫っても本詩の導く内的な促しは生じない。

3節から5節は三行ずつに区分できる。最初の行では「赦す」「癒す」「贖う」と三つの動詞で神の恵みの業があらわされる。これらの動詞に時制は無く(分詞)、むしろ神の属性として過去にも未来にも適用できる。歴史を思い起こせば神はイスラエルを「赦し」「癒し」「贖った」のであり、未来に思いを馳せれば罪は「ことごとく」赦され、病は「すべて」癒され、「命は墓から」(原文：穴から)贖い出される。

前半が救済であれば後半の三行ではより肯定的に栄誉の授与が並ぶ(標題にあるダビデを重視すれば、ダビデの王位の刷新となる)。神の慈しみと憐れみによって王冠が授与され、良いものに

日々満たされ（別訳：美しい装いに満足し）、驚のような力強い若さが新たに甦る。その慈しみと力に限界のないお方に信頼して、「わたしの魂」は賛美／感謝に震えて御国の到来を待つ（22節）。

〈子どもたちに対して〉

上記で解説された段落には、イエス・キリストにあって成就した救いの恵みが表示されています。イエス・キリストを信じて日々を過ごす私たちには、今キリストのもとにある助けと誇らしさが確かな約束として蓄えられていて、恵みの手段を通して今のうちからその分け前に与っています。

一年を歩んで来た子どもたちには、それぞれ記憶に残るイベントがあったことと思います。悲しい出来事の内には、それでも神さまはその辛さを乗り越えさせてくださる、との慰めが本詩から与えられます（3, 4節）。楽しい出来事の内には、もっと積極的に神さまの限りない善意が映し出されてくるはず（4, 5節）。いずれにせよ、一

年の歩みを振り返って、どんな時にも神さまは私たちから離れないでいてくださったということを子どもたちと一緒に思い起こして、恵みの神さまに感謝したいと思います。

一年を振り返る時、教会学校で学んできた聖書のお話を振り返ってもよいかもしれません。ここでは、旧約聖書の物語が、また主イエスの物語が思い浮かぶのではないかと思います。そうして、イエスさまを信じて聖書から学び続ける子どもたちを、どんなに神さまが愛しておられるかを印象付けることは、本詩の意図に則したことです。

そのようにして神さまの恵みのもとので過ごした一年を振り返ることができたとき、新しい年への期待が生まれます。来年もまた神さまは私たちに十分な愛を注いでくださることを子どもたちに確かなこととして伝えたいと思います。その確かさは、イエスを信じ、聖書を学び続けることだということを伝えて、教会学校をとおして恵みの契約の中に留まるよう、子どもたちを励ましたいと思います。（牧野信成）



(単元のねらい)

教会学校で共に過ごしてきた一年の歩みを振り返って、それが確かな神の顧みの中にあったことを想い起こし、心から神に感謝する思いを共有したい。その確かさは福音に示されたキリストにあり、キリストによる贖いは完全であることを改めてここで覚えたい。そして、天の父であり、最良のものをいつも用意してくださる神の待っている新しい年へと子どもたちをふさわしく送り出し、教会学校へ通う新たな意欲へとつなげたい。

神さま、一年をありがとう。

今年も最後の教会学校となりました。一年間、皆さんと一緒に礼拝をささげることができてうれしく思います。これも私たちをいつも教会学校に集めてくれたおかげですから、天の父なる神さまに心から感謝します。

皆さんにとって、今年はどうな一年だったでしょうか。振り返ってみて、なにか心に残る出来事があったでしょうか。とても良いことがあった、と思出す人が誰かいますか？

一子ども：僕はテストで一回だけ百点をとりました。それはすごいですね！ たくさん勉強したのかな。それはね、神さまが、あなたに勉強する楽しさを教えてくださったのだと思います。神さまが勉強する力を〇〇君にくださっていてね、もっともっといろんなことを学んで力をつけることができるように、きっと励ましてくださったんですね。

でも、皆さんの中には悲しい思いをした人もあるかもしれません。今年あまりいいことがなかった、と思う人は誰かいますか？ 話したくないかもしれないけど。一子ども：私は学校に嫌いな子がいて、学校へ行くのが嫌で……—そう。では神さまは〇〇さんには今大事なことを教えてくれようとしているのかな。その子は意地悪なのかな。いじめられそうだったらお父さんお母さんに話してね。それも難しいようだったら先生に話してみて。それからちょっと考えてみようかな。なんでその子が嫌なのかな。どうしたらその子が嫌

でなくなるのかな。その答えは神さまがきっと知っている。つらいかもしれないけれど、学校が楽しくなるように一緒にお祈りしようね。きっと神さまが答えを教えてくださいから。

みんな話してくれてありがとう。今年もいろいろなことが先生の知らないところでみんなにもあったと思います。でも、先生は、みんながこうして日曜日に教会学校に来てくれたことをとても嬉しく思います。こうしてみんなを神さまが大切にしてくれていたことに感謝しています。

今日は詩編の御言葉を読みました。「わが魂よ、主をたたえよ」とありました。自分で自分の心に話しかけて、神さまに感謝をしよう、と言っています。この人はイスラエルの人です。「ダビデの詩」とありますから、ダビデ王かもしれません。では、どうしてダビデは「主をたたえよ」と言っているのでしょうか。いいことがあったのかもしれない。ダビデは敵と戦ってたくさんの勝利を手に入れました。ダビデはイスラエルの王になって、平和な国を造りました。でも、ダビデはたくさんの悲しい思いもしました。サウル王に追われて山に逃げたり、神さまの御旨に合わない大きな罪も犯しました。でも、どんなことがあってもダビデはきっと「わが魂よ、主をたたえよ」と言ったに違いありません。たとえどんなことがあっても、いろいろ起こったことを思い返して、神さまを賛美する心を忘れなかったと思います。

なぜでしょうか。ダビデは神さまが良いお方で

あることを信じて疑いませんでした。ダビデは王さまでしたけれども、神さまにひどく叱られるような罪を犯したこともありました。けれども、天の神さまが赦してくれることも信じていました。ダビデは戦士でしたから、いろんな人たちに命を狙われました。けれども、天の神さまがきっと助けてくれるに違いないといつも信じていました。天の神さまは目に見えないお方ですけれども、どんな時にも、どこにいても、自分のことを絶対見捨てないでいつも見てくださることを、ダビデは信じて疑いませんでした。時には我慢できないようなつらいこともありました。家から追い出されて、山の洞穴でお腹をすかして過ごさねばならないこともありました。生まれたばかりの赤ちゃんが病気で死んでしまうような悲しいこともありました。でも、神さまには神さまのお考えがあって、神さまは私を離れないでくださることを信じて疑いませんでした。だから、ダビデは「わが魂よ、主をたたえよ」といって、いつも神さまは良いお方であって、自分のことを愛してくださることを信じて、神さまに感謝することを忘れませんでした。

今日の詩編にこうあります。神さまのことが次のように歌われています。「主はお前の罪をことごとく赦す」「主はお前の病をすべて癒す」「主はお前の命を墓から贖い出してくださる」。神さまはどんな罪でも赦してくださる。神さまはどんな病気で治してくださる。神さまは、わたしが死んで墓に葬られても、墓の中から起き上がらせてくださる。神さまのことを本当に信じるダビデやイスラエルの人々は、何でもおできになる力ある神さまが、絶対自分を見捨てないことを固く信じていました。

でも、それは本当でしょうか。わたしに悪いことが起こるのはわたしが何か悪いことをしたせいではないでしょうか。実は神さまは怖い方で、罪を犯したことのあるダビデを嫌いになったこともあるのではないのでしょうか。

いいえ、そんなことはありません。もちろん、神さまはダビデをえこひいきしたわけではありません。ダビデだけが特別に愛されたのではなくて、神さまはご自分がお選びになったイスラエルの人びとをみんな大切にしておられました。そして、ダビデの信じたとおり、神さまはどこまでもご自分を信じる人びとを大切にしてくださることが、やがてわかるようになりました。それは、イエスさまがこの世に来てくださったからです。

神さまは、この世界にイエスさまをお遣わしになって、ご自分を信じる人びとの罪をすべて赦すと言ってくださいました。みんなの罪が赦されるために、イエスさまが十字架にかかってくださいました。また、どんな病気も癒される、ということイエスさまは証明してくれました。確かに、病気で死ぬ人はたくさんあります。けれども、神さまは死んだイエスさまを復活させました。どんな病気で死んだとしても、神さまはご自分を信じる人たちを復活させて、新しい命を与えてくださいます。

ダビデが信じた神さまの愛と力は嘘ではありません。イエスさまが証明してくださったように、神さまは教会学校に集まる私たちを大切くださって、どんな時にも離れずについて、私たちに必要な最も良いものを備えてくださっています。

今年は良いことよりも悪いことが心に残ってしまった人もいます。でも、神さまはそういう皆さんを嫌っているのではなくて、みんながもっと強くなることができるように、そして、みんながもっと神さまから良いものを後で受け取ることができるように、みんなのことを考えてくださっています。今年、こうして教会学校に通い続けることができたのも神さまの恵みです。みんなのことを神さまが大切に思ってくださいていることの証拠です。新しい年も、天の父なる神さまが、みんなのために一番良いことを準備してくださっていることを信じて、神さまに守られたこの一年を感謝したいと思います。(牧野信成)

[今週の暗唱聖句] ヨハネの手紙一 4章10節

わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、
わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。

〈ねらい〉

一年を振り返り、神様の恵みに感謝する。

〈展開例〉**1. 神様がくださる恵み**

詩編103:3～5から、主は私たちに何をしてくださるか、書き出してみましょう。例えば、

- ・罪をゆるしてくださる。
- ・病をいやしてくださる。
- ・新しい命をくださる。
- ・良いもので満たしてくださる。
- ・新しい力を与えてくださる。

(自分の言葉で書いてみましょう)

2. 一年を振り返ろう

この一年、どんなことがありましたか。家で、学校で、教会で、楽しいことや悲しいこと、いろいろなことがあったと思います。ほめられたことや、願いがかなったこと、病気になったり、けんかをしたり、しかられたこともあったと思います。

思い出して表に書いてみましょう。

	楽しかったこと	悲しかったこと
学校で		
家で		
教会で		

3. 感謝を献げよう

神様は私たちがうれしいときや楽しいときだけ、一緒にいてくださるわけではありません。振り返ってみると、悲しく辛い時に共にいて慰め、助けてくださったことを知るでしょう。

辛かったことをとおして成長することができたこともあったと思います。また、神様が祈りに応

えてくださった一つひとつのことを思い出してみましょう。

それらの恵みを何ひとつ忘れてはならないと神様は言われます。

4. 一緒にお祈りしよう

みんなで手をつないで、輪になって、お祈りのリレーをしましょう。一人ずつ、短く、感謝の祈りを献げましょう。新しい年もまた神様が導いてくださるようにお祈りしましょう。

5. おやつタイム

一年を振り返りながらお茶とお菓子で交わりをしましょう。

簡単なおやつレシピ(お麩のキャラメルラスク)**◆材料**

- ・お麩20g
(手でひと掴み)
- ・グラニュー糖
大さじ1～2
- ・バター 20g

◆作り方

- ①フライパンにバターとお麩を入れ、火をつけます(弱火)。バターを溶かしながら、お麩に絡める。
- ②麩がバターを全部吸い取ったら、中火にして軽く炒ります
- ③もう一度弱火にしてグラニュー糖を全体にふりかけます。
- ④グラニュー糖が溶けて、ちょっと飴色になったら出来上がり。
(<http://cookpad.com/recipe/1081955>より)

2014年1～3月カリキュラム（第52号）

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
1月5日 新年	新しい一年に向けて	—	子ども7, 19, 21, ウ小4
		詩編90編	詩編90:1
日々の歩みが恵みによって与えられ、愛の中で導かれることを覚え、感謝しよう。			
12日	祈りのお手本	問77	ウ小99、ウ大186, 187 他
		ルカ11:1-4	ルカ11:1
私たちのために祈って下さる主イエスに感謝し、主の祈りをお手本としよう。			
19日	天の父よ	問78	ハイデ120-121、ウ小100
		ローマ8:12-17	ローマ8:14
「愛する子！」と主イエスを通して呼んで下さる方を、父と呼ぶ幸いを味わおう。			
26日	御名をあげめさせたまえ	問79	—
		マタイ6:9	詩編8:2
祈りは、神を神とする事。そこに人生の目的と価値がある。神の栄光に生きよう。			
2月2日	御国を来たせたまえ	問80	ウ小102、ハイデ123 他
		マタイ6:33	マタイ6:33
人は信仰の戦いにある時こそ祈り、御国を待望する祈りによってこそ慰められる。			
9日 (信教の自由)	御心の天になるごとく	問81	ウ小103、ウ大192
		マタイ26:36-46	ルカ1:38
祈りは、神のご意志に心を開く不可欠の手立て、御心実現こそ最大の幸福。			
16日	日用の糧を与えたまえ	問82	ウ小104、ハイデ125
		マタイ6:11	マタイ6:11
私たちに必要なすべてを神に求めることが、神の願い。素直に飾らず祈ろう。			
23日	我らの罪を赦したまえ	問83	ウ大194、ウ小105、ハイデ126
		マタイ6:12	マタイ6:12
罪の赦しなしに人は生きられない。赦された喜びに生き、赦す人にしていただく。			
3月2日	悪より救いだしたまえ	問84	ウ小106、ハイデ127
		マタイ4:1-11	マタイ6:13
何度失敗しても、罪の力を打ち破られた主イエスが共にいることを忘れないで。			
9日 レント	頌栄	問85	ウ小107、ハイデ128
		歴代誌上29:10-13	歴代誌上29:11
拙く弱々しい祈りでも神が神でいらっしゃるの聴き応えて下さる。賛美の祈りを			
16日 レント	アーメン	問85	ウ小107、ハイデ129
		コリント二1:18-22	コリント二1:20
主イエスに結ばれ、支えられ、主のおかげで祈れた幸いと感謝の告白がアーメン。			
23日 レント	キリストの受難の予告(1)	—	子ども26
		詩編22:1-22	ヘブライ5:7
父なる神に捨てられる悲痛な叫びのなかで、父を賛美し、従う主イエスに感謝。			
30日 レント	キリストの受難の予告(2)	—	ハイデ16-18
		マタイ26:6-13	ヨハネ3:16
主イエスの死の予告にひとり耳を傾け、備えた女性に学ぼう。			

2013年度 年間カリキュラム (第49～52号)

(2013年4月～2014年3月)

二年サイクル カテキズム カリキュラム 第2年 (子どもカテキズム問36～85)

	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
2013年 第49号	4月7日	進級式	復活のときの祝福	問36
	4月14日		感謝の生活	問37
	4月21日		感謝としての服従	問38
	4月28日		十戒—感謝の道しるべ	問39
	5月5日		神と人への愛	問40
	5月12日	母の日	贖いのみわざ—過越—	問41, 42
	5月19日	聖霊降臨祭	聖霊と終わりの時代	—
	5月26日		過越の成就—キリスト	問41, 42
	6月2日		第一戒 神を神とする	問43, 44
	6月9日	花の日	第二戒 刻んだ像の禁止	問45, 46
	6月16日	父の日	第三戒 神の御名	問47, 48
	6月23日		第四戒 安息日の聖別	問49, 50
	6月30日		第五戒 父母を敬う	問51, 52
第50号	7月7日		第六戒 殺してはならない	問53, 54
	7月14日		第七戒 姦淫してはならない	問55, 56
	7月21日		第八戒 盗んではならない	問57, 58
	7月28日		第九戒 偽証してはならない	問59, 60
	8月4日		第十戒 むさぼってはならない	問61, 62
	8月11日	(平和)	平和を創り出す	—
	8月18日		神のおきてを喜ぶ生活	問63
	8月25日		十戒の完成者キリスト	問64
	9月1日		教会に生きる (一)	問65
	9月8日		教会に生きる (二)	問66
	9月15日	(敬老の日)	信仰と悔い改め	問67
	9月22日		恵み的手段	問68
	9月29日		神の御言葉—聖書—	問69

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
第51号	10月6日		神の御言葉—説教—	問69
	10月13日		御言葉への聴従	問70
	10月20日		礼典	問71
	10月27日	宗教改革記念	宗教改革	問24
	11月3日		洗礼	問72, 73
	11月10日		主の晩餐	問74, 75
	11月17日		祈りとは何か (一)	問76
	11月24日		祈りとは何か (二)	問76
	12月1日	アドベント	待降節	—
	12月8日	アドベント	待降節	—
	12月15日	アドベント	待降節	—
	12月22日	降誕祭	降誕祭	—
	12月29日	年末	一年の感謝	—
2014年	1月5日	新年	新しい一年に向けて	—
第52号	1月12日		祈りのお手本	問77
	1月19日		天の父よ	問78
	1月26日		御名をあげさせたまえ	問79
	2月2日		御国を来たらせたまえ	問80
	2月9日	(11 信教の自由)	御心の天になるごとく	問81
	2月16日		日用の糧を与えたまえ	問82
	2月23日		我らの罪を赦したまえ	問83
	3月2日	(5- レント)	悪より救い出したまえ	問84
	3月9日	レント	頌栄	問85
	3月16日	レント	アーメン	問85
	3月23日	レント	受難節	—
	3月30日	レント	受難節	—

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに13年目に入り、第51号まで発行して参りました。中部中会ではほとんどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ70教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額 30万円／年

送金先 郵便振替 伊藤治郎

00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

〈執筆よりひとこと〉

●イエス様が愛してやまない子どもたちの信仰教育のために、奉仕できることを感謝します。

(漆崎春美)

〈あとがき〉

●第51号をお届けします。今号も多くの方々のご協力をいただきました。神様と執筆者・読者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

●分級展開例は、しばらくの間、幼稚科・小学科下級・小学科上級・中学科の4つの分級展開例から、ひとつのみを掲載することになります。できるだけ早く、元の形に戻せるようにお祈りください。

●今回は、昨年11月に東部中会教会教育研修会でなされた発題を掲載させていただきました。これらは、東部中会「まじわり」に掲載されたもの(及びその改訂増補版)です。掲載を許可して下さった発題者及び東部中会教育委員会、転載を許可して下さったまじわり誌委員会に感謝いたします。

●編集会議に臨むたびに、体は疲れていても、心は晴れやかになります。教案誌のために献身する仲間たちと顔を合わせ、言葉を交わし、祈りと奉仕をささげることで、自分が本当に尊い働きに召されているのだということを、改めて味わわせていただけるからです。ご購入くださっている教師がたども、同じ思いを分かち合えるような教案を提供することができれば、誠に幸いです。私たちが召したもう主イエスが、この小さな者たちの働きを、神の国の完成のための業として清め、用いてくださいますように。

(二宮 創)

●私どもの子どもの教会の礼拝式の説教の聴き手は、幼稚園児から高校生まで。さらに、契約の子を中心にしながらも地域の子どもたちも加わります。これほどの年齢の開き、信仰の環境に相違のある子どもたちに御言葉を届けることは、言わば

超人的なこと。同時に、ほとんど教会だけがなしうることであらうと思います。まさに聖霊のお働きを信じて祈る以外にありません。教師…。大きな特権ではありますが、時に疲れ、重荷となることもあるでしょう。主日の朝ごとに全国で捧げられている皆さまの尊いご労苦を主が豊かに実らせてくださいますように。弊誌が少しでもお役に立てますようにと祈りつつ。Soli Deo Gloria!

(相馬伸郎)

●日本キリスト改革派教会の教育機関紙『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。当教案誌編集部より提供させていただきます。それぞれの祈りの場が主の祝福に満たされますように。

●教案誌のためにご奉仕くださる方を募っています。ぜひ、編集部にお気軽に声をかけてください。問い合わせは相馬伸郎まで。

E-mail: iwanoue@me.ccnw.ne.jp

〈購読の申し込み〉

●『教会学校教案誌』をぜひご購入ください。また、品切れになっていた『子どもカテキズム』を再刷しました。現在のカリキュラムは、『子どもカテキズム』に基づいて編まれています。ぜひお求めください。教案誌はバックナンバーもあります。第44号までは一部500円で販売しています(品切れの号もあり)。

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。『子どもカテキズム』(300円)、副読本『主は羊飼』(800円)のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所 辻幸宏まで

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

E-mail: yukihiro.tsuji@nifty.ne.jp



いつも
喜んでいなさい



絶えず祈りなさい



どんなことにも
感謝しなさい

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	伊藤治郎 (四日市教会長老)	安田直人 (田無教会牧師)	大西良嗣 (滋賀摂理教会牧師)
巻頭説教	片岡 継 (徳島教会牧師)	長谷川潤 (四日市教会牧師)	相馬伸郎 (名古屋岩の上传道所宣教教師)
日曜学校・教会学校訪問	間中日登美 (田無教会日曜学校校長)	赤石めぐみ (伊丹教会信徒)	袴田清子 (北神戸キリスト伝道所信徒)
講演	風間義信 (江古田教会牧師)	伊藤治郎 (四日市教会長老)	三川栄二 (稲毛海岸教会牧師)
	田好ゆり (江古田教会信徒)	牧野信成 (西神伝道所協力牧師)	
	豊川 慎 (湘南恩寵教会執事)	分級展開例	
	河西俊身 (横浜中央教会長老)	小学科上級 漆崎春美 (金沢伝道所信徒)	
聖書黙想・説教展開例	木下裕也 (名古屋教会牧師)	イラスト作画	
	辻 幸宏 (大垣伝道所協力牧師)	表紙 田口裕美 (尾張旭教会会員)	
	二宮 創 (太田伝道所宣教教師)	本文 岡野美佳 (青葉台キリスト教会会員)	

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上传道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
二宮 創	太田伝道所宣教教師
長谷川潤	四日市教会牧師
安田直人	田無教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』
2013年10・11・12月号 (季刊)
第51号
2013年8月25日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上传道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円 (本体価格)
